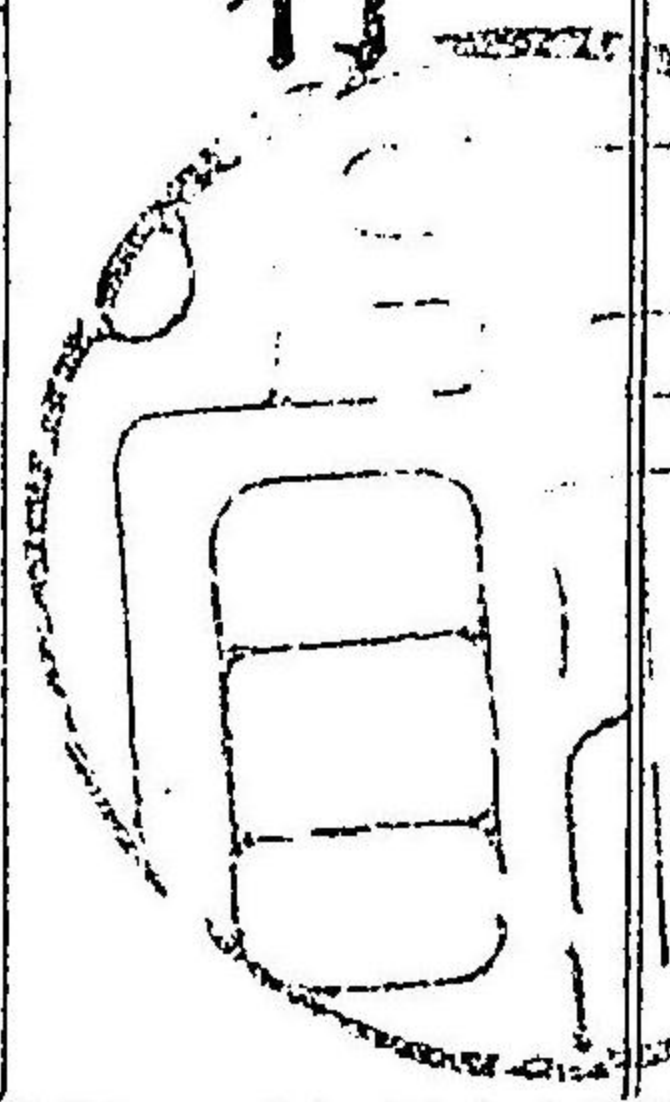


司法部  
省藏版

院民事判決錄

明治二十二年十二月印行



~~02/2/14/10~~      02/2/11/10

大審院民事判決錄 自明治十二年七月  
至明治十二年八月

目錄

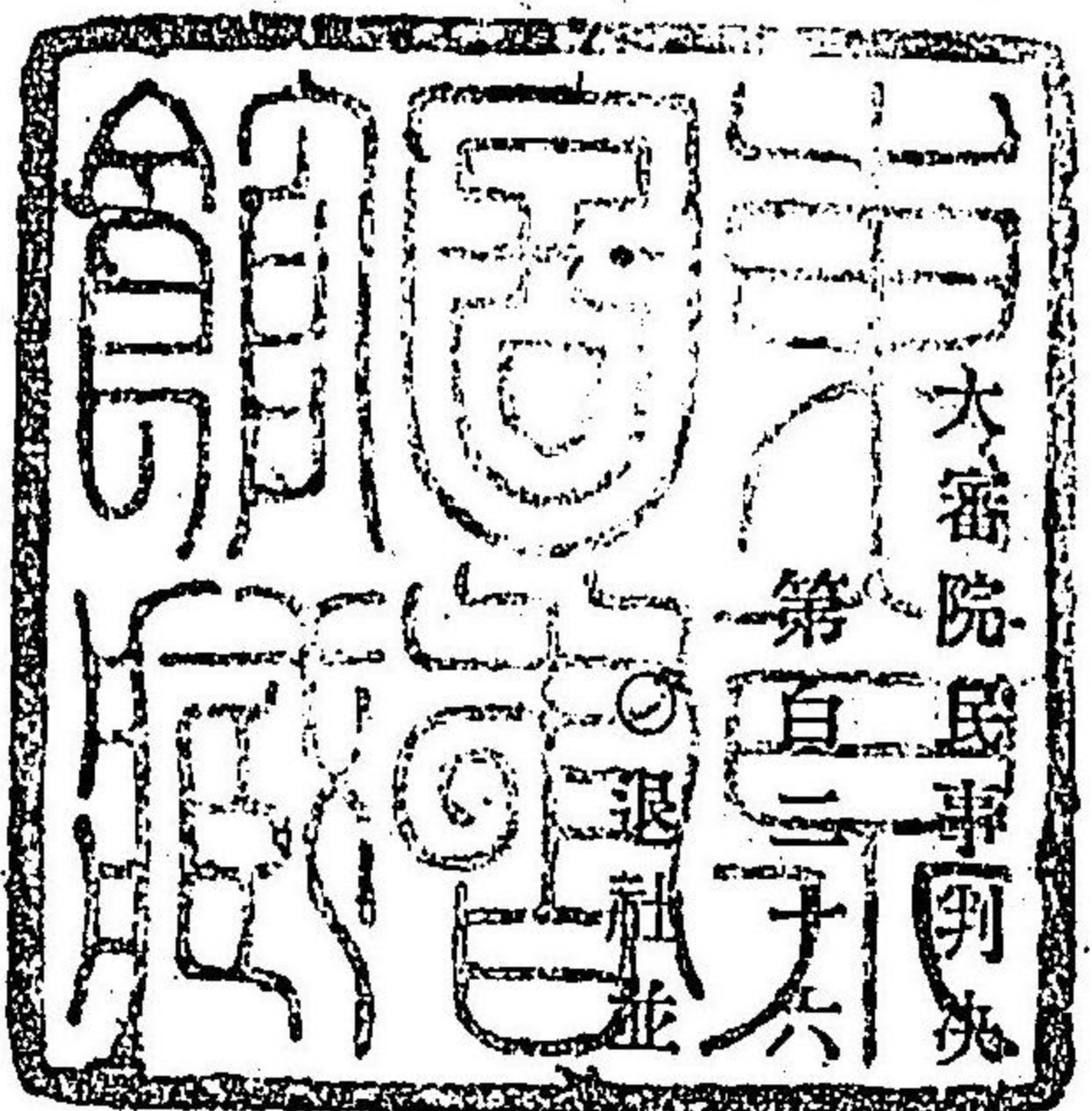
第百貳拾六號	退社並株金取戻一件	一	丁
第百貳拾七號	預少地爭論一件	七	丁
第百貳拾八號	積立蠶種取戻一件	一	五丁
第百貳拾九號	水路妨害譯立一件	二	七丁
第百三十號	村小入用不勘定一件	六	〇丁
第百三十壹號	年賦金淹滯一件	九	二丁
第百三十貳號	配水差縫一件	一	〇二丁
第百三十參號	地所讓受契約履行一件	一	二九丁
第百三十肆號	地券狀書換一件	一	三〇丁
第百三十伍號	山地爭論難澁一件	一	四八丁

第三百三十六號	滯米請求一件	一六八丁
第三百三十七號	預ヶ金請求一件	一九五丁
第三百三十八號	貸金催促一件	一九九丁
第三百三十九號	堤防違約ノ控訴裁判不法ノ執行救正一件	二〇四丁
第三百四拾號	舊村吏役地處分不服一件	二〇八丁
第三百四拾壹號	預ヶ金取戻催促一件	二〇九丁
第三百四拾貳號	違約要償一件	二二二丁
第三百四拾三號	證據金取戻一件	二三四丁
第三百四拾四號	分水定矩公平復舊一件	二四三丁
第三百四拾五號	預金請求一件	二四八丁
第三百四拾六號	地券名請故障一件	二五四丁
第三百四拾七號	捕鯨漁器械及鯨漁差縛一件	二九〇丁

第三百四拾八號	不正品取戻一件	三〇一丁
第三百四拾九號	庄屋地取戻一件	三一六丁
第三百五拾號	入會山秣場切開切添一件	三二四丁
第三百五拾壹號	秣場爭論一件	三三六丁
第三百五拾貳號	消印裁判一件	四二一丁
第三百五拾三號	窪堰筋爭論一件	四三二丁
第三百五拾四號	要償一件	四三八丁
第三百五拾五號	田畑山林宅地爭論一件	四四〇丁
第三百五拾六號	約定違背ニ付地所取戻一件	四五三丁
第三百五拾七號	圍込地所取戻一件	四六〇丁
第三百五拾八號	買附米内渡金取戻一件	四七八丁
第三百五拾九號	訴訟入費償却一件	四八八丁

第百六拾號	衝突船損害並ニ養育料請求一件	五〇一丁
第百六拾壹號	耕地取戻一件	五一一丁
第百六拾貳號	所持地境界爭論一件	五二四丁
第百六拾三號	地租不納一件	五三六丁
第百六拾四號	損害要償一件	五三七丁
第百六拾五號	貸金催促一件	五四四丁
第百六拾六號	家督相續一件	五七四丁
第百六拾七號	小作地取戻一件	六〇五丁
第百六拾八號	地所取戻一件	六一六丁
第百六拾九號	用水規定違約一件	六五九丁
第百七拾號	静岡城内開墾地名分保全一件	六八五丁
第百七拾壹號	渡船請負引揚一件	七〇一丁

第百七拾貳號	魼漁場測量經界爭論一件	七〇九丁
第百七拾三號	地所所有爭論一件	七一五丁
第百七拾四號	山論一件	七三二丁
第百七拾五號	秣場境界爭論一件	七五三丁
第百七拾六號	預メ金取戻一件	七九八丁
第百七拾七號	書記料日當料請求一件	八〇八丁



自明治十二年七月  
至明治十二年八月

退社社  
金取戻上告ノ判文明治十一年十月三十日上告

原告 東京府下日本橋區蠣殼

町二丁目四谷信次郎方

寄留

京都府下平民島田八郎

左衛門代人

東京府下日本橋區吳服

町三拾番地寄留

滋賀縣士族

河上左右

被告 岡山縣下備中國賀陽郡  
 種井村平民同縣下殖産  
 商社擔當人中村源藏代  
 人  
 同縣下同國窪屋郡倉敷  
 村七百七拾九番地平民  
 同社員

大橋 又四郎

退社并株金取戻一件大阪上等裁判所ノ裁判ヲ不法トシ上告スル主點  
 左ノ如シ

被告〔控訴〕第三號〔明治七年十二月二十日附〕同第六號〔明治九年十二月二十日附〕  
 山縣〔原告〕殖産〔同第七號〕〔明治九年三月二十四日附〕元小田〔同〕及ヒ原告  
 商社〔原告〕達書〔同第七號〕縣參事ヨリ岡山縣令エノ演說書

〔控訴〕第五號〔明治九年一月 日附小田縣〕ニ據リ原告〔控訴〕島田八郎左衛門カ舊小田縣殖産商社ニ加入セル金五萬圓ノ株券ヲ明治七年十二月十二日同縣廳ニ抵當トシ差入タルモノトシ社則第二章第壹節ノ犯則者ト做シ同社則ニ基ツキ過怠料ヲ差出シタル後退社并ニ株金返戻ヲ受ク可シト判決セラレタルモ被告〔原告〕第三號ニハ汎然入社金トノミ有之同第七號ニハ金三萬圓ノ抵當ニ差入云々同第六號ニハ金貳萬圓ノ抵當云々トアリ如斯每號金員ノ差異アル即ハナ錯誤ノ迹著ルシキモノナルノミナラス控訴審問中右被告〔原告〕ノ各証據タル元小田縣岡山縣ノ達書ハ間接ノモノタルニ付當岡山縣廳ニ照會ノ後ヲ裁判ヲ受度トノ原告〔控訴〕ノ上申書ヲ採用セス總テ公然タル書面ニテ其誤謬ナル證佐ナキ上ハ是ヲ錯誤トナスヲ得ス云々ト速了シ輒スル原告〔控訴〕ヲ犯則者ト看認メラレタルハ不法ナ

四

ル裁判ナリト思量スルニ付其裁判ノ破毀アラフヲ求ムルニアリ  
辨明

大阪上等裁判所判文第一條ニ原告〔控訴〕第五號元小田縣參事ヨリ大  
藏省ヘノ上申書及ヒ被告〔原告〕第三號元小田縣ヨリ殖産商社ヘノ達  
書同第七號舊小田縣參事カ岡山縣令ヘノ演說書同第六號岡山縣ヨ  
リ同商社ヘノ達書ヲ引証シ原告〔被告〕島田八郎左衛門カ閉店前既ニ  
該株券ヲ舊小田縣ヘ抵當ニ差入レタルモノトシ竟ニ該社則第二章  
第一節ノ犯則者ナリト判定セシハ事實ノ審理ヲ盡サ、ル不法ノ判  
定ト謂ハサルヲ得ス如何トナレハ凡ソ契約ナルモノハ一方ノ思量  
ノミヲ以テ成ル可ラス必スヤ互相一致ノ承諾ヲ俟テ之ヲ文書ニ載  
セ之ヲ言辭ニ徴シ始テ他日ニ驗スルヲ得ヘシ然ルニ被告〔原告〕カ該判  
決ヲ辨護シ原告ヲ犯則者ナリト主張スル所モ別ニ原告〔被告〕ヨリ舊

五

小田縣廳ヘ該株券ヲ抵當ニ差入レタリト証明スヘキ直接ナル抵當  
証書等一ノ見ルヘキナク單クニ間接ナル右第三號小田縣達書同第  
七號小田縣參事ノ演說書同第六號岡山縣ノ達書及ヒ原告〔被告〕第五  
號小田縣參事ノ上申書アルノミ而シテ其間接ナル証據ハ原告〔被告〕  
カ之ヲ錯誤ニ成タルヲ陳供シ自ラ認許セサル所ニ係レハ其事實如  
何ニ至テハ被告〔原告〕ノ片言ト文字上ノミヲ以テ其証書ノ真正ナラ  
ンコトヲ速了スルノ理ナシ況ンヤ其証書中抵當高五萬圓若クハ三  
萬圓貳萬圓等ノ差異アルヲ視ルハ亦以テ真正ト認ムルニ足ラズシ  
テ反テ錯誤ニ成リタルヤモ知ル可ラサルノ端緒アルモノニ於テチ  
ヤ然ラハ則チ大阪上等裁判所ハ原告〔被告〕ノ求ナキモ其証據書ノ原  
由ヲ縣廳ニ照會ヲ爲シ而シテ後チ判決スヘキ手順ナリトス  
而シテ被告〔原告〕カ原告〔被告〕島田八郎左衛門ヨリ舊小田縣ニ對シ

六

テ該株券ヲ抵當トシテ差入タリトスル所ノ各證據ハ都テ舊小田縣岡山縣ノ違書及ヒ同縣官吏ノ書面ニ係リ要スルニ債主ナル一方ノ思量ノミニテ自ラ抵當ト唱フルニ止マリ負債主ナル原告カ差入レシコトノ的証ヲ提舉セサルノミナラス其債主ナル縣廳ニ於テモ明治九年十二月廿日附第六號ノ如ク右ハ抵當ノ權力無之品ニ付今般同組へ下渡候條此旨相心得へシ候事トシテ其商社へ相達シタルハ則チ果シテ錯誤ノ處置タルヲ徵知スルニ足ルヘキナリ然ルニ大坂上等裁判所ハ原告<sup>〔控訴〕</sup>カ認許セサル間接ノ證據ヲ偏信シ之ヲ縣廳へ照會シテ其事實如何ヲ審究セス又錯誤ノ實迹アルニモ關セス誤謬ノ証左ナキモノトシ該抵當ノ無効ニ歸スルモ一旦抵當トナシタル上ハ即チ犯則ト看認ルモノナリト判定ヲ下シタルハ不法ノ裁判ナリトス

判決

右之理由ナルニ依リ大坂上等裁判所ノ裁判ヲ破毀シ東京上等裁判所ニ移スニ付更ニ同裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノナリ

但シ上告ニ係ル訴訟入費ハ被告ヨリ原告ニ償却スヘシ  
第百二十七號

○預テ地爭論一件東京上等裁判所裁判不法上告ノ判文  
明治十二年七月一日申渡

原告 愛知縣尾張國丹羽郡岩

倉村平民

山川彌左衛門

被告 同縣同國同郡同村平民

山川榊七

七



八 東京上等裁判所ノ判文

預ケ地爭論之件名古屋裁判所ノ裁判不服ニ付控訴ニ及フ次第審理判決スル左ノ如シ

本訴被告(山川榊七)ニ於テハ故山川太兵衛ハ彌左衛門ノ分家ニシテ幸助ノ本家ナリ且太兵衛母ハ幸助ノ父幸助カ伯母ナレハ幸助ハ太兵衛ノ近キ親戚ナリ而シテ文化九年十二月二十二日太兵衛死去致シ其後家族死絶ヘタルヲ以テ原告榊七ノ養祖父榊吉ハ太兵衛ノ實兄ニテ分家シタルモノナレハ増吉倅増藏ニ追テ相續人相定メ候迄彌左衛門ハ祖父彌左衛門幸助ハ父幸助ヨリ文化十三年五月中故太兵衛ノ財産ヲ預ケ管理ナサシメタリ然ル處近來被告榊七ニ於テ其預リタル地所へ我所持ノ標杭等ヲ打建其儘差措キ難キニ付副戸長小川嘉兵衛ニ申談村役場高帳取調タル處田畠壹町四反八畝五歩新

九

田拾壹石七升七合ノ地所ハ故太兵衛ノ所有ナルハ明瞭ナルヲ以テ嘉兵衛ヨリ用紙貰請ケ調製シタル甲第壹號ノ書面アリ加之甲第二號ノ如キ高帳ヲ原告ニ於テ拔差等セシニヨルモ原告榊七ノ不當ナル所爲タル事ハ判然ナリ依之故太兵衛ノ跡相續人取極メ次第右地所可相渡旨ノ証書ヲ原告ヨリ領収致度旨陳述スルト雖モ尙ホ被告ノ申立ニ據レハ彌左工門ノ家ヨリ亡太兵衛ノ家ヲ分家シタルハ元祿度ニシテ其初代太兵衛ノ家ヨリ又被告幸助ノ家ヲ分家シタルハ明和度ナリ而シテ右初代太兵衛ヨリ三代ニ至リテ原告ノ養祖父増吉ヲ分家シ其増吉ノ弟太兵衛ナル者ヲ即チ本訴四代目ノ亡太兵衛トス然ルニ其系統ハ事實如是ナルモ一概ニ分家ノ財産ハ本家ニテ管轄スヘシ又本家ノ財産ハ分家ニ於テモ其進退ニ干預スヘシシテ幾數年ヲ經過スルモ幾世代ヲ變換スルモ其戸主或ハ親族カナセル財

産ノ處置ニ對シ予ハ汝カ家ノ本家ナリ予ハ某カ先代ノ分家ナリト首唱シ以テ喙ヲ入ル、カ如キノ權利ヲ本家又分家カ條理ニ於テ有スヘキモノニ非ルカ故ニ被告カ原告ニ對シ本訴企望ヲ遂ケントスルヤ單一ニ本家或ハ分家ノ名稱ヲ以テセントスルモ萬々得ヘカラサルナリ然レハ之ヲナシ得可キノ場合ハ果シテナシトセソカ否ス原告ノ養祖父増吉又ハ其弟ナル四代目ノ太兵衛カ被告ニ其權ヲ與ヘタルノ証アル時ハ則其目的ヲ達シ能フヘシ今ヤ被告ハ是等ノ明証ヲ有スルニ非ス太兵衛一家死絶ノ際本分親族協議ノ上相續人撰定候迄本訴ノ論地ヲ原告ノ先代増藏ニ依託管理セシメシトノ事モ都テ其証ノ見ルヘキモノナケレハタトヒ甲第壹貳號ノ證據ヲ以テ該地ハ實際故太兵衛ノ所有地ナリトスルモ原告陳述ノ通太兵衛ノ相續人ニアラサルヨリハ之ヲ訟求シ得ヘキモノニ非ス因テ被告ハ

原告ニ對シ之カ預リ証書ヲ要求スルノ權利之ナシ原告ハ被告ニ對シ該証書ヲ授與スルノ義務之ナキ義ト可相心得事 明治十一年十一月廿二日  
大審院ニ於テ

原告 山川彌左衛門上告ノ要旨 明治十二年一月十五日  
第一條

東京上等裁判所判文中ニ其系統事實如是ナルモ一概ニ分家ノ財產ハ本家ニ管轄スヘク又本家ノ財產ハ分家ニ於テモ其進退ニ干與スヘクシテ幾數年ヲ經過スルモ幾世代ヲ變換スルモ其戸主或ヒハ親戚カナセル財產ノ處置ニ對シ予ハ汝カ家ノ本家ナリ予ハ某カ先代ノ分家ナリト首唱シ以テ喙ヲ入ル、カ如キノ權利ヲ本家又ハ分家カ條理ニ於テ有スヘキモノニ非ストアレハ本家分家カ相互ニ扶持スルハ我國古來ノ習慣ニシテ假令幾數年ヲ經過シ幾世代ヲ變遷ス

ルモ分家ノ災厄ハ本家之レヲ救助シ本家ノ不都合ハ分家之レヲ警  
戒セサルヲ得ス果シテ然ラハ其財産ノ如キモ亦干與保護スヘクシ  
テ何ソ其不當ノ所爲ヲ默視スヘケンヤ然ルチ東京上等裁判所カ  
前記ノ如ク裁判アリシハ不法ナリト思量ス

## 第二條

同判文中三該地ハ實際故太兵衛ノ所有地ナリトスルモ原告陳述ノ  
通太兵衛ノ相續人ニアラサルヨリハ之ヲ訟求シ得ヘキモノニ非ス  
トアレド抑本訴ノ主意ハ該地ヲ請求スルニアラスシテ故太兵衛ノ  
名迹再立ノ上其所有地ヲ相續人へ引渡スヘシトノ證明書ヲ要スル  
ニアリ而シテ其名迹ヲ再立セサル可カラサルハ被上告者モ亦之レ  
ヲ了諾シ亡父増藏ノ遺言モアルアレハ末女「タマ」ナルモノヲ以テ再  
立スヘキ旨ヲ明言セリ果シテ然ラハ其再立ノ日故太兵衛ノ所有地

ハ悉皆可引渡モノナルニヨリ夫迄ハ全ク預リ置クト云フノ證書ノ  
上告者カ被上告者ニ對シ要求スルハ即チ前條ノ所謂干與保護スル  
モノニシテ決シテ不條理ト云フヘカラス然ルチ東京上等裁判所ハ  
本訴ノ主旨ヲ誤認シ該現地ヲ訟求シ得ヘキモノニアラスト判決ア  
リシハ亦不法ナリト思惟ス

前二條ニ陳辨スル如クナルヲ以テ東京上等裁判所ノ裁判ヲ破毀シ  
更ニ公明ノ裁判アラント乞フ

## 明治十二年六月廿三日陳述

本訴ニ付證據トスル文化十四年己十一月附ケ西市場高田畑改帳及  
ヒ上市場田畑高改帳ハ嘗テ上等裁判所へ差出セシモ本訴ニ要用ナ  
ラサル趣ヲ以テ下戻サレタリ而シテ右二冊ノ帳簿中墨ヲ以テ斜ニ  
消シタル箇所ハ該帳簿出來以後賣却或ヒハ質地ノ受戻ニ應シタル

等ニテ他ニ轉帳シ今其之ヲ所有スルハ何人ナルヤ知ラサルナリ  
辨明

第壹條

上告要旨第壹條ニ本家分家ノ間互ニ相匡救セサルヲ得ス然ラハ則  
其財産ノ如キモ亦干與保護スヘシ云々申立ルト雖モ上告人等ニ於  
テ其絶家セシ故太兵衛ノ遺財ハ當時幾干ニシテ且之ヲ其分家増藏  
カ預リシハ何等ノ手續ニテ附托セシヤ明確ナル契約書アルニアラ  
サレハ果シテ其絶家ノ財産ヲシテ上告人等カ祖先ヨリ被上告人カ  
先代へ預ケタリシヤ知ルニ由ナシ況ンヤ上告人カ提供セル文化十  
四年上市場田島改帳ヲ閱スルニ故太兵衛死後十二ヶ年ヲ經テ「字寺  
ノ前七畝三畝廿七步ノ地所乙八入」トアリテ而カモ其地所ハ現今上  
告人彌左工門ノ所有地トナソル趣藝キニ原裁判所へ被上告人ノ申

立アルニ對シ上告人ハ何等ノ辨駁モナサ、リシ又明治六年地券下  
調ノ際上告人彌左工門自筆ヲ以テ論地一圓被上告人榊七ノ所有地  
ニ取調タルニ據レハ是時迄認許シ居タルノ信憑アルニ於テチャ仍  
而原裁判所カ一概ニ本分ヲ口ニ籍キ味ヲ容ル、カ如キ權利ナシト  
裁判セシハ相當ノ裁判ニシテ不法ノ裁判ト云テ得ス

第二條

上告狀第二條ノ事項ハ前第一條ノ辨明ノ如キ筋合ナルニヨリ本項  
ハ隨テ了解スヘキヲ以テ辨明ヲ與ヘス

判決

前條々ノ筋合ナルヲ以テ東京上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナ  
キモノトス

○積立蠶種取戻一件東京上等裁判所裁判不當上告ノ判文  
明治十二年七月一日申渡

原告 群馬縣新田組蠶種製造

人同縣上野國新田郡二

小屋村平民倉上保造外

拾二名惣代兼上告人同

村白石宗内盤谷彌平

同

福島縣蠶種製造人岩代

國信夫郡永井川村平民

遠藤吉三郎外九名惣代

兼上告人同村遠藤庄次

兵衛

神奈川縣橫濱區太田町

四丁目六十四番地平民

右代人

山田泰造

同

長野縣蠶種製造人同縣

信濃國高井郡小島村平

民中島嘉助外一名惣代

兼上告人同縣同國同郡

中野町平民奈良虎吉

東京府京橋區銀坐三丁

目二十番地寄留和歌山

縣平民

右代人

植木綱二郎

被告 舊蠶種會議局委員神奈

川縣相摸國津久井郡若

柳村平民

山口三謙

同 同長野縣信濃國小縣郡

縣村平民

秋元収藏

同 同椽木縣下野國梁田郡

梁田村平民

柳田泰次郎

同 同長野縣信濃國埴科郡

坂本村平民

上告ノ要領

第一條

中野玉平

同 同石川縣越前國足羽郡

福井毛矢町同縣士族

酒井功

同 同埼玉縣武藏國兒玉郡

沼和田村平民

長沼孝太郎

同 同福島縣岩代國伊達郡

中瀬村平民

伊藤彦次郎

東京上等裁判所判文ニ曰「原被ノ申供及ヒ證據ヲ熟考スルニ被告ニ於テ怠慢且不正ノ所爲アリテ爲メニ原告ノ損害ヲ生シタル事實アルモノト見認ムルヲ得ス」トアレヒ凡ソ損害有無ノ判決ヲ爲スニ唯ク熟考ノ二字ヲ以テシテ其理由ヲ審明セサリシハ不當ナリ夫レ熟考トハ獨リ法官ノ思想ニ止マリ果シテ其損害ヲ生セサリシハ何レノ点ニ在ルヤ原告於テハ之ヲ知ルヲ得可カラス而シテ今爰ニ原告カ申供ト證據トヲ照スニ原告カ損害ヲ受タルノ証判然タリ則該上等裁判所原被告カ口供ト證據トニ於ケル如ク明治十年吾カ蠶種紙ニ高價ヲ生シ之レヲ外國ニ輸出セントスルノ目的ヲ以テ在横濱ノ蠶種紙十分ノ七ヲ消滅セント決議セシハ明治十年十月廿六日ノコニシテ最モ至急ヲ要セシトタルヤ原告第三號証臨時會議申合決議書第一章ニ現今有高等今廿六日中取調可申事トアリ又其第七

章ニ稍取揃次第云々トアルヲ以テ瞭然タリ故ニ被告ハ蠶紙稍取揃次第速ニ之カ消滅ヲ爲サ、ル可カラス然ルニ伊佛商人解纜後ニ至ルモ被告之ヲ爲サ、ルニ依リ原告ハ被告ヘ對シ第十九號証ヲ送リシニ被告之ヲ承諾セサルノミナラス延ヒテ伊佛商人解纜後之ヲ執行スルモ無効ニ屬シ該決議ノ旨趣ニ戻レリ既ニ被告カ該上等裁判所ノ口供ニ悉皆積終リタルモ十二月廿日頃ニ御座候夫故伊佛商人ノ出港以前ニ於テ消滅法ヲ施行致候義不相成候トアルヲ以テ伊佛商人ノ出港後即チ決議ノ期限後ニ消滅シタルヲ明カナレハ全ク被告ノ怠慢等ニ出テ爲メニ原告ハ損害ヲ蒙リタリ何トナレハ被告ニ於テ無効ノ消滅ヲセサリシナレハ原告ハ之レヲ自用ニ供スルヲ以テナリ然ルヲ前記ノ如ク判決アリシハ不當ノ裁判ナリト思考ス

第二條

同判文ニ曰(被告ニ對シ右消滅ノ期限ヲ確定シ或ハ其委托ヲ解除セシメアラサレハ云々右荷主中僅カニ數十名ノ意見ヲ以テ恣マニ前段決議ヲ取消シ蠶種取戻ヲ乞フモ委員タル被告ハ之ヲ承諾スヘキニ非ス故ニ今日ニ至リ其價額ヲ償フヘキ責ナキモノニ付原告控訴不相立)下アレモ第一條ニ陳述セシ如ク消滅ノ期限ハ即チ蠶種紙稍取揃次第ト伊佛商人カ横濱滞留中トニ在ルモノナリ故ニ解纜後ニ至テハ既ニ消滅ノ期限ヲ失セシヤ明カニシテ即チ消滅ノ決議ハ當時自カラ敗約シタルハ勿論ナリ已ニ其決議ノ敗約セシ上ハ即チ議約ナク以前ニ復シタルモノナレハ被告ハ最早消滅ヲ爲スヘキ權利之レナク假令一名ノ荷主ト雖モ自己ノ積立蠶紙ヲ取戻スノ權アルヲ贅言ヲ須ヒス故ニ被告ナシテ其價額ノ損害ヲ償ハシムルノ權亦從ツテ生シタルモノナリ然ルヲ前記ノ如ク判決アリシハ不當ノ裁

判ナリ思考ス

第三條

本訴原告ノ人員ニ於ケルヤ初審及ヒ終審トモ變更アルヲ無シ即チ白石宗内塩谷彌平ハ倉上保造外十二名ノ惣代兼上告人ナリ又遠藤庄次兵衛ハ遠藤吉三郎外九名ノ惣代ヲ兼タル者ナリ乃チ東京上等裁判所へ控訴ノ節別ニ連名記ヲ呈セリ然ルニ該上等裁判所ノ判文ニ白石宗内外二名トアツテ遠藤吉三郎外九名ノ本人ヲ除カレタリ右ハ本案ノ旨意ニ管セスト雖モ謂レ無ク除名セラレシハ不法ノ裁判ナリト思考ス

但シ此ケ條ハ敢テ其不法ノ破毀ヲ求ル意ニハアラサレモ之レヲ申立サレハ其除名サレタル原告カ該不法ヲ甘受スルニ似テ本案ノ上告チナス權利ヲ失フ道理ニ當ルヲ以テ乃チ條陳スル所以ナ



辦明

第一條

東京上等裁判所カ原告ニ損害ナシト熟考セシ理由タルヤ其判文中  
 被告ハ右委託ノ事ヲ擔任シ時々會頭及ヒ議員總代等ノ決議ニ隨ヒ  
 蠶種ノ消滅ヲ實行セシハ素ヨリ當然ナルコナリトアリ即之レ右熟  
 考セシ理由ナリトス何ントナレハ被告ノ所爲ヲ當然ト認ムレハ被  
 告カ原告ニ與ヘシ損害アリトスヘキ條理ナケレハナリ故ニ上等裁  
 判所ノ判決ハ理由ナキ熟考ヲ下シタル不當ノ裁判ニ非ストス

第二條

且夫レ原告カ被告ノ爲メ蒙リタル損害アリヤ否ノ点即チ被告カ消  
 滅スルカラサル蠶種紙ヲ消滅セシヤ否ノコトハ抑モ被告カ決議ノ旨

第三條

趣ニ戻リタルヤ否ヲ審明スレハ自カラ判然タルヘキ筋ノモノニシ  
 テ而シテ其決議書中本案ニ緊要ナル蠶種紙消滅ノ期限ハ原告カ所  
 謂最モ至急ヲ要スルニ主義ヲ表ハサ、ルニ非スト雖モ之レヲ何年  
 何月何日ト明確ニ指定セス唯泛然稍取揃ヘ次第云々ト概定セシマ  
 テナレハ其期限ヲ立ルコトハ專ラ之レヲ被告ニ委任シ被告ニ於テ當  
 然ト思料セシトナリ以テ即チ右消滅ノ期限ナリト定メタルモノトセ  
 サルヲ得ス故ニ被告ハ其處分ヲ委任サレタル方法即チ己レカ思料  
 ナリテ當然トスル所ノコトヲ爲シタルモノナレハ之レヲ決議ノ旨  
 趣ニ戻リタリト云フヲ得ス隨テ上等裁判所カ被告ニ於テ怠慢且不  
 正ノ所爲アリテ爲メニ原告ニ損害ヲ與ヘタルモノト認メスト判決  
 セシハ不當ノ裁判ニアラストス

蠶種紙消滅ノ期限ハ已ニ前條ニ辨明スル如ク專ラ被告ノ思料ニ任セタルモノニシテ被告カ消滅ヲ行ヒタルトハ猶ホ其決議ノ効力依然存在セル譯ナレバ上告要領第二條ノ趣意即消滅ノ決議已ニ敗約ニ歸シタリトノ原告申立ハ事理ニ當ラストス故ニ原告ハ被告ニ對シ其決議カ敗約ニ歸シタリトノ点ヲ主義トシテ蠶種紙取戻シニ換ルニ其代價ヲ求ルハ不條理ナルモノナレハ上等裁判所カ前段決議ヲ取消シ蠶種取戻シヲ乞フモ委員タル被告ハ之ヲ承諾スヘキコアラスト判決セシハ不當ノ裁判ニアラストス

第四條

東京上等裁判所カ其判文ニ原告ノ中拾員脱名セシハ即チ粗漏ニ屬スト雖モ右ハ素ヨリ本案ノ旨意ニ管セ大且上告要領但書ニ原告カ自陳セル如ク之ヲ鳴ラシ別段其破毀ヲ求ムル意ニアラサルニ因

リ本院ハ其不當ヲ認ムレモ之レカ破毀ヲ與ヘサルモノトス

判決

前條々ノ如クナルヲ以テ東京上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナキモノトス

第二百二十九號

○水路妨害譯立一件大坂上等裁判所ノ裁判不法上告ノ判文  
明治十二年四月廿七日上告明治十二年七月三日申渡

原告 兵庫縣下淡路國津名郡

中田村平民打越彌一郎

外六十七名

東京府下日吉町二十一

番地平民

司法省附屬代理人

右代言人 星 亨

被告 兵庫縣下淡路國津名郡

志築村平民中ノ井手掛

田主總代

富本林三郎

西田茂八郎

富本徳之丈

水原喜平

大坂上等裁判所ノ判文

原告ニ於テ高山下池ニ初マリ原告村中ヲ流通スル内ハ原告村中ノ共有物ニシテ往昔ヨリ水路左右ノ田面ニ汲入耕養ヲ自由ニナセシ

習慣ナルヲ以テ偶早魁ノ年柄ニ當レハ該水路ノ途中ニ堰或ハ樋ヲ設クヘキ仕來リナル旨從來水汲場所ノ存在スルヲ且水路筋繕普請等ハ原告一手ニテ之ヲ爲シ來リタルヲ及ヒ第一號証據物ヲ証トシテ申立ルト雖モ圖面ニ就テ實地ノ形狀ヲ考フルニ中ノ井手堰ハ原告被告兩村ノ境ニアリ左スレハ該堰ヲ以テ養水ヲ蓄フハ被告ノ村内ニアラスシテ原告村内ノ水路ナリ然ルテ原告ニ於テ自分ノ村内ニアルヲ以テ勝手ニ之ヲ引用スル時ハ被告カ設ケタル堰ハ自然原告ノ養水ノ爲メ設ケタル筋合ニ當リ甚タ不相當ノコトナルニ因リ第一號証ハ唯ニ原告ノ村内ニ流通スル水路ノ証ト爲スヲ得可クシテ概シテ用水ノ証ト爲スヲ得ス又水汲場ノ如キハ從前ヨリ殊更ニ設ケタルモノニテ判然存在シタルコトナラハ清水池掛總代ノ者ヨリ被告第三號ノ約定書ヲ差入ヘキ謂ノナク且戸長ヨリ被告第五號ノ書

面ヲ出ス道理アルヘカラス故ニ其水汲場所ト稱スルモノハ判然ナ  
ラサルヲ明白ナリ此ノ如クナレハ其普請ノ証書亦自由スヘキノ用  
水ナルヲ証スルニ足サルモノトス且夫レ清水池掛ヲ除ク殘リ八人  
ニ於テハ被告ヨリ該水路中ニ樋ノ設ケアルヲ取除クヘシト掛合ア  
リタレモ右ハ原告村ノ内獨リ清水池掛リ田主人トモカ取設ケタル  
モノナレハ預リ知ラサル旨ヲ答ヘ其掛合ニ對シ當否ノ答ヲ爲サス  
且警察ニ於テ取扱ノ末清水池掛ニ於テ約定ヲ結ヒ區戶長立會ヲ以  
堰ヲ取除キ其節ノ爭論一旦結局ニ至ル迄傍觀シテ終ニ關係ヲ爲サ  
サリシニ因テ之ヲ觀レハ八人ノ者ハ右水路ニ就テハ素ヨリ關係ス  
ヘキモノニ非ストス何トナレハ一村内ニ在テハ清水池掛ノ者ト其  
他ノ者トハ自ラ區別アリト雖モ該水路ノ水ハ原告村ノ共有トスレ  
ハ一村中權利連帶ノモノナリ左スレハ連帶中ノ一人又ハ數人ニ於

テ爲シタル事件ニテモ連帶ノ權ニ關シタルコトハ則チ一己ノ權ヲ以  
テ爲シタルニ非スシテ連帶ノ權ヲ以テ爲シタルモノナレハ他ヨリ  
其事件ニ付故障ヲ述ルモノアレハ一村ニ於テ之ニ答フルノ義務ア  
ルハ當然ノコトナリ然ルニ八人ノ者ハ清水池掛ノ者ニ於テ約定ヲ結  
ヒタルモノハ總代ヲ委任シタル者ニ非ス且其調印等モ不都合アル  
旨申立ルト雖モ畢竟不當ノコトナリトス何トナレハ警察ニ於テ取扱  
シ結局ヲ考フルニ植田德藏外十一名カ總代ノ名義ヲ以テ被告第三  
號ノ約定ヲ結ヒタルニ因リ第四號第六號ノ如ク事濟ニ至リ而シテ  
實際被告カ求メタル如ク執行ヲ爲シタルニ因レリ若シ十一名ノ者  
カ總代ノ委任ヲ得サル者ナラハ自分等一己ノ了簡ヲ以テ請合ヲ爲  
スモ實際ノ執行ニ於テハ一己ニ爲スヲ得可カラサルニ因リ他ノ了  
簡如何ヲ問ハスシテ如何リ此ノ如キ約定ヲ爲シ請書ヲ出ズテ得ン

ヤ假令暫ラク十一人ノ者ハ獨斷ヲ以テ權外ノ事ヲ勝手ニ爲シタル  
 モノト爲スモ現地ニ之ヲ執行スルニ於テハ獨斷ヲ以テ竊ニ爲シ得  
 ヘキコトニ非ス左スレハ其執行ノ節ハ總テ之ヲ承知セシハ明白ナ  
 リ而シテ其承知ヲ爲スハ必ス一件始末ヲ了シタル後ニアルハ當然  
 ノコナレハナリ故ニ其總代ヲ爲シタルヤ相當ノ委任狀ハ受授セサ  
 リシニモセヨ一般ニ向テ總代ト看認メタリト論セサル可カラサル  
 ニ因リ被告第三號ノ約定証ハ充分ノ効アル可ク而シテ其調印ノ不  
 都合ノ如キハ自己ノ錯マリヨリ爲シタルコトナレハ之ヲ以テ他人ノ  
 損害ト爲スヲ得ス

右ノ理由ナルニ因リ原告ニ於テ大ナラ堰ヨリ中ノ井手堰迄ノ水路  
 ニ於テ自由ニ養水ヲ用ユ可キ權利之レナキモノナリ 明治十一年  
 大審院ニ於テ 二月十二日

原告 中田村打越彌一郎外六十七名代理人星亨上告ノ要領  
 明治十一年  
 四月廿九日

第一條

大阪上等裁判所ノ判決ハ通シテ其証據ノ推測ニ依ラヌシテ思想ノ  
 斷決ニ出タルモノト思考ス奈何トナレハ其判文中初項ニ「原告上告  
 人」ニ於テ高山下池ニ初マリ原告村〔中田村〕中ヲ流通スル内ハ云々申  
 立ルト雖モ圖面ニ就テ考フルニ該堰ヲ以テ養水ヲ蓄フハ被告〔志築  
 村〕ノ村内ニアラスシテ原告村内ノ水路ナリトアリ抑被告者〔志築  
 村〕中ノ井手堰ヲ設ケタリシハ曾テ原告中田村内ニ在ル被告處屬ノ  
 皿池ヨリ流出スル水ヲ塞止シ併セテ原告所屬ノ高山下池ヨリ流出  
 セル原告〔中田村〕用殘ノ水ヲモ堰止メ以テ其水ノ低地ニ流出スルヲ  
 防ク爲メナリ故ニ志築村ノ爲メニスル所ハ中ノ井手堰ノ下ニ在リ

テ其上方ノ地ニハアヲサルナリ凡ソ流動性ノ天造物ハ之チ一般ニ論セハ人類總体ノ共用ニ屬シ終始唯一ノ定主アルニ非ス只其現ニ流通シ又ハ其現ニ充塞スル處ノ場處ヲ所有スル者之ヲ享用スヘキナリ故ニ流水ノ如キモ其川底又ハ沿岸ヲ處有スル者其茲ニ存在スル間ハ之カ主人タリ是レ世ノ常例ニシテ蓋シ自然ノ公道ト社會ノ秩序トニ於テ然ラサルヲ得サルナリ而シテ時トシテ一人又ハ數人此共用ノ天造物ヲ專用スルコトアリ是レ世ノ變例ニシテ必スヤ著明ナル約束アル歟若クハ久用ノ習慣アルコト非ルヨリハ之ヲ支持スル能ハサルナリ今此理ヲ以テ本訴ノ事跡ニ照考スルニ該高山下池ノ流水ノ底面ト其兩傍ノ田地トチ所有スル者ハ他証ヲ須ヒス其流水ヲ用ユルノ權アルモノト爲スヘシ是レ所謂常例ニシテ法ノ推測ニ於テ然ラサルヲ得サルナリ若シ夫レ大ナラ堰ヨリ中ノ井手堰マテ

ノ流水ハ被告カ獨占スル處ニシテ其沿水ノ上地及川底ノ地主タル原告人等ハ其一滴水モ汲取スルコトヲ得スト主張センニハ所謂用水ノ此常例ヲ變シ法ノ此推測ヲ破ルニ足ルノ顯跡ナカルヘカラス然ルニ被告人於テ斯ノ如キ顯跡及ヒ著明ノ約束久用ノ習慣モナク只一ノ中ノ井手堰ノ設ケアレハトテ此法ノ推測ヲ破リ此常例ヲ變シ能ハサル限リハ原告人ハ其用水權ノアルヤ固ヨリナルニ尙其推測ヲ實ニスル爲メ下條ニ説明スル如ク該水路ヲ普請シ且許多ノ水汲場ノ設ケアルニ於テハ其天賜ノ權ヲ失却セサルノ証明白ナルモノト謂フヘシ然ルチ被告人カ僅ニ一堰ヲ設ケタリトテ原告人カ其固有ノ權ヲ失ヒ一滴水モ汲取スルコトヲ得ス惟リ被告人ノミ自由ニ享有スヘシト裁判ナリシハ法理ニ適ハサルモノト思考ス

又同判文中「然ルヲ原告(上告人)ニ於テ之ヲ引用スルハ被告カ設タル堰ハ自然原告ノ養水ノ爲メ設タル筋ニ當リ甚不相當ノコトアレドモ既ニ第一條ニ述タル如ク該堰ハ水ノ流去ヲ止ムル爲メ被告一己ノ利益ニ出タルモノナリ今假ニ判文ノ意ヲトリ該堰ノ近傍ニ田地ヲ所持スル上告者カ該堰ノ爲メ雷水ノ多キニ依テ其利澤ヲ受クルト爲スモ十六町餘モ上流ニ在ル田主等ニ至テハ決シテ其利澤ヲ共ニスル能ハサルナリ

### 第三條

同判文中「第一號証ハ水路ノ証ト爲スヲ得ヘク概シテ用水ノ証ト爲スヲ得ス」ト又「其普請ノ証モ自由スヘキノ用水ナルヲ証スルニ足サルモノトス」トアレドモ上告者ハ只此一號証ト第二號証普請トノミヲ以テ其用水ノ主專ニシテ且確的ナル証左ナレハ比二証ヲ以テ完全

ナル權利アリト呈供シタルニ非ス上告者ハ夫ノ法ノ推測ニ依リ且水汲場ノアルニ依テ天賜自然ノ用水權アル者ト認定セラルヘキ筈ナルニ尙此二事ヲ添加シ該推測ヲシテ益々鞏固ナラシメタル衆証中ノ一ナリ故ニ法理ヲ稽考セス只字面上ニ依テ概シテ論スレハ固ヨリ用水ノ証ト爲スヲ得ス又其普請ノ証モ之ヲ証スルニ足サルヘシト雖モ苟モ條理ト公道トヲ以テ之ヲ視レハ咸ク以テ適當ノ証據ト推測スヘキモノト思考ス

### 第四條

同判文中「其水汲場ト稱スルモノハ判然ナラサルコト明白ナリ」トアリ該水汲場ナルモノハ俚語之ヲ土手場ト稱シ該水路ノ堤縁ニ於テ足掛リ様ノ場ヲ鑿設セルモノナリ其溝水ヲ汲揚クルニ方テ兩箇人該土手場ニ在テ左右ニ別レ各水桶ニ結束シタル繩索ノ一端ヲ把リ其

水桶ヲ溝中ニ投シ以テ水ヲ汲揚ケ田面ニ灌キ入ル其土手場ノ處在ハ別紙ノ圖面ノ如ク論所大ナラ堰ト中ノ井手堰ノ中間ニ拾二ケ所アリ其他舊跡モ處々ニ散在ス夫レ斯ノ如ク上告者カ該水ヲ用ヒ來レル明白ナルニ其實況ノ奈何ヲ問ハス單ニ判然ナラストノ裁判ハ是亦臆斷ナリト思考ス

第五條

同判文中「水汲場ノ如キハ判然存在シタルコトナラハ清水池掛總代ノ者ヨリ被告第三號ノ約定書ヲ差入レヘキ謂レナク」トアリ凡ツ契約ヲ有効ノモノタラシメシニハ其契約ノ双方ニ於テ甘心ニ出タル同意ナカルヘカラス被告第三號ノ約定書ノ如キハ當初被告ノ願ニ依テ明治九年六月八日清水池掛田主ノ内植田德藏外二名舊名東縣洲本警察署ニ召喚セラレ警察官ヨリ新設ノ堰ヲ取除クヘキノ命ア

レ此竟ニ傾承セサリキ其翌九日ニ至再ヒ植田德藏外十名出頭セシ處警察官ハ事情ノ取糺モナク彼ノ新設ノ堰ヲ不切落於テハ檻倉ニ拘留スル杯暴慢頻リニ脅嚇セラレ終ニ被告第六號ノ如ク請書ヲ呈スルニ至ル而シテ被告富本林三郎等ハ又第三號約定ノ下案ヲ出シ同シク強迫シ以テ調印ヲ促シ再ヒ警察官ノ嚴責ヲ受ル所トナリ無餘義其下案ニ倣ヒ壹枚ヲ認メ調印シ又被ノ下案ニモ調印シタルモノナレハ此約定書ヲ以テ真ノ契約ヲ構成シタルモノニ非ストス何トナレハ一方ノ好ム所ハ他ノ一方ノ嫌惡ヲ牽制スヘシトナラハ是レ強ハ弱ヲ凌キ暴ハ正ヲ虐スルノ道ニシテ天下復々當ニ手足ヲ措ク所ナカラシテ彼十一名ハ甘心シテ該定約ヲ結ヒタリトスルモ自ラ總代ト稱シ其同僚タル清水池掛ニ敢テ代リタルモノナレハ其餘ノ清水池掛四十九名ヲ牽束スルヲ得ンヤ良シヤ總代タルモノ



トスルモ警察官ニ向テ歸村ノ上衆ニ告ケテ取除カントノ請書ヲ呈シ自ラ其權ナキヲ表シタルヲ奈何セン又一步ヲ退キ該定約ハ相當ノ總代人カ締結シタルモノト爲スモ其十一名ハ其同輩タル清水池掛ノ者ノミチ牽束スルハシテ餘人タル高山下池掛及大和畑池掛ノ者八名ヲ牽束スルヲ能ハサルヲ奈何セン故ニ該約定ハ如何ナル觀察ヲ下スルモ決シテ判文ノ如キ効ハナカルヘキナリ而シテ更ニ又一步ヲ退キ該定約書ハ威迫術計ニ依テ成レルニ非ス相當ノ代人カ爲シタルモノト爲スモ其約定ハ既ニ本訴爭論ノ起リシ後成リタルモノナレハ既往ノ事ヲ斷定スルノ具ト爲スヘカラス畢竟裁判ノ趣意ハ情實ニモ依ラス又條理ニ基カサルモノト思考ス

## 第六條

同判文中三「戸長ヨリ被告第五號ノ書面ヲ出ス道理アルヘカラス」ト

アレモ其戸長ハ該爭論ノ初發ヨリ被告ニ荷擔シ新堰取除ノ説ヲ主張スル者ナルヲ以テ上告者於テ右第五號証ハ不偏無私ノ証トハ認め難ク良シヤ然ラスト爲スモ此第五號ノ証ハ氷汲場ノ有無ヲ証シタルモノニ之ナク又一步ヲ退キ實ニ氷汲場ノ有無ヲ証シタル者ト假定スルニ致セ夫ノ土地ニ屬スル形跡ノ如キハ人ノ最モ感覺シ易キ所ニシテ其戸長ヲ召喚ノ上上告者カ親シク疑問スル上ナラテハ信ヲ措キ難キヲ斯ノ如キ裁判ハ之ヲ違法ト言ハサルヲ得ス

## 第七條

同判文中三「且夫レ清水池掛ヲ除ク残り八人ハ預リ知ラサル旨ヲ答へ且清水池掛ニ於テ警察ニ於テ約定ヲ結ヒ區戸長立會ヲ以テ堰ヲ除キ爭論結局迄傍觀シ因テ八人ノ者ハ右水路ニ關係スヘキモノニ非ス」トスト此八人カ新堰撤去ノ論ニ付知ルト知テサルヲ論セス本訴

ニ向テ如何ナル影響ヲ生セシカ直ニ水路ニ關スヘキニ非スト斷定  
 スヘカラサルノ理ヲ申明セントス抑モ本訴ノ基源ハ清水池掛田主  
 等カ明治九年旱魃ニ際シ上古ノ仕來ニ從ヒ宇除川ノ邊ニ一堰ヲ構  
 造セシニ其五月下旬被告者カ痛ク之ヲ拒メルニ依ル而シテ其餘ノ池  
 掛ノ者ハ始メヨリ其堰ノ築設ニ與カラズ故ニ其除廢ノ事ニハ荅辨  
 ナ與フヘキニ非ズ故ニ預リ知ラスト言ヘルモ當然ノ事ニ非スヤ若  
 シ當時被告ノ論旨ヲシテ大ナラ堰ヨリ中ノ井手堰マテノ流水ハ上  
 告者ニ於テ一滴タリモ汲用スヘカラストノ点ニ在ラシメハ該八人ハ  
 必ラス汲用權ヲ主張シ何ソ知ラスト辭謝スル者アラシヤ又區戶長  
 立會ヲ以テトハ事實ニ於テ誤リアルカ何トナシハ明治九年六月九  
 日洲本警察署ニ請書ヲ呈シ其夜ハ一泊シ翌十日三里ノ行程ヲ經テ  
 歸村シ未タ該約定ノ義ヲ其餘ノ田主ニ告知スヘキ間モナク其正午

十二時頃被告人巡查二名ト俱ニ來リ其堰ヲ取毀チタリ該堰取毀ノ  
 時ニ於テ上告者ハ夏季ニ際シ尤水ヲ要シタルニ付水路兩側ノ田地  
 ニ汲灌セントセシニ被告等ハ嚴シク之ヲ拒メリ其後該堰跡又ハ其  
 水路ニ傍フテ汲用セントセシニ共ニ許ラレス但シ該堰取毀チ以來  
 此水路ニテ汲灌セシ上告者等ハ誰々ナリシヤ詳述スル能ハス區戶  
 長ハ現ニ其場ニ臨マサルナリ是レ最前區長佐野助作カ實地ヲ點檢  
 セル事跡ト混シタルナラン而シテ其新堰ヲ毀ツル其場ニ居合ハセ  
 タル兩三名ノ上告者ハ口ニテ該所業ヲ防止シタルモ巡查カ一喝ノ  
 下ニ畏伏シ復タ敢テ止メ能ハス枉テ其所業ヲ縱容シタルナリ

## 第八條

同判文中現地ニ之ヲ執行スルニ於テハ獨斷云々其執行ノ節ハ總テ  
 之ヲ承知セシハ明白ナリトハ前條七個條ノ景況ナルヲ以テ事實ニ

適セサルノ裁判ナレハ大坂上等裁判所ノ裁判ヲ破毀セラレ更ニ公明ノ裁判ヲ與ヘラレンコトヲ乞フ

上告ノ主点ハ第一ヨリ第三迄ハ上告村カ本然ノ權利有無如何ノ要点ニシテ爾余ハ本訴ニ附帶スル枝葉ノ條件ナリトス

第一 被告カ中ノ井手堰ヲ設ケタリシハ上告村内ニアル被告所屬ノ皿池ヨリ流出スル水ヲ塞止シ併セテ上告者所屬ノ高山下池ヨリ流出セル上告者用殘ノ水ヲモ堰止メ以テ其水ノ低地ニ流出スルヲ防ク爲メナリトノコト

第二 上告人ハ流水ヲ汲用スルノ權ヲ有スルトノコト

第三 氷汲場ハ上告人カ該水ヲ用ヒ來レル明白ノ證據ナルヲ判然ナラスト判シタルトノコト

第四 被告第三號ノ証ハ判文ノ如キ効ナシトノコト

第五 被告第五號ノ証ヲ出シタルコトニ付テハ戸長ヲ呼出シ原告ヲシテ親シク疑問ヲ爲サシムヘキヲ其事ヲ爲サ、リシハ違法ナリトノコト

第六 清水池掛リヲ除ク殘リ八人ハ水路ニ關係スヘキニ非スト判スヘカラストノコト

第七 區戸長立會ヲ以テトハ事實ニ誤リアルカ區戸長ハ其場ニ臨マサルナリ是レ蓋シ最前區長佐野助作カ實地ヲ點檢セル事跡ト混シタルナラントノコト

辨明

第一條

上告要領第一條中ニ被告者カ中ノ井手堰ノ設ケタリシハ曾テ上告人中田村内ニ在ル被告所屬ノ皿池ヨリ流出スル水ヲ塞止シ併セテ

上告村用殘ノ氷ヲモ堰止ノ以テ其氷ノ低地ニ流出スルヲ防ク爲ナ  
 リ云々ト申立ルトイヘ其被告志築村所屬ノ皿池ナルモノハ嘉永  
 年間已ニ賣却セリト果シテ然ラハ其已ニ賣却セシヨリ殆ント三十  
 年間ノ久シキヲ經猶ホ依然トシテ中ノ井手堰ノ存在スルヲ以テ觀  
 レハ今更皿池ノ故事ヲ口ニ籍キ中ノ井手堰ノ氷因ノ引証トスルヲ  
 得ス又上告村所屬ノ高山下池ヨリ流出セル上告人用殘ノ氷ヲモ堰  
 止メ云々トイヘル其高山下池ノ氷ハ上告村ニ於テ論所ノ川上即チ  
 大奈良堰ヲ設ケ右池氷要用時ニ方ツテハ此大奈良堰ヲ鎖シ以テ他  
 ニ流下スルヲ防キ該高山下池掛リノ耕地ニ灌溉シコノ池水ヲシテ  
 同村トイヘ他ノ池掛リノ耕地ニ流用セサル仕來リナルコトハ上告  
 村カ提供スル中田村各池掛リノ耕地色分圖面ニ判然タリ是ニ由テ  
 之ヲ觀レハ上告村ニ於テ此大奈良堰ヲ放テ論所川筋ニ廢流スル處

ノ氷ハ即チ惡水ナルカ故ニ概シテ高山下池ヨリ流出スル上告村用  
 殘ノ氷ト云ヒ將キテ被告中ノ井手堰ノ爲メニ淹留スル水ヲシテ上  
 告村カ汲用スル原因ノ如ク論スルヲ得ス何トナレハ上流ノ惡水ヲ  
 シテ下流ノ堰ニ止メシムルト否トハ其下流ノ堰ヲ左右スルモノノ  
 權ニアリテ此セキハ上流者ノ關係スヘキ權ナクシテハナリ

第二條

上告要領第一條中ニ凡流動性ノ天造物ハ云々終始唯一ノ定主アル  
 ニアラス故ニ流水ノ如キモ其川底又ハ沿岸ヲ所有スルモノ云々之  
 レカ主人タリ是世ノ常例ニシテ云々然ラサルヲ得サルナリ云々今  
 此理ヲ以テ本訴ノ事蹟ニ照考スルニ該高山下池ノ流水ノ底面ト其  
 兩傍ノ田地トヲ所有スルモノハ他証ヲ須ヒス其流水ヲ用ユルノ權  
 アルモノトス是世ノ常例ニシテ法ノ推測ニ於テ然ラサルヲ得サル

云々申立ルト雖モ抑本訴ノ起因タルヤ明治九年五月下旬旱魃ナルニ際シ上告村ハ俄ニ堰及瓦樋ヲ設ケ以テ自己ノ田地ニ試用セントセシニ根セリ依テ實地ノ景狀ヲ審問シ之テ圖面ニ參看推究スルニ此川ノ最源頭ヨリ論所中ノ井手堰ニ至ルノ距離僅ニ十六町未滿ニシテ而モ中間上告村カ大奈良堰作用ノアルアルハ前第一條辨明ノ如シ然レハ則當時論所ニ水ノアルハ全ク被告村カ中ノ井手堰ノ爲メニ淹留スル止水ナルガ故ニ此止水ニ對シ流水ヲ以テ論スルハ當時ノ事實ニ適合セサルモノトス又流水ノ底面ナルモノハ別ニ確然タル所有ノ証アルニアラサルヨリハ所有スルト云フヲ得ス何トナレハ川ハ上下一般ノ共有物ナレハナリ且上告人カ其堤証トスル第二號即チ普請帳ヲ閱スルニ川縁繕又ハ柵等ノ名目ノミノ記載ナルヲ以テミレハ其川ノ兩傍ノ田地ノ爲メニシタル修繕ノ証タルヲ得

ヘシモ流水ノ底面即チ川底修繕ノ証タルヲ得サルナリ又其第一號証ヲ閱スルニ高山下池ヨリ中ノ井手横堰迄用惡水路九百五拾八間云々トアリ之レ上告村提供ノ各池掛リノ耕地色分圖面ニ照考スルニ該水路ニ就テハ高山下池掛リノ水ハ即チ大奈良堰ニ於テセキ止メ以テ該高山下池掛リノ耕地ニ灌溉スルガ如ク各地ノ水ハ各田ノ用ニ供スル區別判然トシターモ大ナラ堰以下中ノ井手堰ニ至ルノ間上告村カ用水ノ爲メニ此川ニ流用スルトアルヲ看ス然レハ則チ右第一號証高山下池ヨリ大ナラ堰ノ間ニ在テハ該川路用水ノ証ト云フヲ得ヘシモ其以下ニ於テハ即チ上告村ノ惡水路ニシテ用水路ノ徵候ト爲スヲ得ス又其兩傍ノ田地ヲ所有スルモノハ云々トノ如キモ別ニ顯然著明ノ証書アルニアラサルノミナラス上告村カ提供ノ圖面ニ顯然各田地ニ各溜池ノ設ノアルニアラスヤサスレハ川

ノ両傍ニ所有ノ地所アリト云フヲ以テ隨意ニ之ヲ汲用スヘキ權アリト云フヲ得ス是ニ由テ之ヲ觀レハ則チ該論所ノ水ハ全ク被告中ノ井手堰ノ爲メニ塞止セラル、水ナルカ故ニ此水ヲ享有スルヲ得ルモノハ即チ此中ノ井手堰ヲ作用スル者ニアリ例ヘハ上告村ノ内ニ於テ大奈良堰ヲ作用スルモノ別段契約スルヲナケレハ即チ大奈良堰以上ノ水ヲ享有スルモノ、如シコノ故ニ大阪上等裁判所カ中ノ井手堰ハ原告被告兩村ノ境ニアリ左スレハ(被告)カ該堰ヲ以テ養水ノ蓄フハ被告カ村内ニアラスシテ上告村内ノ水路ナリ然ルチ上告村ニ於テ自分ノ村内ニアルヲ以テ勝手ニ之ヲ引用スル時ハ被告カ設ケタル堰ハ自然上告ノ養水ノ爲メ設ケタル筋合ニ當リ甚タ不相當ノヲナリト裁判セシハ相當ニシテ不適法ノ裁判ニアラストス

## 第三條

上告要領第四條ニ判文中其水汲場ト稱スルモノハ判然ナラサルヲ明白ナリトアルチ指摘シ該水汲場ナルモノハ俚語之ヲ土手場ト稱シ云々其土手場ノ所在ハ別紙圖面ノ如ク論所大ナラ堰ト中ノ井手堰ノ中間ニ十二ヶ所アリ其他ノ舊跡モ所々ニ散在ス云々ト申立ルト雖モ上告人カ大坂上等裁判所ニ於テノ陳述書ヲミレハ自村(上告)カ該水路ヨリ養水汲入レノ習慣タルハ往古ヨリ水路左右土手ニ水汲場數ヶ所設ケアリ但シ被告ニ於テハ該水路左右ニアル水汲場所ハ原告(上告村)ノモノ共流水盜ム場所ナリト上申スレモ盜ミ場所ノ斷然アルヘキ道理ナケレハ正シク水汲場所ノアルト決スレハ此一事ハ敢テ論スルニ足ラストアリ又當時上告村カ提供ノ圖面ヲ檢スルニ其水汲場所ノ標示ナキノミナラス唯自ラ其盜場所アルヘキ道理ナケレハ正シク水汲場

所ノアルト決スレハ敢テ論スルニ足ラスト放言セシニ止リ其果シテ盜場所ニアラスシテ汲取ルヘキ証左ヲ舉止シ以テ然ル所以ノ理由ヲ開陳セサルカ故ニ大坂上等裁判所ハ其正シク水汲場ノアルト決スヘキ理原ヲ觀察スルニ由ナキヲ以テ其水汲場ト稱スルモノハ判然ナラサルヲ明白ナリト裁判シタルナレハ是當時上告人ノ申立ニ對シ相當ノ裁判ニシテ臆斷ナリト云テ得ス

第四條

上告要領第五條ニ判文ニ水汲場ノ如キハ判然存在シタルヲナラハ清水池掛リ總代ノ者ヨリ被告第三号ノ約定書ヲ差入レヘキ謂レナシトアルヲ指摘シ凡ソ契約ヲシテ有効ノモノタラシメンニハ其双方ニ於テ甘心ニ出タル同意ナカルヘカラス云々警察官カ事情ノ取糺モナシ彼ノ新設ヲ不切落ニ於テハ糧倉ニ拘留スルナト暴慢頻リ

ニ脅嚇セラレ終ニ第六號ノ請書ヲ呈スルニ至ル云々申立ルトイヘ止告人カ大坂上等裁判所ニ於テノ陳述ヲ看レハ

洲本支廳ヘ云々出頭セシニ豈圖ラン同所警察所ヘ引牽セラレ彼水路中ニ取設ケシ樋ヲ除却スヘキ旨ヲ達セラレ依テ歸村ノ上田主人共ヘ申聞ケ取放ツヘキ旨意ヲ明記シ受書即是第六號ヲ出シ聞届ケラレ

トアルヲ以テミレハ當時警察官吏カ糧倉ニ拘留スルナトノ脅嚇ヲ以テ第六號ノ請書ヲ出サシメタル等ノ景況ヲ申立サルヲ明カナリトス又被告富本林三郎等ハ第三號約定ノ下案ヲ出シ同シク強迫シ以テ調印ヲ促シ再ヒ警察官ノ嚴責ヲ受ル所トナリ無余義調印云々申立ルトイヘ止告人カ大坂上等裁判所ニ於テノ陳述ニ歸村ノ際被告ヨリ第三號証ノ下案ヲ出シ本証書ニ認メ渡スヘキ

旨申聞ルニヨリ一應相斷ルモ右証書渡サ、レハ歸村ナラサルノ  
 ミナラス終ニハ櫃倉留ニモ相成ヘキ杯被告ヨリ申迫リタルニヨ  
 リ愚昧ノ村民彼レカ求メニ應シ第三號ノ証書ヲ渡シ歸村云々  
 トアルニヨレハ上告人ノ所謂再ニ警察官ノ嚴責ヲ受テ無余義調印  
 セント申立ハサキニ扣訴廳ヘノ申立ト官ニ齟齬スルノミナラス上  
 告人已ニ扣訴廳ニ於テ被告ヨリ明治九年六月洲本警察所へ出頭ノ  
 際官吏ノ壓制或ハ戸長云々被告ニ於テ頻リニ上申スレハ上告人ニ  
 於テ是等ノ義訴外ノコニ付論辨セスト申立タルニアラスヤソレ斯  
 ノ如ク上告人ハサキニ自カテ訴外ニ付シタル事柄ナルヲ今又之ヲ  
 口ニ籍キ被告第三號証ハ眞ノ契約ヲ構成シタルニアラス云々ト云  
 カ如キハ抑不都合ノ申立ナリトス  
 又彼ノ十一名ノモノハ総代タルモノトスルモ歸村ノ上衆ニ告テ取

除カントノ受書第六號ヲ呈シ自ラ其權ナキヲ表シタルヲ奈何ント  
 云フカ如キハ事理ニ反セル申立ナリトス何トナレハ右第六號ノ受  
 書ハ即チ上告人ノ内清水池掛リノ者カ官廳ニ對シ出シタルモノニ  
 テ當時上告人ノ内清水池掛リノ者ヨリ被告志築村中ノ井手掛リノ  
 者ニ對シ直接ニ第三號証ノ約定ヲナシ以テ新堰及ヒ瓦樋撤去ヲ舉  
 行シタルモノナルニヨリ此舉ハ即チ官廳ニ呈シタル受書ノ文意ニ  
 拘ハルヘキモノニアラサレハナリ  
 又一步ヲ退キ該定約第三號相當ノ總代人カ締結シタルモノトナス  
 モ其十一名ハ共同輩タル清水池掛リノ者ノミヲ牽束スヘクシテ餘  
 人タル高山下池掛リ及ヒ大和畠池掛リノ者八名ヲ牽束スルニ能ハサ  
 ルヲ奈何セン云々ト申立タルハ條理アル申立ナリトス何トナレハ  
 被告第三號証ヲ差入シモノハ清水池掛リノ者ノ所爲ニシテ高山下池



掛り及ヒ大和島池掛り八名ノ上告人ニ於テハ更ニ關係ナケレハナ  
 リ然ルニ大阪上等裁判所ハ八人ノ者ハ清水池掛りノ者ニ於テ約定  
 チ結ヒタルモノハ総代ヲ委任シタルモノニ非ストノ申立ハ不當ノ  
 申立ナリトシ又其總代ヲ爲シタルヤ相當ノ委任狀ハ授受セザリ  
 ニモセヨ一般ニ向テ總代ト看認タリト論セサルヘカラサルニヨリ  
 被告第三號ノ約定書ハ充分ノ効アルヘシトノ裁判ハ八名ノ者ニ對  
 シテ不都合ノ裁判ナリトス  
 又相當ノ代人カ爲シタルモノト爲スモ其約定ハ已ニ本訴爭論ノ起  
 リシ後成リタルモノナレハ既往ヲ斷定スルノ具トナスヘカラス云  
 ヲ云フトイヘ抑大阪上等裁判所カ裁判ノ要点ハ已ニ辨明ノ第二  
 條末文ニ掲ケタル如ク該水路ノ水ハ中ノ井手堰ノ爲ニ溜ル云々ニ  
 在リテ被告第三號証ヲ以テ本訴斷定ノ要具トセシニ非ストス

第五條

上告要領第六條ニ其戸長ヲ召喚ノ上原告カ親シク疑問スル上ナラ  
 テハ信ヲ措カタクキヲ云々申立ルトイヘ引合人ヲ喚問スルハ概テ  
 原被告ノ請求ニ因ルモノトス故ニ上告人ニ於テ右第五號ノ書面ノ  
 是非ヲ戸長等ニ疑問セントナラハ當時大坂上等裁判所ニ其事由ヲ  
 申シ以テ戸長ノ喚問ヲ請フヘキニ上告村ハ其之レヲ請ハサリシハ  
 自分ノ怠リナルニヨリ自分ノ怠リヲ以テ強テ違法ノ裁判ト云フテ  
 得ス

第六條

判文中ニ且夫レ清水池掛ヲ除ク残り八人ハ預リ知ラサル旨ヲ答ヘ  
 且清水池掛ニ於テ警察ニ於テ約定ヲ結ヒ區戸長立會ヲ以テ堰ヲ除  
 キ爭論結局迄傍觀シ因テ八人ノ者ハ右水路ニ關係スヘキモノニ非

スト云々トアルヲ指摘シ此八人カ新堰撤去ノ論ニ付知ルト知ラ  
 サルヲ論セス云々直ニ水路ニ關係スヘキニ非スト斷定スヘカラサ  
 レ理ヲ申明セントス抑本訴ノ基源ハ清水池掛田主等カ明治九年旱  
 魃ニ際シ云々除川〔論所中ノ一所〕ノ邊ニ一堰ヲ構造セシニ其五月下  
 旬被告者カ痛ク之ヲ拒メルニヨル而シテ其余ノ池掛ノ者ハ始ヨリ  
 其堰ノ築設ニ與カラス故ニ其除廢ノ事ニハ答辨ヲ與フヘキニ非ラ  
 ス故ニ預リ知ラスト云ヘルモ當然ナラスヤ若シ當時被告ノ論旨ヲ  
 シテ大奈良堰ヨリ中ノ井手堰マテノ流水ハ上告人ニ於テ一滴タリ  
 且汲用スヘカラストノ点ニ在ラシメハ該八人ハ必ス汲用權ヲ主張  
 シ何リ知ラスト辭謝スルモノアラントノ申立ハ條理アル申立ナリ  
 トス何トナレハ該水路中ニ新堰ヲ取設ケ又之レヲ撤去スル等ノ事  
 ハ清水池掛リノ者ノ所爲ナルニヨリ其結局即チ被告第三號約定チ

ナセシモ同池掛リ物代ノ者トノ契約ニシテ高山下池掛リ及ヒ大和  
 島池掛ノ八人ノ者ニ於テ始終關係セシニアラサレハ素ヨリ被告第  
 三號証ニ關係ナキモノナリ已ニ關係ナケレハ八人ノ者カ該水路ノ  
 水ヲシテ汲用權アリトノ申立ニ對シテハ引用スヘカラサルハ無論  
 ナレハナリ猶且連帶權利云々解説ノ如キハ抑不條理ノ解説ナリト  
 ス何トナレハタトヒ權義ニ連帶アルモ其連帶人ニ於テ知ラサル  
 ニ就テハ其連帶ノ權義ニ關係ナキモノナレハナリ又區長立會云  
 ヲ判語ノ如キハ事實ニ錯誤アルモノトス何トナレハ大阪上等裁判  
 所簿記中上告村申立ノ如ク新堰撤去ノ際ニ於テハ巡查吏ノ外區長  
 長等立會シトノ申立ナケレハナリ然レモ第四條以下本條迄ノ條件  
 ハ畢竟上告人等カ本訴本然ノ權利上ニ妨害ナキ枝葉ノ條件ナルヲ  
 以テ故ラニ破毀スヘキノ限リニ在ラストス

判決

前條々ノ筋合ナルヲ以テ大阪上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナ  
キモノトス

第三百三十號

○村小入用不勘定一件大阪上等裁判所ノ裁判不法上告ノ判文明  
治十一年九月十四日上告明  
治十二年七月三日申渡

原告 堺縣河内國河内郡額田

村額田得平代人

大坂府北區河内町一丁

目

勝原 歡次

被告 堺縣河内國河内郡額田

村西田武平外十八名総

代増田彌次郎平外四名

代言人

大坂府攝津國東成郡森

村士族

相澤 貞久

大阪上等裁判所ノ判文

第一條

被告ニ於テハ第十三號証據物明治二己年七月卯辰小入用並檢見入  
用二度洪水入用共割賦帳ト題セル帳簿ヲ以テ金七百八拾圓六錢貳  
厘五毛高一石ニ金九拾壹錢六厘六糸餘ニ重賦課ナル旨第十五號乃  
至十七號保証書ヲ以テ証明シ原告ニ於テハ被告申陳スル帳簿ハ一

且整理シタル迄ニ止リ廢物トナシ更ニ己年七月立會割賦帳但成年ヨリ卯年迄ト題セル帳簿ヲ製シ金七百四拾五圓拾錢七厘五毛九系高壹石ニ金八拾七錢五厘賦課シタル旨是亦第一號保証書ヲ以テ証明スルト雖モ原被告提供スル保証書タルヤ彼此同姓名者連署押印アレハ有名無實ノ保証ニシテ全ク原被告ノ作為ヨリ成立シタルモノナレハ真正ノ保証ナリト確認セス

第二條

原告ニ於テ明治二己年七月文久二成年ヨリ慶應三卯年迄前六ケ年間立換金七百四拾五圓拾錢七厘五毛九系高壹石ニ金八拾七錢五厘追割イタシタル旨申陳ス其帳簿表題三己年七月立會割賦帳但成年ヨリ卯年迄ト記明シアリテ立會人ナ名記セサルハ古來ヨリ習慣ナリト主張スレモ正シク立會割賦帳ナレハ六ケ年ノ星霜ヲ經テ葛藤

ヲ生スル謂レナシ是ニ因テ之ヲ觀レハ其何人ノ立會ナシタルヤ審究スル証憑ナク其金辻點視スルニ京都下宿龜屋藤吉方ニテ村取純ノ節御係リ三人并御門番衆中へ遺物等ト已下數点掲載アレモ總テ真正ノ立換ナリト云テ得ヘカラス依テ該帳簿ヲ以テ實施シタルトノ申分採用セス

第三條

原告ニ於テ被告請求スル金高七百八拾圓六錢貳厘五毛高壹石ニ金九拾壹錢六厘六糸餘打立タルヲナシト開陳スト雖モ今其原由ヲ推考スルニ卯年出作夫代金三拾五圓貳拾九錢四厘一村高辻へ可割戻ヲ其儘原告受領シ置キタルヲ以テ該金引去リ殘額七百四拾四圓七拾六錢八厘五毛高壹石ニ金八拾七錢五厘高辻八百五拾壹石五斗三升六合ニ賦課シ惣金額七百四拾五圓拾錢七厘五毛九系ヲ徵集ナス

ヨリシテ金三拾三錢九厘九糸取立過トナルモ其差異ヲ生シタルハ多數ノ内四拾五入ノ計筭ヨリ生シタルモノト信認セリ果シテ然ラハ被告請求ノ金高ト符合セルヲ以テ高壹石ニ金九拾壹錢六厘六絲打立タルヲナシトノ申分ハ不相立モノトス

第四條

原告於テハ被告所持スル其受取帳簿タルヤ前ニ引去リタル金額ノ記入ナク實際徵集ナシタル金員ノニ記入シアルヲ着眼シ飽マテ是ヲ正明シ亦卯辰小入用檢見洪水入用割云々卯辰追割云々ト簿冊中三四冊ニ明記シアルハ是何人ノ所爲ナルカ毫モ了知セズ喻ヘ一二冊ノ明記アルモ殘レル數拾冊ニ比較スレハ信認スヘキモノニ非スト主張スルモ現在簿冊中卯辰小入用割云々ノ文詞アリテ成年ヨリ卯年迄六ヶ年分ニ徵集シタルト正明スル文詞一冊タモ明記無之依

テ文詞ノ明記ナキヨリ比較スレハ三四冊ニ確手タル文詞明記アル上ハ己年七月取立ルト雖モ卯辰追割ナルヲ判然セリ

第五條

原告ニ於テハ己ニ六ヶ年立換金ヲ徵集シタルトノ申分ハ不相立ル被告請求スル金額七百八拾圓六錢貳厘五毛ナルモ慶應三卯明治元辰明治四未年三ヶ年間一村ヨリ徵集ナシタル金額貳千百貳拾三圓七拾八錢貳厘五毛該金ノ内千六百貳拾貳圓六拾三錢貳厘七毛全ク決算ナリシヲ被告ニ於テ了知シタルニ付差引金五百壹圓拾四錢九厘八毛正シク過當ノ取立ナリト審究セリ

第六條

前條々ノ理由ナルヲ以テ過上金ニ法律上ノ利子ヲ加算シ原告ヨリ被告へ速ニ返還スヘキモノト判定ス 明治十一年八月六日

大審院ニ於テ

原告 額田得平代人勝原歡次上告ノ要領 明治十一年  
九月十四日

訴訟ノ起因

上告者ハ額田村舊庄屋役ニテ其ノ在務中村方諸入用百事村高割ニ  
關スル分ハ先ツ庄屋手元ニ於テ一時立換置キ年々十二月頭百姓立  
會精算ヲ遂ケ高割ニ打立徵集スル習慣ナリ然ルニ額田村ハ困究者  
多ク文久二成年以來慶應三卯年迄六ケ年間ノ精勘ハ多分ノ立替ニ  
付村方協議ノ上徵集金ハ總計ノ中幾許ヲ徵集シ其殘額ハ自分ヨリ  
立換又ハ役儀ヲ以テ他借ヲ爲シ償ヒ置キタル處其立換殘額追々相  
嵩ミ一ト先皆濟ノ方法不相立レハ往々難澁ニ至ルベクト明治二年  
春以來村方一同協議ノ上文久二成年ヨリ慶應三卯年迄六ケ年間立  
換金ノ精算ニ取り掛リシ際從前大庄屋共ニ於テ村方ノ爲メ融通セ

シ金員ノ精勘ヲ要スル事件出來京都用達所ヨリ自分上京ヲ促ガサ  
レ同年四月上京不在中村方ノ者打寄卯辰小入用並ニ檢見入用二度  
洪水入用共割賦帳ト掲ケ被上告者ノ第十三號証高壹石ニ付金三分  
貳朱ト錢五百六文ノ割分ニ製シタル折柄自分歸村ノ上之レヲ一見  
シ前言協議トハ背反シタル製帳ナレハ該帳ハ廢シ更ニ上告者番外  
第二號証ノ如ク自分及ヒ村方頭百姓立會ノ上六ケ年來立換金ノ精  
算ヲナシ改メテ高壹石ニ付金三分貳朱ノ割賦帳簿ヲ製シ明治二年  
己七月ニ至リ該帳簿ヲ以テ割賦金ヲ徵集セシニ豈圖ラシヤ其後五  
ケ年ノ久シキヲ經テ被上告者ハ己年七月ニ徵集シタル割賦金ニシ  
テ卯辰小入用並ニ檢見入用二度洪水入用割賦金ナリト虚偽ヲ構造  
シ次テ明治四年未年三ケ年分共不勘定有之杯申立訴訟ニ及ヒシハ事  
實ニ反シタル訴訟ナルニ大坂上等裁判所ニ於テハ却テ被上告者カ

虚偽ノ申供ヲ採用セラレ裁判アリシハ不法ト思考スルニ付左ニ條  
款ヲ逐ヒ陳述ス

第一條

第一款 大坂上等裁判所ノ判文第一條ニ(原被告提供スル保証書タ  
ルヤ彼此同姓名者連署押印アレハ有名無實ノ保証ニシテ云々真正ノ  
保証ナリト確認セストアレハ被上告者カ提供スル保証書ハ曩キニ  
卯辰小入用并ニ檢見入用云々ト掲ケシ高壹石ニ付金三分貳朱錢五  
百六文ノ割賦ニ製シタル廢棄ノ精算ナルヲ小前ノ者ヲ教唆シテ取  
リタル保証ニシテ上告者カ提供シタル保証書ハ文久二戌年ヨリ慶  
應三卯年迄六ケ年間村方立換金則チ高壹石ニ付金三分貳朱宛割賦  
ノ保証書ニシテ被上告者所持高ト割賦金高ト符合シタル真正ノモ  
ノナルニ俱ニ真正ノ保証ト確認セスト裁判ナリシハ其因由ヲ推究

セサル審理不尽ノ裁判ト思考ス

第二款 同判文第二條ニ其帳簿表題ニ己年七月立會割賦但シ戌年  
ヨリ卯年迄ト記明シアリテ立會人ノ名記セサルハ古來ヨリ習慣ナ  
リト主張スレモ正シク立會割賦帳ナレハ六ケ年ノ星霜ヲ經テ葛藤  
ヲ生スル謂レナシ云々其何人ノ立會トシタルヤ審究スル証憑ナシ  
其金辻點視スルニ京都下宿龜屋藤吉方ニテ村取纏ノ節係リ三人並  
門番衆中へ遺物等ト已下數點掲載アレモ總テ真正ノ立換ナリト云  
ヲ得ヘカラストアレモ既ニ前ニ陳述スル如ク六ケ年立換金ノ割賦  
ナルヲ被上告者ニ於テ卯辰小入用及ヒ檢見入用云々杯ト一旦廢棄  
シテ帳簿ヲ以テ虚偽ヲ構造セシモノニテ上告者ハ其割賦ノ不正ナ  
ルヲ更正ノ爲ノ村方頭百姓立會ノ上精算ナシタル番外第二號証六  
ケ年立換金ノ真正ナルヲ及ヒ其立合人ノ儀ハ之ガ召喚アツテ逐一

審糺アラン丁チ乞ヒ既ニ其人名ヲ上告者ニ於テ上申シタルニ立合  
 人中〔被上告者カ爲〕三人ノミチ同道セヨト被上告者ニ達セラレ三  
 人ノミ出頭シ他ハ召喚ナキモ該三人ハ已ニ立會人ナリト看認メラ  
 レ其立會割賦セシフチ審問アリナカラ却ツテ判文ニハ其何人ノ立  
 會ナシタルヤ証憑ナシト斷セラレ又其立換金辻ノ如キ第二號及ヒ  
 第三號証ニ判然明記アルノミナラス其納メ且ツ拂ヒ先ヨリ之カ受  
 取証及ヒ証據トシテ呈シタル區長田口理郎カ預リトアル帳簿目錄  
 二十冊其他上告者被上告者カ争フ所ノ帳簿四冊及請取証ハ一々審  
 覽ナク將タ該帳其他諸帳簿中ヨリ拔萃シタル彼ノ番外第二號証六  
 ケ年ノ割賦金ナル其精算ニ立會爲シタル一同モ召喚ナクシテ該帳  
 簿ヲ以テ實施シタルトノ申分ハ採用セスト判決ナリシハ實ニ不法  
 ノ裁判ナリ又假リニ該判文ノ如クスルモ上告者カ帳簿ニ於ケル其

立會ナシタル証據之レナキニ付採用セラレストナレハ被上告者カ  
 証據トスル卯辰小入用並ニ檢見入用云々ト掲ケタル帳簿ニ於ケル  
 亦是立會人ノ記名ナケレハ其証左トナラサルヤ同一理ト云ハサル  
 ナ得ズ然ラハ則双方無証據ノ争ナルモノ、如シ已ニ双方無証據ノ  
 争ナリトセハ更ニ當初ニ遡リ上告者在役中十ケ年ノ精算ヲ遂ケ而  
 シテ其是非曲直何レニアルカヲ審判スヘキハ法理ノ應ニ止ムヘカ  
 ラサルモノナリ況ンヤ當初堺縣聽訟課へ被上告者共カ出訴ノ際區  
 長大東象五郎へ立會精算ノ儀ヲ命セラレ而シテ明治九年十一月該  
 區長ヨリ堺縣廳へ差出シタル上告者第六號上申書ニ於テモ引續キ  
 五ケ年ノ精算ヲ遂ケサレハ其過不足ヲ見ル能ハスト迄申立シテ上  
 告者カ証左トシテ上等裁判所ニ提供シアルモノナヤ

第二條



第一款 同判文第三條ニ(今其原由ヲ推考スルニ卯年出作夫代金三拾五圓貳拾九錢四厘一村高辻へ可割戻ヲ其儘原告受領シ置キタルヲ以テ該金引去リ殘額七百四拾四圓七拾六錢八厘五毛高壹石ニ金八拾七錢五厘高辻八百五拾壹石五斗三升六合ニ賦課シ惣金額七百四拾五圓拾錢七厘五毛九糸ヲ徵集ナスヨリシテ金三拾三錢九厘九糸取立過トナルモ其差異ヲ生シタルハ多數ノ内四拾五入ノ計算ヨリ生シタルモノト信認セリ果シテ然ラハ被告請求ノ金高ト符合セルヲ以テ高壹石ニ金九拾壹錢六厘六糸打立タルヲナシト申分ハ不相立モノトストアレモ夫代金ハ上告者第三號証據物ニ明記シアル如ク金三拾三圓四拾錢ナレハ乃チ其夫代金額ニ於テモ已ニ壹圓八拾九錢四厘ノ差異アルノミナラス而モ該夫代金ハ第三號証ノ如ク小堀代官所へ納メシ金四百圓ノ處ニ於テ差引シアルトナレハ

最ハヤ割戻スヘキ金員ニアラサルコトハ瞭然タルニ何故之ヲ度外視セラレ被上告者ガ無証據ノ請求高ニ殊更ニ此夫代金ヲ加算シ被上告者請求ノ金額ニ符合スルト判セラレタルヤ之レ解スヘカラサルノ判決ト思量セリ況ヤ判文ノ四拾五入云々ノ如キ其尤解シカタキ所以ノモノハ別紙計算書ノ如ク明治二年高持百四拾五人カ各自所持高ニ彼ノ判文ノ如ク高壹石ニ付金九拾壹錢六厘零六糸ヲ乘スルモ其拾ハ僅ニ壹錢六厘五毛四糸四八トナリ其入モ亦僅ニ壹錢七厘壹毛四糸六トナル然ラハ則四拾五入ノ差ハ實ニ僅カ六毛零壹貳ノ過剩ナルノミ焉ソ判文ノ如キ金三拾三錢九厘九糸ノ過剩金アルアラソ之ノ實ニ不當ノ裁判ト謂ハサルヲ得ス

第二款 同判文第四條ニ(現在簿冊中卯辰小入用割云々トノ文詞アリテ戌年ヨリ卯年迄六ケ年分へ徵集シタルト証明スル文詞壹冊ヲ

モ明記無之依テ文詞ノ明記ナキヨリ比較スレハ三四冊ニ確乎タル  
 文詞明記アル上ハ云々卯辰追割ナルヲ判然セリトアレモ果ノ卯辰  
 兩年ノ追割ナレハ村方ニ有之數百冊ノ請取通帳ハ何レモ同一ニ記  
 載シ可有之筈ナリ而シテ露キニ上等裁判所へ上告者カ第二號比較  
 書ノ如ク六ヶ年立換割ノ證據トシ請取通帳拾二冊〔其實十〕ヲ提供シ  
 タルニ儘カニ五冊ノミ點檢セラレ現在爲右衛門外三名カ請取帳ニ  
 六ヶ年立換割ト明記シアルハ點檢ナク概シテ壹冊ヲモ明記無之ト  
 ノ判斷セラル、ノミナラス彼ノ被上告者ニ於テ卯辰追割ニ牽強セ  
 ント欲シ受取帳ニ加筆セシコハ既ニ上告者カ大坂上等裁判所ニ於  
 テ筆勢墨色ノ異ナルコトヲ陳述シタルニ是亦採用ナクシテ卯辰追  
 割ナルヲ判然セリトハ審理不尽ノ裁判ナリト思考ス

第三款 同判文第五條ニ原告ニ於テハ巳ニ六ヶ年ノ立換金ヲ徵集

シタルトノ申分ハ不相立ニ被告請求スル金額七百八拾圓六錢貳厘五  
 毛ナルモ慶應三卯明治元辰明治四未年三ヶ年間一村ヨリ徵集ナシ  
 タル金額貳千貳百貳拾三圓七拾八錢貳厘五毛該金ノ内千六百貳拾  
 貳圓六拾三錢貳厘七毛全ク決算ナリシコト被告ニ於テ了知シタルニ  
 付差引金五百壹圓拾四錢九厘八毛正シク過當ノ取立ナリ云々又同  
 判文第六條ニ過上金ニ法律上ノ利子ヲ加算シ原告ヨリ被告へ返還  
 スヘシトアレモ該計算ハ何等ノ証ニヨリ之ヲ算出セラレシコトナル  
 ヤ又被上告者ノ了知シタルトハ何ヲ以テ了知シタルト看認メラレ  
 シヤ解スル能ハサル所ナリ而シテ被上告者カ主張セル帳簿ノ廢シ  
 タル所以及ヒ上告者カ立會精算ヲ遂ゲタル六ヶ年立換割ノコトハ前  
 條款ニ既ニ陳述シタルハ復々茲ニ贅セカレモ若シ被上告者カ請求  
 スル追割金取戻シヲ姑ラ眞正ノモノト假定スルモ該被上告者ハ

本村百四十五戸中ニ於テ僅ニ十九名ニシテ其所持高ハ即チ百四十  
六石六斗八升七合ナレハ之ニ對シテ裁判アルハ或ハ當然ナルヘキ  
モ全村高八百五拾壹石余ヲ併セ金五百拾壹圓四錢九厘八毛ニ法律  
上ノ利子ヲ加ヘ上告者ヨリ返還スヘント請求外ノ者及ヒ上告者ノ  
所持高迄ニ割戻スヘントノ判決セラレタリ然リ而シテ假リニ判文  
ノ如ク割戻スヘキモノトスルモ慶應三卯年ヨリ明治四未年迄前後  
五ヶ年間ノ區別アレハ何レノ年ニ法律上ノ利子ヲ加算スルヤ又幾  
金圓ニ分量ニテ計算スルヤ分明ナラサル不備不法ノ裁判ナリト思  
考ス

第三條

前條款ノ理由ナルヲ以テ大坂上等裁判所ノ裁判ヲ破毀セラレ更ニ  
公明ノ裁判ヲ與ヘラレンコトヲ乞フ

但シ訴訟入費ハ成規ノ通請求致候事

被告増田彌次郎平外四名代言人相澤貞久答辨ノ要領

上告要領第一條第一款ニ被上告者カ提供スル保証書ハ云々小前ノ  
者ヲ教唆シテ取リタル保証ニシテ原被カ提供シタル保証書ハ云々  
則チ高壹石ニ付金三步貳朱宛割賦ノ保証書ニシテ被上告者所持高  
ト割賦金高ト符合シタル真正ノモノナルニ云々其因由ヲ推究セサ  
ル審理不盡ノ裁判ト思考ス)トアレヒ上告者ハ何ヲ以テ被上告者ノ  
保証書ハ教唆シテ取リタルモノトナスヤ其証左アルコトナク又教唆  
シテ取リタルニアラス實際上動カス可カラサル眞個ノ情實ヲ書セ  
シメタルモノナリ上告者ノ保証書ヨリ反テ不正ニ出テタルナリ其  
不正ニ出テタルハ被上告者第十五號第十七號証ニテ明瞭ナリ上告  
者ハ自家ノ保証書ニ効力ヲ與ヘント欲シテ被上告ノ保証書ハ教唆

シテ取リタルナリト無根ノ説ヲ吐出スルモノナリ又上告者ノ割賦金高ト符合シタルト云フ其割賦金高トハ自家掌中ノ記載ニ係ル己年七月立會割賦帳ト題セル帳簿中ニ記載シアル七百四拾五兩ト承百七文五分九厘ヲ指シタルモノナルヘシ果シテ然ラハ假令詳明ニ符合スルモ決シテ其符合ヲ以テ真正ナリトナスヘカラス如何トナレハ其帳簿ハ上告者ニ於テ自家利益ノ爲メ故ラニ石高ニ符合スヘキ金高ヲ設ケ自家ノ勝手ニ作りタルモノナレハナリ此帳簿ハ上告者自家ノ勝手ニ作りタルモノナルハ被上告者ノ承認シタル証左ナキノミナラス立會ヲナシタルモノ無キヲ以テモ明カナリ此等ノ事項ハ通常事物ノ順序ニ反シタルヲ以テ立証者ヨリ之ヲ証明セサルヘカラス被上告者ニ在テハ所謂虛無ノ事柄ナレハ決シテ其承認セサルモノナリトノ証ヲ立テ得ヘキモノニアラサルナリ而シテ大

坂上等裁判所ニ於テ双方ノ保證書共真正ノモノト確認セラレザリシハ彼此同姓名者連署捺印アリテ其眞偽ヲ看認ムルニ由ナキニ因テナル可シ然レモ被上告者第十七號証ノ如キハ上告者ノ保證書中ノ姓名一人モ無之殊ニ其人々ハ元惣代及ヒ元年寄ニシテ村内諸勘定ノ節立會ヲ爲ス可キ人員ナレハ是ノ保證書ヲモ共ニ確認セストハ不當ナルカ如シト雖モ別ニ惣代等ヲ召喚ノ上審問アリ其証言ヲ聞キ而シテ後其原因ヲ推究シテ裁判セラレタルモノナレハ決シテ審理不盡ノ裁判ニアラスト思考ス

同條第二款中ニ六ヶ年立換金ノ割賦ナルヲ被上告者ニ於テ卯辰小入用及ヒ檢見入用云々杯ト廢棄シタル帳簿ヲ以テ虚偽ヲ構造セシモノニテ上告者ハ其割賦ノ不正ナルヲ更正ノ爲メ村方頭百姓立會ノ上精算ナシタル六ヶ年立換金ノ眞正ナルヲ云々其立會割賦セシ

ナ審問アリナカラ却テ判文ニハ其何人ノ立會ナシタルヤ証憑ナシ  
 ト斷セラレ又其立換金辻ノ如キハ云々審明ナク云々六ケ年ノ割賦  
 金ナル其精算立會爲シタル一同モ召喚ナク該帳簿ヲ以テ實施シタ  
 ルトノ申分ハ採用セスト判決ナリシハ實ニ不法ノ裁判ナリトアレ  
 且上告者ハ何等ノ証左アリテ六ケ年分ノ立換チナシタリト主張ス  
 ルヤ其証左ハ決シテアラサルヘシ其上告者ノ目シテ呈供シタル所  
 ノ割賦帳ハ前條ニ詳明シタルカ如ク上告者自家ノ利トナル可キ爲  
 メ勝手ニ作爲シタルモノニテ立會人ノ審問アリタルモ別冊書類寫  
 シノ如キ上申ナレハ該帳簿ハ決シテ六ケ年分ノ立換チナシタルノ  
 證據ニハ立タサルナリ其保證書ノ如キモ亦々強迫ニ由テ成リタル  
 モノナレハ真正ノ證據ニハアラサルナリ然レハ上告者ニ於テ六ケ  
 年ノ立換ナリト主張スルハ當ニ牽強附會ノ說ニ過キサルノミ上告

者ハ被上告者第十三號証ハ廢棄シタルナリ被上告者ハ虚偽ヲ構造  
 シタルナリト妄ニ証言ヲ逞フスルト雖モ實際ノ事柄ハ其成跡ノ証  
 チ得ヘキチ如何セン被上告者第十三號証ハ真正ニシテ廢棄ニ屬シ  
 タルモノニアラス被上告者ハ虚偽構造シテ訟求シタルニアラサル  
 ハ被上告者第一號乃至第十七號証及ヒ証人ノ証言等ニ由テ明晰タ  
 リ依テ大坂上等裁判所ニ於テ何人ノ立會ナシタルヤ証憑ナク該帳  
 簿ヲ以テ實施シタルトノ申分ハ採用セスト判定セラレタルモノハ  
 其帳簿中ニ立會人ノ証印ナク立會ナシタリト証言スルモノモトク  
 真正ト看認ムヘキ證據ナキノミナラス被上告者ニ於テハ之レニ反  
 シタル証左確然トシテ備ハリタレハ上告者ノ申分不當ナルヲ瞭然  
 タルヲ以テナリ是レ實際ニ適シタル最モ中正ノ裁判ニシテ決シテ  
 不法ナリトハ思考セズ

又上告者ハ同欸ニ於テ(上告者カ帳簿ニ於ケル其立會ナシタル証據之レナキニ付採用セラレヌトナレハ被上告者カ証據トスル卯辰小入用并ニ檢見入用云々ト掲ケタル帳簿ニ於ケルモ亦是レ立會人ノ記名ナケレハ其証左トナラサルヤ同一理ト云ハサルヲ得スト論セリ何ソ事理ヲ辨セサルノ甚クシキヤ上告者ノ帳簿ハ前項ニモ論シタルカ如ク立會人ノ記名モナケレハ其立會人ノ証言モナシ之レニ反シテ被上告者ノ帳簿ハ立會人ノ記名ナシト雖モ証據ト証言ニヨリ確實ナルヲ疑フ容ルヘカラス豈ニ之レヲ一同視スルヲ得ンヤ同第二條第一款ニ(夫代金ハ第三號証據物ニ明記シアル如ク金三拾三圓四拾錢ナレハ乃チ其夫代金額ニ於テモ已ニ壹圓八拾九錢四厘ノ差異アルノミナラス而モ該夫代金ハ第三號証ノ如ク云々被上告者請求ノ金額ニ符合スルト判セラレタルヤ解スヘカラスルノ判決

ト思量セリ云々判文ノ如キ金三拾三錢九厘九糸ノ過剩金アルアラソ實ニ不當ノ裁判ト謂ハサルヲ得ストアレモ大阪上等裁判所ニ於テ此ノ如ク判定セラレタルモノハ被上告者ハ其証第十三號末段ノ如ク差引金七百八拾兩壹朱ヲ上告者へ取立タルニヨリ其取立ハ全ク不當ナルヲ以テ金七百八十圓六錢貳厘五毛ノ返還ヲ求タルモノナリ然ルニ上告者ニ在テハ卯年出作夫代金三拾五圓廿九錢四厘ヲ一村ノ高辻へ割戻スヘキヲ其儘受取タルニ付被上告者第十三號証ノ金額ハ當然取立ツヘキモノト假定スルモ夫代金ト差引スレハ現ニ三拾五圓廿九錢四厘ノ取立テ過キコナルモノナレハ殘額七百四拾四圓七拾六錢八厘五毛ヲ高八百五拾壹石五斗三升六合ニ賦課スヘキヲ然ラスシテ七百四拾五圓拾錢七厘五毛九糸ヲ徵集シタルニ三拾三錢九厘九糸取立テ過キトナリタリ此差異端金四拾五

入ノ計算ヨリ生シタルモノト信認セラレタルナリ因テ被上告者請  
求ノ金高ト符合ストセラレタルモノナレハ決シテ不法ノ裁判ニア  
ラスト思考ス

同第二款三(數百冊ノ帳簿何レモ同一ニ明記アルヘキ管ナルニ數十  
冊中僅カ五冊ノミ點檢アリ其點檢中ニ第二號証中爲右衛門外三名  
等カ受取帳ニモ現在六ヶ年ノ立換割ト明記セシモノアレハ云々被  
上告者ニ於テ卯辰追割ニ牽強セント欲シ受取帳ニ加筆セシコ云々  
トアレ被上告者第一号乃至第十二號ノ証據ヲ以テ計算推究スレ  
ハ明治二年己七月ニ取立タルハ卯辰追割ナル丁明々白々タルヲ以  
テ此ノ如ク判定セラレタルモノナル可シ凡物件ノ受取書ヲ要スル  
所以ノモノハ其受取タルヲ証スル迄ノ爲メナレハ被上告者第一  
號乃至第十二號ニ至ル數証ニ記載方ヲ異ニシタルモ決シテ妨ケア

ルコナキハ法理上最モ見易キモノニシテ此等ノ事ハ抵抗者ニ於テ  
其反對証ヲ立テサルヘカラス然ラサレハ決シテ被上告者ノ証ヲ取  
消スヘカラス又第二號証中云々トアレ被上告者ニ於テ更ニ其事  
項ヲ解スル能ハス如何トナレハ上告者ニ於テ此ノ如キ帳簿ヲ有ス  
ヘキ道理ナキヲ以テナリ若上告者ニ在テ此ノ如キ反對証ヲ有スル  
アレハ終審裁判ノ前ニ於テ其事ヲ論スヘキ管ナルニ然ラスシテ他  
ノ苦情ヲ喋々シタルモノハ當時ニ在テ其反証ヲ有セサリシカ故ナ  
リ上告者ハ終審應ニ於テ本件ノ証據トシテ出シタルモノハ六ヶ年  
分ノ立換ナリト云フ計算帳即己年七月立會割賦帳ト題セル帳簿ト  
保証書トノミコソ其他ニ証據トシテ呈供セシモノアリシヲ聞カス  
上告者ハ今般上告ニ付テ如何ナル証據ヲ呈供シタルヤハ知ラサレ  
ト終審應ニ出サ、ル証據ヲ上告ニ付テ初メテ呈供スルカ如キハ上

告ノ大旨ニ悖リ其証ハ到底其効ナキモノナリ又被上告者ニ於テ加筆云々ト揮張スレモ是レ唯上告者一己ノ想像ニシテ一モ其加筆シタルトノ証左ハアラサルナリ却テ上告者ニ於テ第二號証ニ云々明記ト云フ者コソ加筆ナリト看破セサルヲ得ス何トナレニ終審廳ニ差出シタル証中一モ是等ノ事記載アラサリシモノナレハナリ因是視之大坂上等裁判所ニ於テ卯辰追割ナルヲ判然セリトセラレタルハ決シテ不尽ノ裁判ニアラスト思考ス者

同條第三款ニ被上告者ハ本村百四十五戸中ニ僅ニ十九名ニシテ其所持高ハ即百四拾六石六斗八升七合ナレハ之レニ對シテ裁判アルハ或ハ當然ナルヘキモ全村高八百五拾壹石余ヲ併セ金五百壹圓拾四錢九釐八毛ニ法律上ノ利子ヲ加ヘ上告者ヨリ返還スヘシト請求外ノ者迄ニ割戻スヘシトノ判決ハ實ニ不法ノ裁判ナリト思考ス

アレモ被上告者ハ固ヨリ全村ノ爲メ衆ニ代テ上告者ノ不勘定ヲ責メタルモノニシテ之レカ不當ノ取立テタルヲ判然スレハ全額ノ返還ヲ求ムルハ至當ナリ則チ其惣代トナリテ訴訟シタルヲ被上告者第十六號証ニテ明カナリ終審廳ニ於テ此ノ如ク判定セラレタルモ亦是ノ理由ニ憑據セラレタルモノナレハ決シテ不法ノ裁判ニアラスト思考ス

被上告者ニ於テ一步ヲ進メテ論述セン被上告ニ在テハ今般ノ喚徴ヲ受ケタル迄ハ上告者ノ上告シタルヲハ嘗テ知ラサリシナリ是上告者ハ上告スヘキ通報ヲ被上告者ニ爲サ、リシ故ナリ然ラハ上告者ハ控訴上告規則第十五條ニ背キタルモノニシテ上告ノ法式ヲ踐マサリシモノナリ上告スルニ其法式ヲ踐マサリシモノハ無論上告ノ効ナキモノト思考ス



前條々ニ陳辯論述スル如クナレハ大坂上等裁判所ノ裁判ハ不法ノ  
裁判ニアラサルニ付詳細審糺ノ上公明ノ判決アラントナケフ  
但シ訴訟入費ハ成規ノ通請求致候事

辨明

本訴ノ要点ハ上告人額田得平ニ於テ明治二年己七月庄屋役ヲ以テ  
村高壹石ニ付金三分貳朱宛取立シハ番外第二號ノ如ク文久二戌年  
ヨリ慶應三卯年迄ノ立換金ノ徴収ナリト主張シ又被上告者總代増  
田彌次郎平以下ニ於テハ第十三號ノ如ク卯辰兩年ノ小入用檢見入  
用並二度洪水入用等ノ爲メ得平カ追割ヲナシタルモノニシテ即チ  
村高壹石ニ付金三分貳朱ト又錢五百六文宛二重取立ナリト争フニ  
アリトス

第一條

上告人得平ニ於テハ曩キニ大坂上等裁判所ニ提供セシ番外第二號  
証ハ被上告者カ提供セシ第十四號ニ掲載スル所ノ帳簿廿冊中ニ之  
アル文久二戌年ヨリ慶應三卯年迄年々村方小入用勘定帳ヨリ成リ  
立チシト又々其証トシテ提供セシ上告者第二號計筭比較書ニ添フ  
タル當年村方小前上納金受取通帳十四冊ヲ比較スレハ何レモ高壹  
石ニ付金三分貳朱宛ニ相當セリト又此通帳十四冊中爲右衛門字右  
衛門庄右衛門傳右衛門分ニハ六ヶ年立換割ト明記アリト申立被上  
告者ニ於テハ之レニ抵抗シテ第十三號証ハ卯辰小入用檢見入用云  
々ノ追割ハ即チ得平カ二重取立ナルヲ以テ之カ還却ヲ要スル爲ニ  
明治二己年七月村方一同立會精勘セシヨリ成リ立シト其証トシテ  
提供セシ村方小前上納金受取通帳十二冊ノ内武平彌次郎平半内喜  
三五郎ノ分ニ卯辰小入用檢見入用云々ノ明記アルヲ以テ卯辰兩年

ノ追割ナリト申立タリ然ルニ被上告ノ所謂其第十三號証ノ結末ニ  
 高壹石ニ付金三分貳朱又錢五百六文共トアルヲ以テ之ヲ村方小前  
 上納金受取通帳十二冊ニ記載セル員數ニ比較スレハ被上告人カ証  
 書ニ相違シ却テ上告人得平カ申立ル高壹石ニ付金三分貳朱ニ必適  
 セリ又其十二冊中武平外三人ノ通帳ニ卯辰兩年ノ追割云々トアル  
 ハ上告人カ提供スル村方小前上納金受取通帳十四冊中ニ爲右衛門  
 外三人ノ分ニ六ケ年立換割ト記載アルト反對シ彼此撞着スルヲ以  
 テ何レモ立証トナシカタク況ヤ他ノ數冊ニ何等ノ事由モ記載ナキ  
 チヤ然ラハ則該受取通帳ヲ以テ徵收金額ノ如何ヲ証スルヲ得ヘク  
 モ其文詞ニ至テハ彼此矛盾スル所アレハ素ヨリ六ケ年立換割ナリ  
 ヤ將タ卯辰小入用檢見入用云々ノ追割ナリヤヲ証スヘキ裁判ノ材  
 料ト爲ヌヲ得サルハ論ヲ竣タサルナリ夫レ斯ノ如クナルニヨリ原裁

判所ニ於テ上告者得平カ申立ノ如ク果シテ被上告者十四號帳簿二  
 十冊中ヨリ拔キ立シヤ否ヤヲ審理スヘキ筋合ナルニ其審理ヲナサ  
 ハルノミナラズ又上告者得平カ提供セシ通帳ヲ逐一点檢スヘキニ  
 其之ヲ点檢セヌシテ判文第四條ニ被上告者カ提供セシ受取通帳簿  
 中現在卯辰小入用割云々ノ文詞アリテ原告カ戌年ヨリ卯年迄六ケ  
 年分ニ徵集シタルト正明スル文詞一冊ヲモ明記無之依テ文詞ノ明  
 記ナキヨリ比較スレハ三四冊ニ確手タル文詞明記アル上ハ己年七  
 月取立タルト雖モ卯辰追割ナルヲ判然セリト裁判シタルハ不法ノ  
 裁判ナリトス

第二條

上告者カ上告要領第一條ヨリ第三條追條款ヲ追ヒ申立タル事柄ハ  
 前第一條辨明ノ如クナルヲ以テ自ラ了解スヘケンハ殊更ニ辨明ヲ

與へス

判決

前條々ノ筋合ナルヲ以テ大坂上等裁判所ノ裁判ヲ破毀シ更ニ東京上等裁判所へ移スニヨリ同裁判所ノ裁判ヲ受クヘキモノナリ  
訴訟入費ハ成規ノ通り被上告者ヨリ償却スヘキ事

第三百三十一號

○年賦金淹滞一件東京上等裁判所裁判不當上告ノ判文  
明治十年八月上告明治十二年七月三日申渡

原告 山梨縣甲斐國南都留郡

桂村六百二十五番地平

民

天野伴藏

右代人東京府日本橋區濱町一

丁目十番地寄留秋田縣

平民

渡邊小太郎

被告 山梨縣甲斐國都留郡桂

村平民

米山源平

東京上等裁判所ノ判文

原告ニ於テ本訴第一號証書面金額百五拾圓ノ内金三拾圓ハ尋常ノ貸金ナレトモ第二三四號ノ帳簿并ニ第五號仕譯書ノ通り金百貳拾圓ハ小作滞金ナリ然ルヲ初審廳ニ於テ明治五年第三百十七號公布ニ依リ却下ノ裁判セシハ誤ナルノ甚キナリ何トナシハ小作滞ニ於

ルヤ尋常ノ貸借ト同一視ス可キモノニ非スシテ預金等ノ性質ヲ有セルモノナリ乃チ之レカ明証ヲ舉ンニ明治六年一月十三日司法省議定中ニ小作滯ハ右三百十七號公布ニ抵觸セサル趣ノ明文有リ此ヲ以テ觀レハ縱令丁卯以前ニ係ルモノヲ更改セルモ元來有効ノ小作滯ナレハ奚ソ同一ニ判定スルノ理アラシキヤ其他小作滯ニ係ル司法省指令等ニ因テモ其有効ノ憑據タル是又判然タリ前條ノ理由ナルニ付這回控訴及ヒタルナリ尤モ現今被告ヨリ償却受度請求スル金額ハ七拾貳圓ニテ則第一號証ノ成立タル明治五年ヨリ明治十年迄年々拾貳圓ノ合金ニ有之云々申立ト雖モ被告ニ於テハ原告第一號証ノ通り借用金有之ニ相違ナキモ被告ハ原告ノ爲メ百般ノ事務ニ勞力ヲ盡シタルヨリ既ニ其証書ノ義務ハ被告カ勞苦ト交換シテ濟方ナルヘキ約ナルカ故是迄原告モ更ニ不問ニ措キタルナリ然ル

キ這回該証ヲ舉テ請求スレモ右ハ丁卯以前ニ係ルモノニテ公法ニ對シ其權利ヲ有セサルモノト信認スレハ旁以今更被告ヨリ償却スルニ不及モノニシテ原告請求スル小作金ノ儀ハ安政五年十二月中被告所有地ヲ原告ニ質地ニ差入レ而シテ小作致シ居ル所期限内受戻シタルハ小作滯金ハ其節精算ノ上相渡シタルニ付五圓位ノ殘金ハ之アルカ相分カラサルモ原告請求スル如キ多分ニハ無之若シ右様多分ニ有之ナラハ質地受戻ノ儀ヲ原告承諾スヘキ謂レナキ旨申立依テ原告第一號証ヲ閱スルニ小作滯其外扶喰云々ト記載アレハ其内尋常貸金ハ何程ニシテ小作滯金ハ何程ト其區別判然セサレハ原告カ一己ニ調成シタル第二三四號ノ帳簿並ニ第五號ノ仕譯書ニ據テ小作滯金ハ百貳拾圓之アリト云フモ信認シ難シ然リト雖モ被告ニ於テ小作滯金五圓位ハ之アルカ相分カラサルモ原告請求スル

如キ多分ニハ無之ト云フニ付該金五圓被告ヨリ原告ニ償却受ヘシ  
其他ハ被告ヨリ返償ノ義務アルモ尋常貸借ニ無之トノ確証アルニ  
非サレハ裁判不及儀ト可相心得事

但シ訴訟入質ハ成規ノ通り被告ヨリ原告ヘ償却スヘシ  
明治十二年二月十日  
日七

原告代人高尾端造明治十二年一月十四日ノ口供

一本訴小作滞リノ原因タル地所ハ元ト被告ノ所有地ニシテ拾ケ年期  
ニテ原告方ヘ質地ニ取置タル義ハ相違無御坐尤モ被告カ期限内受  
戻シ候標申立候得共左様ノ次第ニハ無之被告ニ於テ原告ニ對シ種  
々功勞等モ有之且被告困窮ノ際情願ノ次第モ有之ニ付之カ爲メ差  
遣シタル義ニ御坐候事

被告米山源平明治十二年一月十日ノ口供

一被告ニ於テハ原告提供スル第一號証ノ通り借用金有之ニ相違無之  
候得共答書中ニモ記載ノ通り被告ハ原告ノ爲メニ百般ノ事ニ勞力  
致シ候ニ付其功勞ト交換シテ濟方可相成約ナルカ故ニ是迄原告モ  
不問ニ措キタル義ナレハ今日ニ至リ原告ニ於テ請求スルモ丁卯以  
前ニ係ルモノニ有之旁以テ今更被告ヨリ償却スルニ及ハサル者ト  
相心得申候事

同 明治十二年一月十四日ノ口供

一原告ニ於テハ被告カ金圓ニテ返却スルヲ差拒ムナレハ正米及麥ニ  
テ返戻スルモ妨ケナキ旨申立候得共被告ニ於テハ小作滞ハ無之義  
ト相心得居ルニ付米麥ニテモ差戻シ候筈ハ無之候事

大審院ニ於テ

原告 天野伴藏代人渡邊小太郎上告ノ要領 明治十二年  
四月八日

東京上等裁判所判文中原告第一號証ヲ閱スルニ  
第一號証

借用金年賦証文之事

一金百五拾兩也

但通用金也

當申ノ十二月ヨリ來ル已十二月迄拾ケ年賦壹ケ年金拾五兩

右者萬延元庚申ヨリ當未十二月迄小作滯其外扶喰買入トシテ借用罷在候處返濟方難澁ニ付左ノ加判人ヲ以當申ノ十二月ヨリ來ル己ノ十二月迄無利足年賦御無心申入候處格別ノ御慈愛ヲ以御聞濟被下忝存候然ル上ハ前書ノ金拾五兩ツ、年々十二月十五日限リ無遲滯返濟可仕候萬一壹ケ年タリモ差滯候カ又ハ違變ノ義モ有之候ハ、加判人ニテ辨金聊タリ共貴殿ニ御無心ケ間敷義決而不申入。依之差入申借用金年賦証文依而如件

當村

借主 米山源兵衛印

組合兼親類

証人 米山五右衛門印

同斷

同 米山永平印

境村

天野伴藏殿

小作滯其外扶喰云々ト記載アレ其内尋常ノ貸金ハ何程ニシテ小作滯金ハ何程ト其區別判然セサレハ原告天野伴藏カ一已ニ調成シタル第二三四號ノ帳簿並第五號ノ仕譯書ニ據テ小作滯金ハ百貳拾圓之レアリト云フモ信認シ難シトアレモ元來小作滯タルヤ貸借ト

ハ異ナルモノニシテ之レヲシテ權利ヲ失ハシムル一定ノ法律在ルヲ見ス茲ヲ以テ原告天野伴藏カ之レヲ訴フルハ至當ノ點ニアリトス

東京上等裁判所ニ於ケルモ然リトシタレモ其區別云々ノ項ニ至テハ甚ダ不當ナリ何トナレハ被告「米山源平」ニ於テ疑キニ小作セシトハ疑フ可キナリ左スレハ之レニ對シ若干ノ収入スヘキハ論ヲ俟タサル所ナリ然リ而テ原告天野伴藏ハ第五號明細書ヲ第一號ノ原因トシ供スルニ果シテ被告米山源平申陳ノ如ク金五圓許ノ滯リナリト云ハ、必ス該收入ノ受領証〔小作〕取又ハ他ノ証ヲ以テ該五號ヲ覆ヘシ然ル後一號証ニ及ホシ其抗拒ヲ爲ス可キニ否ラス唯口頭ノ苦情ニ過キスシテ一ツノ証言セシヲ見ス凡一方ノ証ヲ批難スル者ハ否ラサル反對ノ立証ヲ爲スハ法理ノ主義ナル可シ然ルニ被告米山

源平ハ茲ニ及ハサルノミナラス其五圓ノ外ハ尋常ノ貸借ト云フモ之レ亦空言ナリシ然ルチ東京上等裁判所ハ右ノ如ク徒ニ區別判然セスト判決ヲ下タセシハ審理不盡ナル不當ノ裁判ト思考スルニ據リ破毀アラントナ乞フ

一第五號ヲ批駁スル反對之立証モナキニ被告カ口頭之陳述ノミニニ據リ裁判セラレシフ

右上告ノ主點ニ有之候

辨明

上告人ハ第一號証ノ原因トナルヘキ第五號証小作滯貸金仕譯書ヲ差出シタルニ被告ハ右五號証ヲ批駁スル反對ノ証ヲ立サリシニ原裁判所カ右ノ裁判ヲ下サレシハ不當ナリト申立レモ右第五號証ハ上告人一己ノ調製ニ出タルモノナルニ付原裁判所カ採用セカリシ

ハ不法ニ非ストス左スレハ其第五號仕譯書ニ對シ反對ノ立証ヲ爲  
サ、ルヲ得スト云ノ理アルコトナレトス如何トナレハ一己調製ノ者  
ハ相手方ノ關セサル者ナルニ付之ヲ以テ相手方ノ義務ヲ負擔スル  
コトヲ承諾セシ証ト爲スコトヲ得サルヲ以テ一己調製ノ者ハ無証ノ場  
合ト同一ナリトス既ニ無証ノ場合ナレハ無証ニ對スルノ反對証ノ  
有ルヘキ筈ナキヲ以テナリ

判決

右ノ筋合ナルニ付東京上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナキモノ  
トス

第三百三十二號

○配水差違一件大阪上等裁判所ノ裁判不法上告ノ判文  
明治十二年七月上告明治十二年七月七日申渡

原告 愛媛縣讀岐國多度郡善

通寺村外五ヶ村

同縣同國香川郡宮脇村

士族

右總代 椎名秀胤

被告 同縣同國那珂郡

上 櫛梨村

下 櫛梨村

引合 同縣同國同郡

與 北村

同 同縣同國同郡

木 徳村



大阪上等裁判所ノ判文

第一條

被告下櫛梨村ニ於テ引合村第一號契約證ハ縣廳官吏派出ノ上嚴シク説諭ヲ受クルト雖モ該配水ノ義ハ曩ニ原告村ト契約取結ヒタルノミナラス固ヨリ被告上櫛梨村ト共同連帶ノ義務アル配水ナレハ一應同村へ協議ヲ遂ケ度暫時ノ猶豫ヲ乞ヘモ聞届ナク頗ル壓制トハ心得ナカラ其猛威ニ恐怖シ止ムヲ得ス引合村へ契約ヲナシタル旨陳供シ被告上櫛梨村ニ於テモ共ニ之レヲ本訴ノ要旨トナシ脅迫不備ノ契約ハ自カラ故紙ニ屬スヘキハ理ノ當然ニ付字泉田ノ氷門ヲ撤去シ原告村へノ契約ヲ履行シ引合村トノ契約ハ斷然無効ニ歸スヘキ旨申立レモ抑縣官等ノ脅迫壓制ヲナシタリトハ管ニ口頭ノ陳述迄ニシテ証左ナキノミナラス眞ニ壓制等ヲ爲メ結ヒタル契

約ナラハ其儘ニ打過キ難キハ無論ノ義ナルニ一年間何タル苦情等アルナク翌年ニ至リ原告村ヨリ契約履行ヲ訴フルニ際シ原告村へ對シ答フルニ道ナキニヨリ斯ク壓制等ヲ假託シタルモノト看認メサルヲ得ス何ントナレハ引合村第一號契約書タルヤ縣官並大區長出張ノ上被告下櫛梨村惣代ハ勿論被告上櫛梨村大森助八及ヒ戶長小區長ニ於ケル連署シ而シテ被告上櫛梨村ニ於テモ川西田地持主タル大森助八連署シタルハ全ク承諾ナキモノト見認メ難クレハ之レヲ以テ脅迫不備ノ契約ト爲スヲ得サレハナリ依テ被告村ニ於テ該契約ヲ取消サントノ申分相立サルモノトス

第二條

原告村ニ於テ到底兩個ノ契約相抵觸シ兩立スル能ハサレハ素ヨリ一方ノ契約ハ自カラ無効ニ歸セサルヲ得ス然レハ被告村ニ於テ後

約ナル引合村トノ契約ヲ廢棄シ先約ナル原告村トノ契約ヲ履行ス  
 へキハ當然ナル旨申立レヒ抑契約ノ性質タル互ニ約ヲ違へサルヲ  
 ヲ表スル爲ナレハ原告村ニ於テ明治九年八月十九日ニ至リ引合村  
 ヨリ故障アル趣ヲ以テ配水差扣へ吳度ト申來リシナラハ當時契約  
 シ行ハレサルハ判然ニ付養水ニ差闕ユルト否トニ關セス原告村ノ  
 權利ニ係レハ直チニ其原由ヲ取調へ掛合等ナスへキハ當然ナルニ  
 其儘一年間打過ルニ至リテハ原告村ニ於テ既ニ默許シタルモノト  
 認定セサルヲ得ス依テ原告村ニ於テ自己ノ契約履行スへキハ當然  
 ナリトノ申分相立ス

第三條

原被告村共字泉田掛樋及ヒ埋樋ノ儀ニ付引合村ト互ニ其有無ヲ爭  
 フト雖モ目今ニ至テハ引合村トノ契約ニ據リ更ニ樋門ヲ設ケ以前

ノ形跡ニ非サルハ何レノ口供モ符合スレハ其以前ニ溯リ之レヲ審  
 定スルニ由ナキノミナラス第一條第二條ニ判スル理由ニ付更ニ辨  
 明ヲ要セザルモノトス

第四條

前條々ノ理由ナルニヨリ原告ハ被告村ノ依頼ヲ以テ取結ヒタル契  
 約ハ自カラ無効ニ歸シタルモノニ付原告村へ養水灌漑ノ義ハ該契  
 約以前ノ水路ニ復歸セシムへキ者ト判決ス  
 明治十一年  
 九月三十日

第一號 (上告村証)

餘水差遣ノ義ニ付爲取換約定書

第一條

一當村三田出水其外出水掛リ田地ニ灌漑之餘水アルキハ自今多度  
 郡生野上吉田下吉田稻木善通寺中村へ配水約定取極候事

第二條

一第一條ノ通取極候ニ付下櫛梨村字泉田ヨリ當村川西田地へ灌漑之水路ヨリ指遣候事

第三條

一右出水并ニ水路等天變地異其外費金出來候時ハ相當ノ費金申受候事

第四條

一旱魃之節ハ勿論平年等モ注意致シ配水可致候事

第五條

一右之通約定相整候ニ付御村ヨリ他區他村へ配水ハ不相成候事  
右之通相違無之候也

明治九年八月十六日

第三大區四小區

上櫛梨村

總代

森 和 七印

大西 幸 四郎印

同區下櫛梨村總代

宮 武 浪 治印

白川 利 三郎印

第三大區七小區滿濃

氷掛リ六ヶ村總代

生野村

高 田 貞 五郎殿

上吉田村

大喜多濱造殿

中村

龜野直吉殿

第二號証〔上告村証〕

記

一上下櫛梨兩村ニ有之出浦之水掛リ田面へ灌溉ノ餘水アル時者自今多度郡六ヶ村滿濃水掛リへ配水致候條双方連印ヲ以此旨申上置候也

明治九年八月十六日

第三大區七小區

滿濃池水掛リ六ヶ村

總代

生野村

高田貞五郎印

上吉田村

大喜多濱藏印

中村

龜野直吉印

同大區四小區

上櫛梨村

森和七印

大西幸四郎印

下櫛梨村

宮 武 浪 治 印  
白 川 利 三 郎 印

第三大區四小區

正副區長

御中

同大區七小區

正副區長

御中

第二號證 (引合村證)

明治九年九月十二日決定

條約爲取替書

第一條

一 那珂郡下櫛梨村用水三田出水ヨリ同村川西田地ニ灌漑水之水  
跡與北村ト差違ニ付下櫛梨村ヨリ愛媛縣御出張所へ九月十一日  
願出候所本日官員十二等出仕山本厚徳殿御出張ニ付大區長後藤  
謙殿御立會實地御檢査之上双方御取糺厚ク御説諭相成左ノ通  
和解條約爲取替ニ及ヒ候以上ハ向後右地所ニ付聊異論申問敷  
事

第二條

一 下櫛梨村用水若シ餘水有之時ハ字金倉川西田面へ灌漑之  
節用水路堤防埋樋之義ハ長巾深等別紙圖面之通取極メ可申  
事

第三條

一 埋樋水門之義ハ平常錠ヲロシ置錠ノ義ハ四小區々務所へ預ケ

置可申事

第四條

一 埋樋水門戸開之節ハ時間ヲ極メ前以下櫛梨村ヨリ四小區々務所ニ申出御許可之上鍵受取戸開致シ閉戸之節ハ鍵無遲滯同所ニ相納可申事

第五條

一 四小區々務所ニ於テ開閉御許可之節ハ其段同郡與北村ニ御通達被下度事

第六條

一 旱魃等之節ハ別テ人民相互ニ救助候ハ無論ニ付他區ヨリ餘水請出候ハ、其實實四小區々務所ニ可申出尤同所ヨリ三小區二小區々務所ニ早速掛合熟議之上分水可致事

右之條件決定相成リ候以上者聊カ違背申間敷依之爲取替條約書如件

第三大區四小區下櫛梨

村總代

大西 品太郎

宮武 浪次

白川 利三郎

高尾 壽間次

白川 雛次

川西田地持主總代

上櫛梨村

天 森 助 八

同大區三小區與北村總  
代

川邊 權次郎

松岡 平五郎

山根 柚藏

山下 鹿藏

山下 道藏

同大區二小區

木德村

小田 繁藏

福崎 多郎次

和氣 忠次郎

前書確定之趣承置候也

第三大區四小區

小區長

長谷川 喜平次

副小區長

井上 守雄

戶長

七條 元次

同大區三小區

小區長

西岡 豹太郎

副小區長

豐田 元良  
戸長

山下 八三郎

同大區二小區

小區長

川田 新十郎

戸長

小田 繁藏

大審院ニ於テ

原告 善通寺村外五ヶ村總代椎名秀胤上告ノ要領

訴訟ノ起因

一上告者六ヶ村ハ被告上下櫛梨兩村ノ下流ニアリ往古ヨリ滿濃井

手ト三田涌等ノ諸出水トヲ以テ田地へ灌溉シ來ル所明治九年六月  
廿一日被告上下櫛梨兩村ノ依頼ヲ以テ更ニ井手ヲ掘廣ケ滿濃井手  
水ヲシテ多ク三田涌等ノ諸出水ト混シ字泉田ノ所ヨリ歸セシムル  
ニシ同年八月十六日第一號証書ノ如ク結約致シ又第二號証書ヲ區  
長へ出シ爾來水路ノ修補ニ着手シ同年八月十八日修補後始メテ水  
ヲ引キタルニ其翌十九日被告村〔下櫛梨村〕ヨリ引合木德與北兩村ヨリ  
故障アル趣ヲ以テ暫ク差扣ヘヨト申來リ其意ヲ解シ得スト雖モ當  
年降雨多ク養水ニ差支ヘナキヲ以テ故障埒明ケノ事ハ被告ニ屬シ  
置キシニ翌明治十年四月仲旬圖面乙印ノ處ニ樋門ヲ設ケ洧滴モ漏  
サ、ルニ付其ノ理由ヲ尋問スルニ曖昧ノ答ナルニヨリ同年七月十  
八日被告村へ配水申入レタル所引合與北木德兩村トノ定約致シタ  
ルニ付配水難出來旨答ヘタリ因テ始審應ニ訴ヘ明治十一年二月廿



七日判決ヲ受ケ次テ明治十一年五月廿七日大坂上等裁判所へ扣訴  
シ同年九月三十日裁判ヲ受タレモ不法ノ裁判ト思考スルニ付左ニ  
陳述ス

第一條

大坂上等裁判所判文第二條ニ「當時契約ノ行ハレサルハ判然ニ付養  
水ニ差問ユルト否トニ關セス原告村ノ權利ニ係レハ直ニ其理由ヲ  
取調ヘ掛合等ヲナスヘキハ當然ナルニ其儘一年間打過ルニ至リテ  
ハ原告村ニ於テ既ニ默許シタルモノト認定セサルヲ得ス云々」トア  
レモ該契約ノ行ハレサルハ原告於テ當時何等ノ故障生シタルヤハ  
知ラスト雖モ被告ノ依頼ニヨリ故障埒明チ爲シ遂ケ我カ契約ノ結  
局行ハル可キヲ信認シタルカ故被告ニ任セ置キタルナリ然リ而  
シテ其理由ヲ取調ヘキトノ「ハ斯ノ場合ニ原告自ラ其理由ノ取調

チ爲サ、ルヲ得スト云フ判意ノ如クナレモ到底被告カ埒明ケサル  
ヲ見テ原告カ其理由ヲ取調ルコソ手順ノ當サニ然ルヘキ者ナレハ  
被告ニ埒明ヲ任セ置ヨリ迎我カ怠リニ非ラサルナリ將又一年間打  
過ルニ至リナハ原告村ニ於テ既ニ默許シタルモノト認定スルトハ  
期滿得免ノ定規アリテ然ク判定セラレタルカ決シテ左ニ非ラサ  
ルヘシ苟モ期滿得免ノ法律ナケレハ該配水ノ如キハ年中之ヲ用フ  
可キ者ニアラス唯僅カ一年間中一兩月ノミニシテ其時ニ當リ降雨  
アレハ之カ井手水ヲ要セヌ要セサル時ハ急ニ被告村ヲ嚴責シ困却  
セシメサルモ來年引水ノ日迄ニ埒明シキハ原告於テ差支ヘアルコ  
トナシ故ニ翌明治十年七月引水ノ時ニ至リ猶埒明ケサルヲ以テ之レ  
カ出訴ニ及タルモ敢テ原告カ等閑默許シタリト云フヲ得ス而シ  
テ原告第一號ノ契約ハ明治九年八月十六日ニシテ被告ガ引合村ト

ノ契約ハ明治九年九月十二日ナレハ先約ナル原告約定ニ効力アル  
ハ法律上無論ナルニ一年間等閑置キシハ被告カ引合村トノ契約ヲ  
黙許シタル如キ裁判ハ條理ニ適セサル裁判ナリト思考ス

第二條

同判文第三條ニ(以前ノ形迹ニ非サルハ何レノ口供モ符合スレハ其  
以前ニ溯リ之ヲ審定スルニ由ナキノミナラス云々)トアレハ其形迹  
即チ固有ノ掛樋今ニ存在スルハ原告第三號証書ノ如シ而シテ此ノ  
掛樋ナキトハ與北木徳兩村井手ノ西面ニアル田地ハ何ノ水ヲ以テ  
之ヲ養ハンヤ之ヲ以テ埋樋掛樋ノ古來裝置シアリタルヲ明了ナル  
ニ一應ノ實檢モナク充分ノ審問モナクシテ之ヲ審定スルニ由ナシ  
トハ審理不尽ノ裁判ナリト思考ス

第三條

前條々ノ通り原告ハ被告ノ依頼ニ付互益ノ契約ヲ遂ケタルナレハ  
今日ニ至ルモ引合村ノ新設水門ヲ撤去シ原告ノ約定ヲ履行スヘキ  
者ナレハ大坂上等裁判所ノ裁判ヲ破毀セラレ更ニ公明至當ノ裁判  
アラントシヨ

上告ノ主點

第一 原告第一號契約ハ明治九年八月十六日ニシテ被告カ引合村  
トノ契約ハ明治九年九月十二日ナレハ先約ナル原告約定ニ効力  
アルハ法律上無論ナルニ一ケ年間等閑置キシハ被告カ引合村ト  
ノ契約ヲ黙許シタル如キノ裁判ハ不條理ナリトノ  
第二 固有ノ掛樋今ニ存在スルハ原告第三號証ノ如シ埋樋掛樋ノ  
古來裝置シアリタルヲ明了ナルニ一應ノ實檢モナク裁判セラレ  
タルハ審理不盡ノ裁判ナリトノ

辨明

第一條

本訴ノ要点ハ左ノ二項ヲ審理推究スルニアリ  
 第一 上告六ヶ村カ被上告上下櫛梨村明治九年八月十六日第一號  
 ノ契約ヲ爲サ、ル以前ハ上告村ハ如何ナル場所ヨリ引水シ來リ  
 シヤノコト

第二 引合與北木徳兩村ニ於テ上告村カ被上告村ト第一號契約ニ  
 就テ如何ナル妨害ヲ來スヤ否ヤノコト

右第一項ノ場合ニ就テ原裁判所ノ簿記ヲ案スルニ明治十一年九月  
 十三日對審ノ際上告村カ口供第一條ニ

被告〔上下櫛梨村〕兩村ト第一號契約ナサ、ル以前ハ提供圖面滿濃井手  
 ト記載アル井筋ヲ西南ノ方ヘ流通シ金倉川ニ落シ多度横井ヨリ

原告村〔上告六ヶ村〕ヘ引來リ候事

又同口供第二條ニ

前條ノ井筋ニ復スルモ第一號契約通り被告村〔上下櫛梨村〕内ヲ通過シ  
 タル水ヲ引モ田面ヲ養フニ少モ得失ナケレト其修繕費等ニ至テ  
 ハ第一號契約通りナサハ大ニ減スル云々

トアルニヨレハ夫ノ第一號契約ハ従前ノ仕來リチ廢シ新規ノ所爲  
 ナルコト明瞭ナリトス第二項ハ前第一項ノ新規契約ニ就テ引合村カ  
 明治十一年八月廿三日提供書ヲ案スルニ

〔摘要〕引合與北木徳村ニ於テ第二號証ノ約定セシ以前ノ形狀ヲ申  
 供スヘシ云々引合兩村ハ第二號圖ノ如ク第一用水〔野田横井〕第二  
 用水云々第二養水ハ與北西部並ニ木徳全村ノ養水ナリ而シテ往  
 古ヨリ第一用水ハ上下櫛梨村ノ東面ヲ流過スル故與北東部ノ養

水ト雖モ餘水ヲ上下櫛梨村ニ配與セリ此報酬トシテ眞野井手及三田涌等ノ金倉川ニ流出スル部分ヲ除キ第二用水ニ流込木ノ井涌水等ハ皆先キニ施シテ本ニ復ルノ道理ヲ以テ與北木徳兩村ノ養水トナレリ此等ハ皆故例慣習ニシテ若一跌ノアルアラハ忽チ流下ノ各村大害タルノミナラス重大ナル地租改正ノ舉ニ變動ヲ生スヘシ云々

トアルニ對シ上告村及被上告村等ニ於テ何等ノ弁駁ヲモナサ、リシニ據レハ眞野井手及ヒ三田涌等ノ金倉川ニ流出スル部分ヲ除キ并ニ木ノ井涌水等ノ餘水ハ從來與北木徳兩村ノ養水トナリ來レリト無論ナリトス况ンヤ上告村ヨリ被上告村ニ差入タル第一號証中ニ御村内三田出水其外出水掛リ田地ニ灌溉ノ餘水アルキハ當方六ヶ村ニ配水又ハ字泉田ヨリ配水被下度又區務所届出書ニ上下櫛梨

村ニ有之出涌之水掛リ田地灌溉ノ餘水アルトハ自今多度六ヶ村滿濃水掛リニ配水云々トアルニオイテキヤ是ニ由テ之ヲ看レハ則被上告上下櫛梨村ノ餘水渾テ上告村ニ遣スヘキノ契約ヲナセシニヨリ引合村カ忽チ從前引來レル余水ニ關係ヲ生セシカ故ニ被上告ノ内下櫛梨村ニ係リ明治九年九月十二日第三號ノ契約ハ抑原由アルモノニシテ上告人ノ所謂彼此契約日次ノ先後ニヨツテ其効力ヲ論スヘキモノニアラストス

又原裁判所判文第二條ニ當時契約ノ行ハレサルハ判然ニ付云々トアルヲ指摘シ該契約ノ行ハレサルハ原告ニ於テ當時何等ノ故障シタルヤ知ラス云々申立ルトイヘ夫レ契約ハ將來ヲ固定スルモノニアラスヤ爾ルニ其契約ニ忽チ故障アルノ報知ヲ得ルモ漠然之ヲ不問ニ措キスベテ被上告下櫛梨村ノ所爲ノマヽニ放擲シ置キタル

ヨヨリ原裁判所カ默許シタルモノト認定セシハ相當ニシテ且其引合村カ故障スルノ原由ハ已ニ前項ニ辨明ノ如クナレハ素ヨリ上告村ニ於テ引合村カ第三號契約書ニ對抗スヘキ條理ナキモノトス

第二條

上告要領第二條ニ原裁判所判文第三條ニ以前ノ形跡ニアラサルハ何レノ口供モ符合スレハ其以前ニ溯リ之ヲ審定スルニ由ナキノミナラス云々トアルヲ指摘シ其形跡即チ固有ノ掛樋今ニ存在云々埋樋掛樋ノ古來裝置シアリタルヲ明了ナルニ一應ノ實檢モナク云々申立ルトイヘル原裁判所ハ審ニ該掛樋ノ有無ノミヲ以テ本訴案件ノ材料トナシタルニアラサルハ其項文ニ第一條第二條ニ判スル理由ニ付辨明ヲ要セサル云々トアルコト知ルヘキナリ又此掛樋ノ存廢ニヨリ上告村カ引水ノヲニ付別段影響ヲ生セサルヲハ前第一條

辨明ノ如クナルヲ以テ原裁判所カ掛樋ノ辨明ヲ要セサリシトテ破毀スヘキノ限リコアラストス

判決

前條々ノ筋合ナルヲ以テ大坂上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナキモノトス

第三百三十三號

○地所讓受契約履行一件裁判申渡 明治十二年二月十日 上告

東京根津神社氏子拾六

ケ町總代兼本郷區駒込

東片町十四番地平民

佐藤 幸助

同惣代同區駒込淺嘉町

十九番地平民後藤彌太  
郎代人下谷區下谷南稻  
荷町十番地寄留神奈川  
縣平民

武田 彌太郎

該上告ハ其訴訟ノ本人タル根津神社氏子十六ヶ町ノ委任狀ヲ呈出  
スル能ハス又同氏子共ノ與書モ無之明治九年司法省甲第四號布達  
中總テ代人并代言人ヲ出ス場合ニハ委任狀ヲ渡シ又ハ訴狀ニ與書  
可致儀ト心得可シトアルニ違フモノナルヲ以テ上告狀下ケ戻候事  
第三百三十四號

○地券狀書換一件大坂上等裁判所裁判不當上告 明治十一年十月  
三日上告明治十  
二年七月  
八日申渡

原告 和歌山縣下紀伊國那賀

郡切畑村平民藤戶利兵

衛代人

東京府下京橋區日吉町

廿一番地士族

野 澤 鷄 一

被告 和歌山縣下紀伊國那賀

郡切畑村平民

覆本 嘉太郎

大坂上等裁判所ノ判文

原告(覆本於テ被告藤戶)ヨリ証書面五ヶ年季ニテハ如何ニモ不都合  
ニ存スレドモ今更違約致シ難クニ付証書面ハ明治七年十二月限リ田

畑書入ニ相認メ其代リ五ヶ年内元利金ヲ以テ賣戻スヘキ約定書ヲ可相渡旨戸長立會ノ上中聞ルニ付亡父作兵衛承諾ノ上乃チ第三號証書相渡シタリ然レモ被告ヨリハ作兵衛生存中ハ勿論死後ニ至テモ返リ證不相渡其證ハ岩手警察署へ山田源左衛門外數名ヨリ差出タル手續書ニテ判然タル旨申立ルト雖モ第三號証ハ亡父作兵衛カ被告ト契約シタル適正ナル田畑書入證書タルヲ明瞭ナレハ第四號乃至第七號等ヲ以テ援證シタル五ヶ年季買戻ノ契約云々ハ何レモ口頭ノ陳述ノミニシテ第三號証書外ノ事柄ナレハ其契約ヲ結ヒタリトノ証據トナスヲ得ス被告(藤戸)於テ第一號証ノ田畑ハ元來入札拂ニシテ賣買ノ契約ナレモ原告カ頼談ニ依リ七年十二月迄ニ賣戻スヘキノ約束ヲナシ假リニ第一號書入證書ヲ請取り置タルハ始審以來原被告口供符合スルノミナラズ原告証據物村帳簿ニ入札拂ナリ

タル旨登記シアルヲ以テ假令証書ハ書入ナルモ被告カ買受タルヲ明白ナル旨申立ルト雖モ原被告兩造カ爭論ノ要旨ハ年期賣戻ニ在ルモ五ヶ年ト一ヶ年ノ齟齬ヲ生スルノミナラス双方ノ口述ノミニシテ其事柄全ク第一號証書外ナレハ縱令一旦賣買ノ示談ヲナセシモモセヨ又ハ村方ノ帳簿ニ入札拂ト登記アルニセヨ原被告双方存意ノ一致ヲ表シタル適正ナル契約ヲ証スルモノハ第一號証書ニ外ナラサルナリ又原告ヨリ小作米ヲ計入レ被告ニ於テ貢租村費等ヲ収納シ來レルヲ以テ既ニ地主小作ノ位置確定セル旨申立ルト雖モ既ニ辨明セシカ如ク双方ノ契約ハ第一號書入証ニシテ賣買ノ証書ニアラサレハ其所有權ヲ移轉シタルモノニ無之且地券等ニ於ケルモ亦原告(榎本)カ氏名ナレハ被告(藤戸)カ所有地ト云フヲ得ス故ニ假令被告ヨリ貢租等ヲ収納スルモ原告ニ代テ立替ヲナシタルマテニシテ

原告ヨリ請取タル米額モ亦小作米ト云フ得サルナリ然ルヲ以テ第一號証書中返濟期限ヲ經過スルハ地券書換ヘキノ文言アルヲ以テ所有權ヲ移スヘキ効力ヲ生セサルナリ何トナレハ本訴ハ賣買性質ヲ具有セサルヲ以テ直チニ所有權ヲ移スチ得ス唯タ原告カ返金セサルハ糶賣所分チ受クルニ止マルモノトス

右ノ理由ナルヲ以テ被告ヨリ原告ヘ對シ地券書換ノ請求ヲ爲スヘキ權理無之因テ本訴証書面ノ金額ハ原告ヨリ被告ヘ返還スヘク被告ハ之ヲ請取ヘキ者也  
明治十一年七月十七日

大審院ニ於テ

原告 藤戸利兵衛代人野澤鷄一上告ノ要領  
明治十一年十月三日

第一條

凡ソ契約ハ別段ノ法律ヲ以テ其造爲チ禁制スルカ若クハ其後果チ

限定セサル限りハ各人民ニ於テ自在ニ之レヲ造爲シ十分ニ効用アラシムルヲ得ヘキナリ故ニ斯クノ如キ契約ニ付テハ單ニ書類ノミニ憑ルヘカラス專ラ契約セシ双方ノ供述ニ據リ傍ラ事物ノ情況ニ參照セサル可カラサルナリ本訴ニ於テ書入質ノ契約ハ只外形上ノ儀式ナルノミニシテ双方真箇ノ同意ハ糶賣ノ法ニ依レル賣買ナリトハ契約ノ造爲者タル原告ト被告トカ其供述ニ於テ終始相符合シテ乖戾セサル所ナリ而シテ斯クノ如キ外形ノ儀式アリテ斯クノ如キ真箇ノ同意ヲ爲スハ國法之レヲ禁セス又其後果チ限定セサルナリ故ニ該契約タルヤ契約者ノ意思ノ十分ナル効ナカルヘカラサルナリ而シテ其真箇ノ同意ヲ証スルモノハ第一ニ被告控訴ノ要旨買戻シニ在リテ控訴狀及答書ニ其明文アルヲ第二ニ戸長役場ノ帳簿ノ原告名前ニ改リシヲ第三ニ一旦縣廳ヨリ原告ノ名前ニテ地券



狀ヲ下附セラレシテ第四ニ原告カ貢租村費ヲ納メシテ第五ニ原告  
 カ被告ヨリ領収スル米數ノ一定シテ不易ナルコト此ノ第一乃至第五  
 ノ事跡アリテ其他實況ノ以テ徵スヘキモノ僅々ニアラサルナリ故ニ  
 是等ノ事跡ニ參照スレハ本訴ハ賣買ニシテ書入レニ在ラサルコト又  
 疑テ容レサルナリ然ルヲ大坂上等裁判所ニ於テハ原被兩造カ爭論  
 ノ要旨ハ年期賣戻シニ在ルモ云々トノ判文ヲ下タシ已ニ本訴ノ賣  
 戻シニ在ルコトヲ認メナカラ貢租小作米及ヒ其他ノ事跡アルニモ拘  
 ハラス原被双方存意ノ一致ヲ表シタル適正ナル契約ヲ証スルモノ  
 ハ第一號證書ニ外ナラサルナリ云々トノ判決ヲ下タサレシハ原被  
 双方カ口供ニモ據ラス又其意旨ヲモ視ス又其事跡ヲモ採ラサル裁  
 判ニシテ該上等裁判所カ契約ノ双方ヨリ契約スルノ權ヲ奪ヒ親ヲ  
 新規ノ契約ヲ作り之レヲ強ヒテ原被双方ニ與フルモノナリ此ノ

如クナルニ付該裁判ハ聽斷ノ定規ニ違フモノト思考ス

第二條

本訴ニ於テ控訴ノ要旨ハ買戻ノ期限一ケ年ナリヤ將タ五ケ年ナリ  
 ヤノ点ナリ而シテ被上告者ハ買戻ノ期限ヲ五ケ年ナリト陳述スレ  
 其端緒ノ以テ見ルヘキ證據ナシ然ルニ原告ノ陳述ノ如キハ第一  
 號証ニ一ケ年期ノ明文アリ又期限後役場帳簿ノ改正小作米ノ領収  
 田租ノ貢納地券ノ下附等許多ノ證據アリテ原被證據ノ強弱ハ判然  
 トシテ又論ヲ俟タザルナリ然ルヲ大坂上等裁判所ニ於テハ此ノ年  
 期ノコトハ本訴ニ付テノ要點ナルニモ拘ハラズ何等ノ判決ヲ降サレ  
 カルハ不法ノ裁判ト思考ス

又明治十二年六月十六日ノ陳述

本訴ノ目的トスル第一號書入質ノ證書ハ原被告ノ陳述ニ依リ實際

賣買ト變換スル上ハ即チ賣買ヲ以テ論スヘキナリ然リ而シテ該証書中十二月ニ返濟トアル一項ノミハ存シテ壹ケ年賣戻シノ期限ト相成ルナリ

但シ訴訟入費ハ成規ノ通請未致候事

被告 榎本嘉太郎代人保野誠之助答辨ノ要領

第一條

本訴書入質ハ去ル明治七年二月中被上告人榎本嘉太郎亡父作兵衛一家改革ノ爲メ所有ノ田地永田賣渡ト五ケ年期限ノ内元金ヲ以テ賣戻ス約トノ兩法ヲ以テ賣拂度段地方ノ慣例ニ據リ戸長井關助左衛門へ申出同人承諾村役場ヨリ村中へ此旨告達シ同日戸長始メ村中一統立會ノ上前貳箇ノ方法ニ據リ入札セシ處永代賣切ノ分ハ同村兵坂仲次郎外壹人ニ落札五ケ年期限本金返シノ分ハ第一號ノ通り上告人

ニ落札尙同斷一口ハ第二號ノ通り山田源左衛門へ落札ナレリスノ如ク五ケ年ノ分ハ右兩人ニ落札ノ折柄上告人ト山田源左衛門ノ間ニ如何ナル示談アリシカ源左衛門ニ落札ノ分ハ其儘上告人ニ讓リ渡シタルヲ以テ五ケ年期ノ分ハ悉皆上告人名前ニ証書認メ吳レ度旨兩人ヨリ村吏一統立會席へ申出テ聊奸計アリトハ心附カス兩人へ落札分合計三拾九圓五拾四錢八毛ハ上告人ト直取引ノ証書交換仕ル等戸長始メ村民列席ニテ取極メタリ爾後該地ヨリ生スル所得米四石貳斗ヲ作人ヨリ渡シタルヲ上告人於テ受取リシ覺ヘナキ旨主張スルニ依リ岩手警察署へ吟味願出引合人及ヒ該地入札之際立會戸長始メ村中一同被召出追々吟味ノ末全ク四石貳斗ハ上告者カ受取タル旨判然シ口供摺印スルニ付右口供ノ寫ヲ提供シ勸解廳へ上申スルニ上告人ニハ俄ニ言ヲ翻ヘシ右四石貳斗ハ年々小作米ニ

受取タル杯主張シ終ニ勸解不調因テ明治十一年一月十日始審廳へ  
出訴同年三月六日裁判受ケタレモ服シ難ク同年六月六日大阪上等  
裁判所へ控訴シ同年七月十七日終審ノ裁判ヲ受ケ直者トナリ漸ク  
所有權ヲ回復シタリ

第二條

前條ノ如ク五ヶ年期ノ分二口共上告人へ直取引示談整ヒ被上告人  
實父亡作兵衛ハ一点字モ辨ヘサルヲ以テ其節戸長井關助左衛門へ  
依頼シ悉皆証書相認メ貫ヒ既ニ永代賣切ノ分ハ兵坂仲次郎外一人  
分ハ取引相濟ミタリシニ獨リ上告者ハ手元金繰ノ都合アル趣申聞  
時日遷延シ后申聞ケルハ既ニ當今地租改正着手ノ際前約五ヶ年期  
ハ如何ニモ不都合ニ相考ヘ乍去今更前約ヲ違ヘル義ニハ無之ト雖  
地租改正ノ際ナレハ証書ハ同年十二月限り書入抵當ノ証書ニ認メ

貫ヒ度右返リ証トシテ五ヶ年内元利ヲ以テ賣戻ス約定証ヲ可相渡  
ト戸長立會ニテ申聞タル故亡父ニ於テモ後日ノ姦計トハ更ニ心得  
ス其言葉ヲ信シ戸長へ頼ミ証書ヲ渡シタルハ第三號書入証書ナリ  
然シテ上告人ハ金調ノ都合アリ逆三圓或ハ四圓ト漸々ニ過半ハ受  
取ルモ前約ノ返リ証文ハ更ニ渡サス依之戸長井關助左衛門及ヒ山  
田源左衛門等ヲ以テ返リ証相渡ス歟否ヲサレハ破談スルノ掛合ニ  
及テ所上告者ハ兎角曖昧ニ申遁レ其内明治九年ニ至リ作兵衛死亡  
セシテ僥倖トシ井關助左衛門山田源左衛門等ト馴合前約ハ遂ケ果  
サス剩ヘ僅カ三分ノ一ニ滿タサル代價ヲ以テ地所ノ金額ヲ奪ハン  
ト謀ルヲ以テ難默止前顯岩手警察署へ吟味願出タル所立會人一統  
糾問セラレ至ク五ヶ年期ノ約定ニ相違ナキ義ハ第四號乃至第七號  
ノ上申書ニテ判然セリ

第三條

前顯ノ如ク岩手警察署ニ於テ事實明瞭セシヲモ不願尙明治十一年一月始審廳へ起訴シ審問中第八號ノ如ク村中惣代連署ヲ以テ歎願致シ吳レシニ採用無之直ニ却下セラレ上告人請求ノ如ク裁判セラレタリト雖終審ニ於テ被上告者ハ權利ヲ復スルモ尙上告者ハ戶長役場ノ名前カ上告者ノ名前ニ更リ上告者名前ノ地券狀下附ナリシト其他云々主張スレモ何等ノ証跡アリテ右様ノ妄言ヲ陳述セシカ戸長役場ノ名前更リタルハ曩ニ役場帳簿へ私ニ張紙貼附シ上告者名前ニ書改メタルヲ戶長心附ス其儘縣廳へ差出シタル後露顯シ漸ク戶長ノ失錯トシ縣廳へ斷リ書ヲ呈シ改正シタルハ番外証據物ニテ明瞭タリ是皆上告人ノ姦計ニ出ルモ忽チ顯ハレタルモノナリ就中右ハ未ダ下附セラレサル以前ノ事ナレハ素ヨリ上告人ノ名義

ヲ以テ地券狀下附セラレタルトナク假令誤リテ一旦下附セラレタルモ右不正ノ所爲ヲ以テ下附セラレタル券狀ハ直ニ所有權ノ移リシモノト看認ノ難シ況ンヤ未ダ下附セラレサル地券ニシテ所有主被上告者ノ承諾セサル地券ニ於ケルチヤ且上告者ヨリ貢稅村費ヲ勤ムルト及ヒ上告者カ被上告者ヨリ領収スル米數ノ一定シ云々ト主張スレモ右ハ既ニ番外証據物ニテ明瞭ナレハ忽チ齟齬ノ陳述ナルハ明白ナルヘシ然リト雖上告人ニ於テ尙シ無證據ヲ幸ヒトシ該契約ヲ塗抹ナサントスレハ證書ハ則チ書入ナルヲ以テ元利返濟ヲ拒ムノ謂レナキハ當然ノ理ト思考ス依之大坂上等裁判所ノ裁判ハ事理ニ適當シタル裁判ナリ

但シ訴訟入費ハ成規ノ通請求仕度候事

上告ノ主点ハ左ノ條件ナリトス

第一條

書入質ノ契約ハ只外形上ノ儀式ナルノミ双方眞箇ノ同意ハ糶賣ノ法ニ依レル賣買ニシテ書入レニ在ラサルナリ然ルニ原被双方存意ノ一致ヲ表シタル適正ナル契約ヲ證スルモノハ第一號證書ニ外ナラサルナリトノ裁判ハ不法ナリトノコト〔第一條〕

第二條

買戻シ期限一ケ年ナリヤ將々五ケ年ナリヤ本訴ニ付テ要点ナルニ何等ノ判決モ降サ、リシハ不法ナリトノコト〔第二條〕

辨明

第一條

上告要領第一條ニ原裁判所ノ判文ニ原被兩造カ爭論ノ要旨ハ年期賣戻ニアルモ五ケ年ト一ケ年ノ齟齬ヲ生スルノミナラス双方ノ口

述ノミニシテ其事柄全ク第一號証外ナレハ縱令一旦賣買ノ商談ヲナセシニモセヨ又ハ村方ノ帳簿ニ入札拂ト登記アルニセヨ原被双方存意ノ一致ヲ表シタル適正ナル契約ヲ證スルモノハ第一號證書ニ外ナラサルナリトアルヲ指摘シ書入質ノ契約第一號書ハ只外形上ノ儀式ナルノミ双方眞箇ノ同意ハ糶賣ノ法ニ依レハ賣買ナリトハ契約ノ造爲者タル原告ト被告トカ其供述ニ於テ終始相符合シテ乖戾セサル所ナリ而シテ斯ノ如キ外形ノ儀式アリテ斯ノ如キ眞箇ノ同意ヲ爲スハ國法之ヲ禁セス云々申立タリ  
夫レ証書ハ双方カ合同一致ヲ以テ契約セシ事實ノ承認ヲ記スルモノニシテ若シ其証書カ双方申立ル事實ニ反スルトハ其証書ノ効力ナキハ論ヲ俟タスシテ明ラカナリ然レハ則チ本訴第一號証書ニ於ケル其造爲者タル原被告及ヒ當時之レニ關與セル戸長其他ノ者等

カ論地ハ賣買ニシテ書入質ニアラスト等シク申陳スル上ハ該第一號證書ハ事實ニ反セシ無効ノ證書ト爲サ、ルヘカラス然ルニ原裁判所ノ裁判爰ニ出テスシテ却テ事實ニ反セル該第一號證書ヲ以テ本訴裁判ノ依據トセシハ事實ニ反セシ不法ノ裁判ナリトス

第二條

上告要領第二條ニ控訴ノ要旨ハ云々トイヘル事項ニ對シ原裁判所ニ於テ何等ノ判決ヲ與ヘサリシ所以ノモノハ前條ノ如ク第一號證書ヲ以テ裁判ノ依據ト爲セシニヨレルモノナリトス

判決

前條々ノ筋合ナルヲ以テ大坂上等裁判所ノ裁判ヲ破毀シ更ニ本院ニ於テ裁判スル丁左ノ如シ

本訴ノ要点ハ明治七年二月中論地ヲ五ケ年間本金買戻シ入札拂ノ

廣告ヲ得テ落札已後第一號證書授受ノ前原告被告ニ於テ更ニ賣戻ノ年期ヲ改約セシコアリシヤ否ヲ審理スルニアリ依テ被告榎本嘉太郎カ提供ノ第四號乃至第八號書ヲ閱スルニ論地賣拂ノ際之ニ關與セシ戸長井關助左衛門并ニ副戸長林周郎及ヒ當時投票落札人ヲリシ三浦武左衛門兵坂仲次郎山田源左衛門其他投票ニ際會セシ數人カ論地ノ賣拂ハ五ケ年間本金返シニテアリシトノ証明書ニシテ原告利兵衛ノ所謂一ケ年期賣戻ノ証左之レナキノミナラス其第七號証ニ論地取引ノ際一ケ年限ニ認メタルハ藤戸利兵衛ヨリ別ニ五ケ年内本金賣戻ノ返リ一札ヲ出スヘシト申スニヨリ任其意(被告亡衛無筆ニ付當時代筆セ)認メ遣シタルニ利兵衛ハ之ヲ違變シ其返リシ戸長井關助左衛門カ)認メ遣シタルニ利兵衛ハ之ヲ違變シ其返リ證書ヲ遣ハサ、リシ云々ト証明書アリ而シテ原告利兵衛ハ第一號証ヲ指テ他ニ一ケ年期ヲ定メタリトノ證憑ナキニヨリ一ケ年期賣

戻シノ契約ナリト云テ得ス  
右ノ理由ナルヲ以テ原告利兵衛ハ被告嘉太郎ヨリ地代金三拾九圓  
五拾四錢八毛ヲ受取ニ止リ地券書換ノ請求ヲ爲スヲ得サルモノ  
ナリ

但シ訴訟入費ノ儀ハ破毀裁判ニ係ル分ハ被上告人ヨリ上告人ニ  
破毀後ノ裁判ニ就テハ原告人ヨリ被告人ニ成規ノ通り償却スヘ  
シ

第三百三十五號

○山地爭論難澁一件大坂上等裁判所ノ裁判不法上告ノ上文明  
十二年三月十二日上告明  
治十二年七月十日申渡

原告 石川縣越前國南條郡金

粕村

同縣同國同郡同村平民

右總代 岩崎次郎左衛門

同縣同國同郡同村平民

同 岩崎庄助

東京府日本橋區品川町

裏河岸九番地平民

同 高梨哲四郎

被告 石川縣越前國南條郡

上野村

大坂上等裁判所ノ判文

原告於テ圖面爭フ所ノ地ハ原告村ノ共有山ナリト申立第一號ヨリ  
第二十五號迄及ビ乙第一號ヨリ乙第十六號迄ノ證據物ヲ提供シ被

告於テハ原告村ノ共有山ハ圖面杓子ヶ谷外五ッ谷ニシテ其他ハ被  
 告村ノ共有山ナリト陳述シ第一號乃至廿二號證ヲ提供スルニ付逐  
 一之レカ審問ヲ遂ル所被告第一號證憑ハ寶歷五年原告村持山杓子  
 ケ谷外五ッ谷ノ山裾ニ有之被告村田畑ニ付爭論ヲ生シ其際原被告  
 村ニ於テ取換ハセシ證書ナレハ該田畑ニ關係ナキ論地ノ字ヲ書載  
 ス可キ筈ナケレハ該書中杓子ヶ谷外五ッ谷ノミヲ記載セシニ因リ  
 原告村ノ共有山ハ此六谷ニ止ルモノト看認難シ而シテ被告第二號証  
 ハ明治九年中地券重複改正ヲ願出タル書面ナレハ是又本訴ノ証據  
 ト爲ヌヲ得ヌ又其第三號証ハ文政年度ニ當リ該論山ニ到ルノ道路  
 ニ付原被告村ノ間ニ故障ヲ生シ原告村ヨリ被告村ニ對セシ書面ニ  
 ノ該証ノ主意タル被告第四號証與山ノ通路ヲ原告村ヨリ修繕スル  
 ニ付之ヲ除地道ナリト唱フルヨリ遂ニ爭論ヲ起シ結局該道普請ハ

原告於テ被告村ノ立會ヲ受ケ之レカ修繕ヲ爲ヌ可キモノト確定シ  
 後來ノ紛擾ヲ豫防セシモノナリト雖モ繪圖面原告村ヨリ字五反田  
 ニ至ルノ道路ハ現ニ原告村ニテ之レカ修繕ヲ爲シ來リシハ原被告  
 ノ口供ニ明瞭ナルニ被告第四號証ニハ該道筋ノ字ヲ記載セサリシ  
 ナリテ觀レハ右四號証書タル其爭ヒノアリシ个所ノミヲ記明セシ  
 モノト看認メサルヲ得ヌ其他被告數個ノ証據書類ニ於ケル孰レモ  
 論地ヲシテ被告村ノ共有地ナリト看認ム可キモノニ非レハ逐一之  
 レカ説明ヲ下サス而シテ又原告第一號二號証ハ明治五年縣廳ヨリ  
 下附セシ論山ノ地券証ニシテ此ノ地券ノ重複ヨリ該訴ノ爭ヲ生セ  
 シモノナレハ之レヲ以テ該地ハ原告ノ共有山ナリト看認ム可キ証  
 憑ト爲ヌヲ得ヌ又原告第二十號証文中〔上野村與山四十餘谷ニ金粕  
 ヲリ立入不申云々〕明記アルヲ以テ論所ハ原告村ノ共有山ナリト陳



述スレモ該証書ノ印影ハ當時原被告村庄屋ノ實印アルモ元來証書  
 ノ記載方タル共記名ハ必ス証書年月日ノ下ニ書載シ其宛名ヲ上部  
 ニ記スヘキハ普通ノ文体ナルニ該証書ハ之レニ反シ其差入ルヘキ  
 人名ナキニ宛名ヲ書ス可キ位置ニ原被告村ノ庄屋ニ於テ其姓名ヲ  
 列記押印シ又紙幅ニ餘白アルニ故ヲニ其繼目ニ名前ヲ記シタル等  
 普通文格ニ背キシ証ナルヲ以テ信用シ難キモノトス然リト雖モ原  
 告第三號寶曆度ノ村方明細帳ハ舊藩ヨリ敦賀縣ヘ引繼ナリシ帳簿  
 ト同一ナルコトハ該縣廳ノ付箋ニ依テ明瞭ナレハ右帳簿中村中入會  
 山一ヶ所此山手米貳石貳斗壹升壹合五勺是ハ金粕村奥ニ飛山ニテ  
 御坐候云々記載アルヲ以テ原告村字奥山ノ山手米タルコトハ該帳簿  
 ニ依テ明瞭ナリ又被告村共有山ノ稅額ハ貳石六斗七升七合四勺ニ  
 ノ該論山及ヒ右ニ接續スル共有山ノ外他ニ被告村ノ惣持山ハ無之

旨被告ニ於テ陳述スルヲ以テ原被告村ノ共有山ノ稅額ヲ對照スル  
 ニ僅カニ四斗六升五合九勺ノ差異アルノミ依テ原被告ノ繪圖面ヲ  
 檢閲シ又被告ノ口述ニ依ルモ其山廣大ニシテ町數ヲモ概測シ難キ  
 場所ナルニ原告村ノ共有山ハ被告カ申述セル如ク果シテ六谷ニ止  
 ルモノトセハ原告ノ共有山ハ僅々被告持山ノ十分一ニ過キサルハ  
 原被告ノ繪圖面ニ判然タリ而シテ該山ノ舊領主ハ原被告共同ニ  
 シテ其地モ亦相接續セシ同一體ノ山地ナレハ之レカ山稅ヲ附スル  
 モ其地ノ廣狹ニ依ラサルヲ得ス然レハ被告村ノ山手米貳石六斗七  
 升四合ハ該爭フ地ノ南方ニ接シタル被告村持山ノ稅米ニシテ原告  
 村貳石貳斗壹升壹合五勺ノ山手米ハ論所ト六谷トヲ併セタル地ノ  
 山稅ナリト看認メサルヲ得ス加之被告第四號証ノ末段ニ右ハ當村  
 奥山ハ通行仕候金粕村地内ノ通筋云々トアルヲ以テ觀レハ右奥山

トハ論所ヲ指シ通行仕候地内ノ道筋云々トアル其道筋ナル者ハ前  
 段ニ於テ列記シタル谷々ヲ云々シモノナレハ即チ該論山へ通行ス  
 ル道路ノ入口ヲ示シタルモノト看認メサルヲ得ス何トナレハ被告  
 申述ノ如ク原告村ノ奥山ハ果シテ六谷ノミニ止ルモノトセハ該證  
 明文ニハ姥ヶ谷外谷々へ通行仕候ト記載アル可キ筈ナルニ殊ニ初  
 段ニ於テ谷々ノ字ヲ掲ケ末段右奥山へ通行仕候云々ト記載アルニ  
 據レハ其入口ヲ掲ケタルコトヲ知ル可キヲ以テナリ是ニ因テ之ヲ觀  
 レハ本訴争フ所ノ山地タル原告村ノ共有山ナリト認定セサルヲ得  
 ス

右ノ理由ナルヲ以テ被告申分ハ相立サルモノ也

但訴訟入費ハ規則ノ通被告ヨリ償却ス可キ事 明治十一年  
 十二月二十八日

大審院ニ於テ

原告 金粕村總代岩崎庄助外一人代人高梨哲四郎上告ノ要  
 領 明治十二年  
 三月十日

第一條

抑訴訟人等カ差出ス証據書類ハ之レヲ採輯スヘクシテ之レヲ截斷  
 シテ論スヘカラス何トナレハ最良ナル證據ハ衆證ヲ採輯シ之ヲ連  
 結スルニ非ルヨリハ得ルニ難キモノナルヲ以テナリ然ルチ大坂上  
 等裁判所ニ於テ被告(原告)第一號證憑ハ該證中杓子ヶ谷外五谷ノミ  
 ナ記載セシニ因リ原告村之共有山ハ此六谷ニ止マルモノト看認難  
 シト又其第三號証ハ文政年度ニ當リ云々該道筋ノ字ヲ記載セサリ  
 シヲ以テ觀レハ右四號証書タル其争ノアリシケ所ノミチ記明セシ  
 モノト看認メサルヲ得ス其他被告(原告)數ヶノ証據書類ニ於ケル就  
 レモ論地ヲシテ被告村ノ共有地ナリト看認ムヘキモノニ非サレハ

逐一之レカ説明ヲ下サスト判定セラレタリ夫レ斯ノ如ク數ヶノ証  
據ノ連結シタルチ一々截斷シ判定ヲ下サレタルハ法ニ違フ裁判ナ  
リト思考ス

第二條

本訴論山チ原告金粕村一村共有山ナリトノ証憑ハ第一原告〔扣訴〕  
第一號爲取替證書中ニ杣山持分之ヲ云ク谷ウハカ谷ワウシガ谷  
高津谷源田谷次郎五郎林ト明記アリ之レニ由テ之ヲ觀レハ此六谷  
ノ外被告カ持山ナキヤ明カナリ若シ論所チシテ被告上野村ノ共有  
山ナリトセハ該證書中ニ杣山持分ノ内ト記載スヘキ筈ナリ然ルチ  
杣山持分トノミ記載シアルハ他ニ持山ノアラサルヲ證スヘキ己ニ  
文久年度ノ爲取換一札ニハ此六谷ノ内杣子ヶ谷一ヶ所ヲ除キ他ノ  
五谷ノミチ記載セシニヨリ上野村所持山ノ内云々ト記載シタリ夫

レ此ノ如ク杣子ヶ谷一ヶ所該一札中ニ書載セサルチ以テ上野村所  
持山ノ内ト記載シタル譯ナレハ延寶年中〔原告第一〕ノ爲取替證ニ内  
ノ字記載セサリシハ他ニ持山ノアラサリシヲ判然ナリトス是レ原  
告〔扣訴〕カ第一號ヲ以テ被告〔扣訴〕ノ持山ハ六谷ノ外アラサルナリト  
證明スル所以ナリ然ルチ大坂上等裁判所ニ於テ被告〔原告〕第一號證  
憑ハ寶曆五年原告〔原告〕村持山杣子ヶ谷外五谷ノ山裾ニ有之被告〔原告〕  
原〔原告〕村田畑ニ付爭チ生シ云々該書中杣子ヶ谷外五谷ノミチ記載セシニ  
因リ原告〔原告〕村ノ共有山ハ此六谷ニ止ルモノト看認メ難シト判決  
アリシハ不法ノ裁判ナリト思考ス

第三條

又同判文中ニ其第三號〔扣訴〕証ハ文政年度ニ當リ該論山ニ到ルノ道  
路ニ付原被告間ニ故障チ生シ原告〔原告〕村ヨリ被告〔原告〕村ヘ對セシ

書面ニシテ該証ノ主意タル被告(原告)第四號証奥山ノ通路ヲ原告(被告)村ヨリ修繕スルニ付云々ト判定セラタレモ原告(被告)第三號文政年度ニ被告(原告)上野村ヨリ原告(被告)へ相渡セシ一札書中ニ當村ヨリ(被告)上野村相通シ候奥山云々トアリテ又其末段ニ道筋字ノ義ハ別紙ニ相認メ云々トアリ其別紙タルモノハ即チ原告(被告)第四號ナリ其書中ニ一モ本訴論山ノ道筋等記載アルナシ況ヤ其末項ニ右ハ當村(上野村)奥山へ通行仕リ金粕村地内ノ道筋同村ヨリ立合ヲ受云々トアルニ依レハ論所ハ上野村共有山ニ非スシテ上野村カ昔時奥山ト唱ヘタリシハ玄やくし谷ト外五谷ナルヲ明確ナリトス加之被告(原告)カ大阪上等裁判所ニ於テ該第三四號証ハ論所へ到ルノ枝道筋ノ爭論ニ成立チタルモノナリト申供シ原告(被告)ニ於テハ該証書ハ玄やくし谷外五谷へ通行スルノ道路ニ關シタル契約ナリト陳述シ原

被告兩造ニ於テ一モ該論山へ到ルノ道路ニ付成立タルモノト申立タルヲナシ然ルヲ大阪上等裁判所カ其原被告ノ口供ニモ據ラス單ニ第三號証ハ論所ニ到ルノ道路ニ關スルノ契約ナリトシ前文ノ判決アリシハ不法ノ裁判ナリト思考ス

第四條

又同判文中原告(被告)第三號寶曆度ノ村方明細帳ハ舊藩ヨリ敦賀縣へ引續キナリシ帳簿ト同一ナルヲハ云々該帳簿ニ依テ明瞭ナリトアレモ該証ノ如キハ被告(原告)ノ手ニ成立シモノニシテ原告(被告)對スルノ証ニ立ヘキモノニアラス殊ニ其証書中被告(原告)カ甚内ヨリ買受ケタリト主唱スル字名千石谷等モ記載セサレハ本訴論所ニ適合スルヤ否他ニ據ルヘキノ証モアラサルニ之ヲ採用シ前文ノ如キ判決ヲ與ヘラレタルハ不法ノ裁判ナリト思考ス

第五條

又同判文中該山ノ舊領主ハ原被告共同一ニシテ其地モ亦相接觸セシ同一休ノ山地ナレハ之レカ山稅ヲ附スルモ其地ノ廣狹ニ依テサ  
 ルヲ得ス云々ト判決アレヒ昔時山稅ヲ賦課セラレタルノトニ當リ  
 舊領主ハ同一ナルヤ否ヤ認ムヘキノ証憑アラサルニ舊領主ハ同一  
 ナリト判定セラレ又山稅ヲ付スルモ其地ノ廣狹ニ依テサルヲ得ス  
 トアレヒ我邦往古ノ制度ニ於ケル其地ノ廣狹ニ依リ山稅ヲ課セラ  
 レタルニ非サルコトハ喋々之ヲ論セサルモ衆ノ能ク知ル所ナリ且被  
 告〔控訴原告〕上野村カ論所山手米ナリト稱スル石數ノ如キ年度ニアリテ  
 其差異ヲ生シ又其稱呼ノ如キモ鎌打山手ト云或ハ山手米ト云ヒ其  
 證據トシテ呈供スル所ノ證書ニ字小名等ノ明記ナケレハ之ヲシテ  
 論所ノ山手米ナリト信認スルヲ得ス加之論山ニ周圍壹尺乃至一丈

ニ至ル樹木數十方本生立シアルハ原告金粕村ノ共有ニシテ又用水  
 涵養山ナルノ證ナリ何レトナレハ原告金粕村ニ在テハ論所并ニ論  
 所ニ接近スル所ノ場所アリ流出スル川流之外其他ニ用水ヲ仰クケ  
 所ナケレハナリ此他原告第十一號十二號ヨリ第十六號ニ至ル數通  
 ノ證アリテ論所ハ原告金粕村ノ涵養山ニシテ又金粕村ノ共有山ナ  
 ルコト歴々トシテ明白ナリトス況ヤ被告〔控訴原告〕ノ持山ナル千石谷ノ  
 如キハ些カ數斗ノ山手米ヲ出スニ過キスト明言セシニ非スヤ然レ  
 テ大阪上等裁判所ニ於テハ一ノ證據ニモ由ラレス前文ノ如ク臆測  
 ノ裁判アリシハ不法ノ裁判ナリト思考ス

第六條

前條ニモ述ルカ如ク論所ニ生木スル樹木ノ如キ實ニ論所ハ金粕村  
 用水涵養山ニシテ金粕村ノ共有山ナル明證ナリ故ニ大阪上等裁判

所ニ於テ論所實地ノ形狀ヲ親覽セラレタラシニハ論所ヲ上野村之  
共有山ナリトスルカ如キ判決ナキハ斷シテ疑ヲ容レズ故ニ曾テ大  
阪上等裁判所へ實地取調ノ上判決セラレシトテ請願シ置タルコ之  
ニ對シ何等申渡シモナク卒然判決セラレタルハ是レ聽斷ノ成規ニ  
違フ不法ノ裁判ト思考ス

辨明

第一條

原告ハ證據書類ハ之ヲ採輯スヘクシテ之ヲ截斷スヘカラス然ルチ  
大阪上等裁判所ハ一々證據ヲ截斷シテ判決セシハ不法ナリト申立  
レト大阪上等裁判所ノ判文ニ被告<sup>原告</sup>第一號証ハ云々第二號証ハ  
云々第三號証第四號証ハ云々其他被告<sup>原告</sup>數個ノ證據書類ニ於ル  
孰モ論地ナシテ被告<sup>原告</sup>村ノ共有地ナリト看認ムヘキモノニ非レ

ハ逐一之カ説明ヲ下サストアリ是レ大阪上等裁判所カ原告ノ提供  
スル證據書類ヲ採輯スルコ一モ論山ヲ以テ原告村ノ共有地ナリト  
看認ムヘキモノナキヨリスノ如ク説明ヲ爲シタルモノコテ證據ヲ  
截斷シテ判決シタルモノニアラス

第二條

原告ハ第一號爲取替證書ニ柚山持分杓子ヶ谷云々トアルヲ以テ被  
告ノ持山ハ此ノ六谷ノ外アルコトナシト申立レ是レ曩ニ原告カ被  
告ノ扣訴ニ答ルノ要旨ニシテ大阪上等裁判所カ首ニ之カ説明ヲ爲  
ス所ノモノナリ如何トナレハ原告カ第一號證ニ柚山持分トシテ六  
谷ノ字ヲ明記シアル上ハ被告ノ持山ハ此ノ六谷ニ止ルト云ニ依リ大  
阪上等裁判所ハ該證書ノ成立ヲ推究シ寶曆五年被告村持山杓子ヶ  
谷外五谷ノ山麓ニアル原告村ノ田畑ニ付爭論ヲ生シ其際原被告村

ニ於テ取替ハセシ證書ナレハ該田畑ニ關係ナキ論所即チ奥山ノ字ヲ記載スヘキ筈ナケレハ該書中杵子谷外五谷ノミノ字ヲ記載シ他ノ論所ノ字ヲ記載ナキニ因テ被告村ノ共有山ハ此ノ六谷ニ止ルモノトハ看認メカダシト判定シタルモノナリ又原告ハ第五號証ヲ引援シ論所ヲ被告村ノ共有地ナリトセハ第一號証書ニ杵山持分ノ内ト記載スヘキ筈ナリト云モ他事ニ成立シ書面ニ内ノ字一字ノ加損ヲ以テ直ニ他ノ持山ノ有無ヲ判定スルノ具トナスニ足ラサルハ論ヲ俟タサルニ依リ大坂上等裁判所カ原告<sup>上</sup>被告<sup>村</sup>ノ共有山ハ六谷ニ止ルモノト看認メ難シト判決セシハ不法ノ裁判ニアラス

第三條

原告第三號証ハ杵子谷外五谷ニ通行スルノ道路ニ關シタル契約ナルニ大阪上等裁判所ハ原被告ノ口供ニモ據ラス論所ニ到ルノ道路

ニ關スル契約ナリトシテ判決アリシハ不法ナリト申立レ其上野村カ昔時奥山ト唱ヘタリシハ杵子谷ト外五谷ナリト云ハ原告一己ノ私言ニシテ大阪上等裁判所ハ第三號証第四號証ニ記載スル奥山ハ六谷ニ止ルモノニ非スト看認ルヨリ判文末項ニ於テ奥山トハ論所ヲ指シ通行仕候地内ノ道筋云々トアル其道筋ナルモノハ前段ニ列記シタル谷々チ云シモノナレハ即チ該論山ニ通行スル道路ノ入口ヲ示シタルモノト看認メサルヲ得スト判定シタルモノナリ其六谷カ論山即チ奥山ノ入口タルコトハ原告第二號証地券重複ニ付敦賀縣令ニ差出タル書面ニ奥山北谷續キ入口六谷ノ儀ハ同郡上野村持山ニテ云々トアルヲ以テ証スヘケレハ事實ヲ判定スル上等裁判所ニ於テ第三號証第四號証ニ記載スル奥山ヲ以テ論所ト認定シタル判決ヲ爲スモ其認定ヲ以テ不法ナリトスル反証ナキ上ハ之カ破毀ヲ

求メ得ヘキ限リニアラス

第四條

被告第三號寶曆度ノ明細帳ハ被告ノ手ニ成立シモノニテ原告ヘ對スル証ニアラスト申立レ凡本訴山地爭論ノ如キ必スシモ原被關涉ノ証據ヲ要スルモノニアラス惟原被各村ニ於テ其所有チ儘カムルニ足ルモノアレハ上等裁判所ハ據テ以テ之カ判決ヲ爲サ、ルヲ得ス即チ被告第三號證寶曆度ノ村方明細帳ノ如キ曾テ舊藩ヨリ敦賀縣廳ヘ引繼ナリシ帳簿ト同一ニシテ公正ノモノト看認メ得ラル、チ以テ大阪上等裁判所ハ之ヲ採テ判決シタルモノニテ不法ノ裁判ニアラス

第五條

原告ハ昔時山稅ヲ賦課セラレタルニ當リ舊領主ハ同一ナルヤ看認

ムヘキナク又山稅ヲ付スルニ其地ノ廣狹ニ依ルモノニ非ス云々申立レ凡明治十一年十一月廿九日大阪上等裁判所ニ於テ被告カ山稅ノ事ヲ論シタル口供ニ原被兩村共ニ舊藩中ハ同領内ニアリナカラ如斯彼我不公平ナル山稅ヲ課セラル、筈無之トアリ果シテ舊領主ハ同一ニアラストナレハ原告ハ反對ノ說ヲ立ツヘキニ都テ之カ答辨チ爲サ、ルノミナラス其原被告村ノ同領内タルコトハ即チ原告第三號証等ニ明記アレハ大阪上等裁判所ハ即チ舊領主ハ原被告共同一ニシテ其地モ亦相接續セシ同一ノ山地ナレハ之カ山稅ヲ付スルモ其地ノ廣狹ニ依ラサルヲ得ス云々ト判定シタルモノニテ素ヨリ山稅ヲ付スルニ土地ノ廣狹ニ依ルト云ノ制度ナシト雖モ事實ヲ判定スル上等裁判所ニ於テ如斯ク領主モ同一山地モ同一脈ナルニ特リ稅米ノミ斯ノ如キ相違アルヘカラストシテ被告村二石二斗一



升壹合五勺ノ山手米ハ論所ト六谷ト併セタル地ノ山税ナリト判  
定スルモ敢テ不適當ノコニアラス其他論山ニ樹木數拾万本生立シ  
原告金粕村ノ用水涵養山ナリト云モ要スルニ原告一己ノ私言ナレ  
ハ大坂上等裁判所カ之ヲ採ラサリシト云テ以テ不法ノ裁判ト爲ス  
ヲ得ス

但原告カ實地取調ノ請願ニ對シ大坂上等裁判所カ何等ノ言渡シ  
ナシト云ハ本訴ノ要点ニアラサルヲ以テ別ニ辨明ヲ與ヘス

判決

前條ノ次第ナルヲ以テ大坂上等裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキ理由ナキ  
モノトス

第三百三十六號

滯米請求一件ノ判文明治十一年七月廿二日申告

原告 東京府下淺草區淺草駒

形町十四番地平民濱村

利兵衛代人

東京府下京橋區築地二

丁目三十六番地村田キ

サ方寄留平民

三谷退藏

被告 東京府下武藏國北豐島

郡三ノ輪村十四番地平

民松永嘉右衛門代人同

八長男

松永甚太郎

滯米請求一件東京上等裁判所ノ裁判ヲ不法トシ上告スル要  
領左ノ如シ

第一條

東京上等裁判所判文第三條ニ村役場ノ帳簿ニ記載スル所并ニ戸長  
及ヒ純崎ノ申立ル所ニ依リ慶應二年ニ於テ純崎へ渡セシ地所ハ字  
辻元壹反六歩ノ地所ナルコトヲ知リ得ヘキモノナレハ東京裁判所へ  
申立シ所ハ則チ甲第一號証關涉ノ地所字辻元壹反六歩ノ地所ナリ  
トストアレヒ慶應二年中被告ノ長男甚太郎ニ於テ字辻元ノ地所ヲ  
質地トシテ純崎へ渡シタルトノ被告及ヒ純崎ヨリ申立ハ更ニ文書  
ノ証ス可キナク又戸長ノ申立ニ依レハ明治八年中該地所ヲ純崎ノ  
四男純直へ渡シタル者ニシテ慶應二年中之ヲ純崎へ渡シタルトハ  
未タ曾テ申立サル所ナリ隨テ村役場ノ檢地帳ノ如キモ明治八年マ

テ該地所字辻元壹反六歩ハ被告ノ長男甚太郎名前ノ存在スルコトヲ  
見レハ慶應二年中之ヲ純崎へ渡シタル者ニ非ラサルコト亦知ルヘキ  
ナリ然ルニ東京上等裁判所ハ村役場ノ帳簿ニ記載スル所戸長及ヒ  
純崎ノ申立ル所ニ依リ慶應二年ニ於テ純崎へ渡セシ地所ハ字辻元  
壹反六歩ノ地所ナルコトヲ知ルヲ得ヘキ云々ト判決セラレシハ不  
法ナリト思考ス

第二條

判文第三條ニ被告ノ長男甚太郎カ別戸トナリシハ慶應二年ニシテ  
而シテ甲第一號証ノ日付ハ安政五年十二月ナレハ字辻元壹反六  
歩ノ地所ヲ買得スルニ當リ甚太郎ノ名ヲ以テ之ヲ買得シ且質地ト  
シテ純崎へ渡スル該地所ハ甚太郎ノ所有タリシモ該地所ヲ買得ス  
ルニ當リ當時其戸主タル被告カ己レノ子ノ爲メニ之ヲ買得セシ者

ト見倣シ得ヘケレハ其地所ノ持主ノ被告ニ非ラスシテ其子甚太郎ナルモ字辻元壹反六歩ノ地所ヲ以テ甲第一號証關涉ノ地所ナリトスルニ障害アラサル者ナリトアレハ甲第一號証ヲ閱スルニ被告ノ保証人ハ則チ其子甚太郎ナレハ當時未タ被告ト別戸セサルト否トナ問ハス被告ノ保証人タルニ於テハ既ニ其父ノ權内ヲ脱シテ別ニ其特權ヲ占有セシチ知リ得ヘキ而已ナラス被告ノ申立ル所ニ依リ當時甚太郎名前地ノ貢税ハ甚太郎ノ名義ヲ以テ之レヲ上納セシ上ハ甚太郎ト被告トハ當時公然其財産ヲ分別セシ者ナリト認定セサルヲ得ス是故ニ果シテ判文ノ如ク字辻元壹反六歩ノ地所ヲ買得スルニ當リ甚太郎ノ名ヲ以テ之ヲ得買シ其地所ノ持主ハ當時戸主ト被告ニ非ラスシテ其子甚太郎ナレハ甲第一號証モ甚太郎ノ名義ヲ以テ其契約ヲナス可キ筈ナルニ今其儀ナクシテ被告ノ名義ヲ以テ

其契約ヲナシ甚太郎ヲシテ之カ保證人タラシメタリシニ於テハ字辻元一反六歩ノ地所ヲ舉テ被告ノ名義ヲ以テ契約セシ甲第一號証關涉ノ地所ナリトナス可ラス焉ソノ障害アラサルモノト謂フチ得ヘケンヤ況ヤ甲第一號証ハ年々米四俵即チ壹石六斗ツ、贈ル可キ契約ナルニ字辻元ノ地所ハ被告ノ申立ニ依レハ一反六歩ニシテ其德米九斗余ナルニ付其九斗余ナル德米ノ生スル地所ヲ買得シテ一石六斗ノ德米ヲ贈ル可キ契約ヲナス可キ條理ナキヤ抑乙第一號証書中ニ新キノ文字ヲ見ルハ猶ホ元治元年ノ部ニ始リトアル文字ト意義ヲ同フシ前年ト後年トノ贈米ヲ分界セシマテナレハ右新キノ文字ヲ以テ慶應三年以後右贈米ノ約ヲ消滅シタルノ証トナス可ラサルナリ然ルニ東京上等裁判所ハ字辻元壹反六歩ノ地所ヲ以テ甲第一號証關涉ノ地所ナリトスルニ障害アラサルモノナリト裁

決セラレシハ不法ナリト思量ス

第三條

判文第四條ニ原告カ東京裁判所ニ對シ右被告ニ於テ買得シタル田地ハ慶應二年他へ賣却セシ儀ハ相違無之云々ト申立シカ如キ原告本人ニ於テ親ラ其口書ニ調印シタルハ他ニ錯誤ノ証アラサル限りハ之ヲ誤テ無實ノ口書ニ調印セシモノニシテ全ク無効ノ証言ト認ムルヲ得ス」トアレントモ原告ニ於テ東京裁判所ニ對シ右被告ニ於テ買得シタル田地ハ慶應二年他へ賣却セシハ相違無之旨誤テ無實ノ口書ニ調印セシハ全ク原告ノ錯誤ニ出タルモノナリ現ニ控訴狀ニ〔慶應二年中田地賣買不相成ハ兼テ舊幕府ノ嚴制ニ候ハ、當時該田地賣買可致條理無之然ルニ被告ニ於テ清水喜太郎ニ賣渡旨申立原告ニ於テモ誤テ無實ノ口書ニ調印仕リ候ヨリ遂ニ犯制ノ裁判ニモ

相成候哉ニ奉存云々」及ヒ明治十一年四月九日ノ口供ニ〔慶應年度ニ於テ被告ト清水純崎トノ間ニ實際賣切ニ付期限ニ至ルモ受戻サル旨ヲ契約致シ候トモ地所質入ノ規則ニ照準不致候故右慶應年度ノ契約ハ無効ニ屬シ明治八年三月ニ至リ新ニ賣買致シ候モノニ相成候モノ故此時原告ノ承諾ヲ經サル限りハ被告ニ於テハ原告ノ請求ヲ拒ムヘキ理由ハ無之云々甚太郎并セツノ持地ハ本訴ニ關係ハ無之候得トモ假リニ被告ノ申立ニ依ルモ猶被告ニ於テ原告ノ請求ヲ拒ムヘキ理由無之等ノ供述ハ必ラスシモ錯誤ノ証ナリトスト明言セサリシモ事實錯誤ヲ証スルノ供述ニ外ナラサレハ決シテ他ニ錯誤ノ証ナシト謂フ可ラス然ルニ東京上等裁判所ハ此等ノ陳述ヲ採ラス他ニ錯誤ノ証アラサル限りハ之ヲ誤テ無實ノ証言ト認ムルヲ得スト判決セラレシハ不法ナリト思惟ス

第四條

判文第四條ニ被告及ヒ純崎ノ申立ル所ニ依ルニ該地所ハ明治二年三月云々トアレドモ被告及ヒ純崎ノ申立ル所ハ慶應二年三月トアリテ明治二年三月ナリト云ヒシコトヲ聞カサルナリ故ニ明治二年三月云々ハ被告ノ供述ニ反シタル判文ニシテ聽斷ノ定規ニ違フモノナリト思考ス

第五條

判文第四條ニ被告及ヒ純崎ノ申立ル所ニ依ルニ該地所ハ當初ノ質地金高ノ外更ニ拾圓ノ金額ヲ増加シ其年期ニ至ルモ再ヒ受戻サル旨ヲ約シタルト云ヒ而シテ原告ニ於テ之ヲ否ラストスルノ証ヲ有セス云々トアレドモ果シテ慶應元年三月以來ノ質地ナリトセハ其年期中明治六年第十八號布告地所質入書入規則ヲ履行ス可キ筈ナ

ルニ今其規則ヲ履行シテ之カ証書ヲ書改メシコトナシ又慶應二年三月當初ノ質入金高ノ外更ニ拾圓ノ金額ヲ増加シ其年期ニ至ルモ受戻サル旨ヲ約シタルハ其實賣買ナルモ地所賣買規則ヲ履行セサルカ故ニ質入ト云ヒ賣買ト云フ同ク其効ヲ有セサルモノナリ況ンヤ該地所ハ地券發行ニ際シ甚太郎ノ名義ヲ以テ其地券ヲ受ケ明治八年三月ニ至リ純崎四男純直へ賣渡シタルニ付始テ其地券ヲ書換タルヲ見レハ是レ其以前該地所ヲ純崎へ渡サ、リシヲ徵スルニ足ル然ルニ東京上等裁判所ハ原告ニ於テ之ヲ否ラストスルノ証ヲ有セスト裁判セラレタルハ不法ナリト思量ス

第六條

判文第五條ニ原告カ東京裁判所へ申立テシ口供ノ趣旨ニ依レハ原告ハ甲第一號証關涉ノ地所ヲ慶應二年中被告カ之ヲ純崎へ渡セシ

一、予ヲ認可セシ者ナリ云々及ヒ同條判文ノ末項ニ本裁判書第二條ニ  
 指示セシ所ノ滯米則チ作徳米ヲ原告ニ渡スヘキノ理由ハ甲第一號  
 証關涉ノ地所則チ字辻元壹反六歩ノ地所アルニ依レリ然ルニ原告  
 三、於テ被告カ之ヲ他人ニ渡スコトヲ認可セシハ則チ該地所ヨリ生  
 スル所得則チ原告ノ得ヘキ利益ヲ拋棄スルコトヲ默許セシモノト認  
 ムヘキモノナリトアレバ原告ニ於テハ甲第一號証關涉ノ地所ヲ慶  
 應二年中被告カ之ヲ純崎へ渡セシコトヲ認可セス假リニ被告ノ申立  
 ニ依ルモ被告ノ長男甚太郎ノ名前ナル字辻元ノ地所ヲ其所有主ト  
 ル同人ヨリ之ヲ純崎へ渡セシ者ニシテ被告ヨリ之ヲ純崎へ渡セシ  
 トハ被告ニ於テモ未タ曾テ申立サレハ原告ニ於テ之ヲ認可スヘキ  
 理由ナシトス將又慶應二年中即チ慶應二年三月ニ在テ果シ該地所  
 ヲ純崎へ渡シ當時其所有權ヲ同人ニ移シタルトナセハ慶應二年ニ

一、右贈米ノ生スル地所ヲ有セサルヲ以テ其年ノ贈米無之筈ナルニ  
 明治十一年四月九日終審被告代人甚太郎ノ口供ニ依ルモ慶應二寅  
 年三月中手放シ候ニ付其砌甲第一號証ノ金額ハ原告方へ返濟致候  
 ニ付其年限リニテ卯年已來ハ約定米四俵ハ差遣ハシ不申トアリ又  
 被告終審答書ニモ慶應三卯年ヨリ贈米ハセサリシナリ因テ第一號  
 領収証ニ新キ拾四俵ト記載セルヲ以テ明瞭ナリトアルニ照ラセハ  
 乙第一號証書中新キ拾四俵トアルハ乃チ慶應三年ノ分ニシテ慶應  
 二年分ハ原告ニ於テ之ヲ領収セシ筋合ナルカラハ慶應二寅年ノ秋  
 穫ニ際シ被告ハ猶ホ該地ヲ所有セシモノト認メサルヲ得ス然ルニ  
 東京上等裁判所ハ甲第一號証關涉ノ地所ヲ慶應二年中被告カ之ヲ  
 純崎へ渡セシコトヲ認可セシ者ナリ云々及ヒ被告カ之ヲ他人ニ渡  
 スコトヲ認可セシハ則チ該地所ヨリ生スル所得即チ原告ノ得ヘキ

利益ヲ拋棄スルヲ默許セシモノト認ムヘキナリト判決セラレシ  
ハ不法ナリト思惟ス

第七條

甲第一號證ハ其契約セシ德米ノ生スル地所ノ字反別ヲ記載セズ故  
ニ原告ニ於テハ現今被告ノ所有スル三河島村ノ地所ヲ以テ甲第一  
號證關涉ノ地所ナリト認ムヘキ旨ヲ申立タリ而シテ三河島村字池  
田貳反壹畝ハ被告ノ世ニ買得シ且ツ現今之ヲ所持セシ旨ヲ被告ニ  
於テ申立テシ上ハ其字池田貳反壹畝ノ地所ヲ以テ甲第一號證關涉  
ノ地所ナリト認メサルヲ得ス然ルニ東京上等裁判所ニ於テハ此等  
ノ理由ヲ審究セラレサルハ要スルニ不尽ノ裁判ニシテ聽斷ノ定規  
ニ違フモノト思考ス

第八條

明治六年司法省第四十三號布達ヲ案スルニ本訴ノ滯米ハ利子ヲ生  
ス可キ條理アルニ付右布達ニ依リ明治十一年四月十一日上申書ノ  
末項及ヒ明治十一年四月二十二日上申書ノ如ク法律上ノ利子  
請求ニ及ヒタリシニ東京上等裁判所ニ於テハ其當否ノ裁判ヲ與ヘ  
ラレサルハ聽斷ノ定規ニ違フモノト思惟ス

第九條

判文中ニ或ハ賣買ト云ヒ或ハ賣得ト云ヒ或ハ買得ト云ヒ或ハ賣却  
ト云フ其數凡二十ヶ所ニシテ其内十四ヶ所ハ本訴ヲ説明セラレシ  
爲メノ設言ナレハ敢テ異論ナシト雖モ其餘六ヶ所ノ買得及ヒ賣得  
セシトノ文詞ハ特ニ從前賣買禁制ノ法律ニ抵觸スル不法ノ裁判ナ  
リト思量ス

被告答辨スル要領ハ左ノ如シ

第一條第二條第三條上告ノ論点ハ甲第一號証書關涉ノ地所ハ字辻元ニ非ス該地ハ被告カ長男甚太郎ノ名義ヲ以テ買請ケタルモノニシテ甚太郎持主ノ名義ナレハ甲第一號証書ノ契約ハ甚太郎カ主トシテ取結フヘキ筈ナルニ其儀ナクシテ甚太郎ハ却テ之カ保証人ニ立ナカラ該地字辻元壹反六步ヲ以テ甲第一號証書ニ關涉ノ地ナリトスルハ事實不適當ナルモノナリ又該地ハ慶應二年三月後モ依然トシ甚太郎名義ヲ存シ明治八年中ニ至テ始テ清水純崎カ四男純直ヘ賣渡セシ旨該村檢地帳ニ記載シ戸長ニ於テ同様申立有之カラハ甲第一號證關涉ノ地所ハ字辻元ニ非ラサルナリ而シテ初審ニ於テ被告カ買得シタル田地ハ慶應二年他ヘ賣却セシ義ハ相違無之トアル口供ニ調印セシハ全ク錯誤ニ出タルナリト云ト雖モ最初該地ヲ長男甚太郎ノ名義ヲ以テ買請ケタルモ當時同人ハ未ダ別戸異産ニ非サ

レハ只其名義者タルノミナレハ戸主ノ被告ニ於テ該地ニ關スル甲第一號証書ノ約定ヲ結ヒタリシハ敢テ謂ハレナシトセス而シテ甚太郎モ該地ノ名義者タレハ之カ保証人トナルハ却テ事實ニ適當シタリト謂ヘキモ絶テ障害アルヲ見サルナリ且夫該地ヲ純崎ヘ質地ニ渡シタルハ慶應元年ニシテ慶應二年三月ニ至リ更ニ金拾圓ヲ領収シ不請戻旨ノ確約ヲ爲シタルトハ獨リ被告カ申立シニ非ス純崎カ申立モ相吻合シ原告モ亦初審口供ニ於テ之ヲ他ニ賣却シタルニ相違ナキトノ調印ヲナシタルニ非スヤ既ニ慶應二年三月ニ於テ不請戻ノ確約ヲ爲シタル上ハ其實賣渡ニシテ登時純崎ニ所有ノ權ヲ移シタルモノナレハ假令明治八年ニ至リ始テ持主名義ナル甚太郎ヨリ純崎四男純直ヘ地券書換ノ手順ヲ尽シ其已前ニ在テ之カ手順ヲ解リタルモ事實被告ニ於テハ慶應二年三月ヨリ該地ヲ所有セサリ



シカ故ニ從來世話致遣ハセシ原告所有地ノ德米ト右贈米トノ受領  
 証乙第一號證慶應二寅年ノ部ニ前年ヨリ俵數ヲ減シ新キノ文字ヲ  
 記載シアルカ如ク慶應二年以後甲第一號證書ノ約定ハ消滅シタル  
 コトヲ徵スルニ足ル此ニ由テ是ヲ觀ル原告ガ初審ノ口供ハ眞實ノ  
 口供ナルヘキニ翻テ之ヲ無實ノ口書ニ調印シタリト謂モ他ニ錯誤  
 タルヲ證スヘキモノナケンハ其錯誤タルヲ信用スルヲ得サルナリ  
 但シ作得米ハ毎年平均九斗餘ナル字辻元壹反六歩ノ地所ヲ買得ス  
 ルカ爲ニ年々米四俵即壹石六斗宛ヲ贈ルヘキコトヲ約シタルハ頗  
 ル過當ニ失スルモノ、如シトイヘモ原告トハ當初親腕ノ續柄ナル  
 ナリテ細カニ將來ノ損益ヲ較セス信義上ヨリ成立チタル約定ナレ  
 ハナリ

同第四條ハ被告ニ對スル要点ニ非サレハ別ニ答辨ヲ費ヤサス

同第五條ノ論點ハ字辻元ノ地所ヲ慶應元年純崎ニ質入シタルモノナ  
 レハ其年期中地所質入ノ規則ヲ履行スヘキ筈ナルニ其儀ナク又慶  
 應二年三月ニ不請戻ノ約ヲ爲シ實際賣買ナルハ地所賣買ノ規則  
 ニ據ルヘキニ曾テ之ニ據ルコトヲ爲サスシテ地券發行ノ際ニ臨ミ  
 甚太郎ノ名義ヲ以テ地券ヲ申請ケ明治八年ニ至テ始テ純直ヘ賣渡  
 シ其地券ヲ書換タルヲ見レハ其已前ニ在テ該地所ヲ純崎ヘ渡サ、  
 ルノ證徴ナリト謂ト雖モ素ヨリ契約ハ眞實ヲ旨トスルニ止マルモ  
 ノナレハ規則ヲ履ムト履マサルヲ問ハス被告ト純崎トノ間ニ於テ  
 嘗テ何等ノ苦情モナク既ニ契約ノ結果ヲ示セシ上ハ今更他人ノ喋  
 ヲトシテ喙ヲ容ルヘキモノニ非ス且夫一端甚太郎カ地券ノ名受ヲ  
 爲シ更ニ純崎ノ四男純直ヘ名受換ヲナセシハ地券名受ノ都合ニ依  
 リ双方共議ノ上取計タルマテニ毫モ慶應二年ノ契約ニ矛盾スル

廉ナケレハ該地ハ明治八年ニ至テ初メテ賣渡ノ契約ヲ爲シタルモ  
ノニ非サルヲ明ナリ

同第六條ノ論点ハ甲第一號證關涉ノ地所ヲ慶應二年中被告カ純崎へ  
渡セシト云テ駁シテ該地ハ甚太郎カ名据ナレハ被告ヨリ純崎へ渡  
スヘキ謂レナシト論ト雖モ甚太郎ハ當時別戸異産ニ非レハ被告ニ  
於テハ甚太郎ヨリ渡セシト云ハスシテ概シテ之ヲ被告ヨリ純崎へ  
渡シタリト其實際ヲ云ヒタルモノナレハ敢テ謂ハレシトスヘカラ  
サルナリ且又慶應二寅年三月該地所ヲ純崎へ渡シ登時其所有權ヲ  
同人ニ移シタルカ故ニ固ヨリ甲第一號證書約定ノ贈米ヲ生スヘキ  
筈無之然ルニ終審答書及ヒ口供ニ其年限リ又ハ慶應三卯年已來贈  
米不致トアリテ慶應二寅年分ハ猶ホ贈米致シタリシカ如クニ相聞  
フルハ事實乙第一號證書ニ據ルモ毎年ノ贈米或ヒハ原告ノ都合ニ

依リ年越ニ相成ルコトアルヲ以テ其事實ニ基ツキ申立タル次第ニ  
テ全ク乙第一號証中新キ拾四俵トアルハ慶應二年ノ分ニシテ其年  
ヨリ贈米ハ不致ナリ

同七條ノ論点ハ甲第一號證關涉ノ地所ヲ字辻元ニ非ストシ字池田ノ  
地所ナリト云ト雖モ字池田ノ地所ハ左ニ提供スル讓請証書ノ如ク  
慶應四年ニ於テ始メテ讓受タル地所ナレハ安政年度ノ契約ニハ更  
ニ關係スヘキ謂ハレナキモノナリ被告ハ安政年度ニ於テハ字辻元  
ノ外地所買請ケタルコトナケレハ甲第一號證關涉ノ地所ハ字辻元  
ナルハ論ヲマタサルナリ

本文讓受証書

差入申一札之事

一小塚原町分

- 一 野屋敷三反五畝六步
- 一 藪舖壹反壹畝拾步
- 一 三河島村分
- 一 貳反六畝拾六步

右者小塚原分百姓庄右衛門三河島分百姓喜太郎所持罷在候處寛文六年當屋敷ニ讓受圍地ニ致置候處此度不用相成候ニ付右庄右喜太郎身寄其許方ニ致返地候處相違無之然上ハ貴殿所持被致右屋敷ニ相掛候御年貢並ニ謂掛等貴殿ヨリ年々上納可被致候右ニ付外ヨリ故障申入ル者無之万一彼是有之候ハ、早速埒明迷惑相掛申間敷候爲後日仍而如件

慶應四辰年八月

池田右近將監内

大澤 兵藏印

小塚原町

百姓

喜右衛門殿

覺

一金貳百兩

右者抱地讓渡候代金儘ニ請取申候以上

池田右近將監内

慶應四辰年八月

大澤 兵藏印

喜右衛門殿

同第八條第九條ハ被告ニ對スル要点ニ非サレハ答辨ヲ費ヤサス  
 上告ノ主點ハ左ノ三項ニアリトス

九八一  
 第一項 宇辻元壹反六步ハ甲第一號証書關涉ノ地所ニアラストノ

第二項 甲第一號証關涉ノ地所ヲ他ヘ渡スコトヲ認可セシコトナシ  
トノコト

第三項 東京裁判所ニ對シ被告ニ於テ買得シタル田地ハ慶應二年  
他ヘ賣却セシ儀ハ相違無之旨無實ノ口書ニ調印セシハ全ク錯誤  
ニ出タルコトヲ証セシトノコト

辨明

上告第一項第二項ノ主点ハ第三項ノ主點ノ辨明如何ヲ竣チ自ラ其  
事理ノ歸着スルヲ得ヘキモノナリトス如何トナレハ原告カ東京裁  
判所ニ於テ爲シタル云々ノ口供ハ錯誤ナリ無實ナリトスル所口ノ  
モノハ他ナシ被告カ慶應二年他人ヘ渡シタリトスル田地ハ甲第一  
號証ニ關係ナキモノナリ若シ果シテ甲第一號証ニ關係ノ田地ヲ渡  
シタルニ相違ナシト承諾シタルモノナルニ於テハ即チ原告カ德米

ヲ得ヘキ利益ヲ失フコトヲ認可シタル道理ナルニ付復タ被告ニ向テ  
滞米ヲ請求スル權理ナキカ故ナレハナリ因テ先第三項ニ對シ上告  
人ハ東京裁判所ニ在テ被告ニ於テ買得シタル田地ハ慶應二年他ヘ  
賣却セシ儀ハ相違無之トノ口供ハ果シテ錯誤ニ出タルコトノ證ヲ述  
ヘタルヤ否ヤヲ審案スルニ今般上告ノ原告即チ控訴原告代人カ控  
訴狀ニ慶應二年中田地賣買不相成ハ舊幕府ノ嚴制ニ候ハ、當時該  
田地賣買可致條理無之然ルニ被告ニ於テ清水喜太郎ヘ賣渡旨申立  
原告ニ於テ誤テ無實ノ口書ニ調印仕リ候ヨリ遂ニ犯制ノ裁判ニモ  
相成候哉ニ奉存云々又明治十一年四月九日ノ口供ニ慶應年度ニ於  
テ原告ト清水純崎トノ間ニ實際賣切ニ付期限ニ至ルモ受戻サ、ル  
旨ヲ契約致シ候トモ地所質入規則ニ照準不致候故右慶應年度ノ契  
約ハ無効ニ屬シ明治八年三月ニ至リ新ニ賣買致シ候モノニ相成候